

# Oracle Enterprise Manager

構成ガイド

リリース 9.0.1

2001 年 10 月

部品番号 : J04225-01

ORACLE®

---

Oracle Enterprise Manager 構成ガイド, リリース 9.0.1

部品番号: J04225-01

原本名: Oracle Enterprise Manager Configuration Guide, Release 9.0.1

原本部品番号: A88769-01

Copyright © 1996, 2001, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されております。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

\* オラクル社とは、Oracle Corporation（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Notice が適用されます。

#### Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

---

---

# 目次

はじめに .....	vii
このマニュアルの対象読者 .....	viii
構成 .....	viii
ドキュメント・セット .....	ix
関連ドキュメント .....	x
表記規則 .....	xi

## 1 概要

製品アーキテクチャ .....	1-2
第1層: 中央コンソール .....	1-3
第2層: 集中化した、スケーラブルで信頼性のある Oracle Management Server .....	1-5
第3層: 管理対象ターゲットおよび自律型 Intelligent Agent .....	1-5
アーキテクチャの拡張性 .....	1-5
配置オプション .....	1-6
クライアント / サーバー配置 .....	1-7
3層配置 .....	1-7
動作保証 .....	1-9
システムおよびハードウェアの要件 .....	1-11

## 2 スタンドアロン

コンソールをスタンドアロンで起動する選択 .....	2-2
スタンドアロン・コンソールの起動 .....	2-4
スタンドアロン・コンソールのツリーへのデータベースの追加 .....	2-6
スタンドアロン・リポジトリ .....	2-8
スタンドアロン・リポジトリのデータベース要件 .....	2-10
スタンドアロン・リポジトリの表領域の作成 .....	2-10
スタンドアロン・リポジトリのデータベース・ユーザーの作成 .....	2-13

## 3 Management Server の構成および管理

Enterprise Manager Configuration Assistant の起動 .....	3-2
リリース 9.0 の新規リポジトリを使用するためのローカル Management Server の構成 .....	3-3
ようこそ .....	3-4
構成操作 .....	3-5
Oracle Management Server の構成 .....	3-7
新規リポジトリ作成オプション .....	3-8
データベースの場所の選択 .....	3-11
SID の変更 .....	3-13
リポジトリのデータベースの選択 .....	3-14
リポジトリへのログイン情報 .....	3-16
リポジトリ・ユーザー表領域の選択 .....	3-18
リポジトリ作成のサマリー .....	3-21
「Configuration Assistant の進行」 ウィンドウ .....	3-22
既存リポジトリを使用するためのローカル Management Server の構成 .....	3-23
構成操作 .....	3-24
Oracle Management Server の構成 .....	3-24
構成パラメータの編集 .....	3-25
管理リージョンの選択 .....	3-26
構成パラメータ・サマリー .....	3-28
リリース 2.x のリポジトリからリリース 9.0 のリポジトリへのアップグレード .....	3-29
Management Server および Enterprise Manager アプリケーションの停止 .....	3-29
リポジトリのバックアップ .....	3-29
Oracle Enterprise Manager 製品のアップグレードの調整 .....	3-30
リポジトリ・アップグレードの Configuration Assistant のステップ .....	3-31
構成操作 .....	3-31

リポジトリのデータベースの選択 .....	3-31
アップグレードのためのリポジトリの選択 .....	3-32
リポジトリへのログイン情報 .....	3-32
リポジトリ更新のサマリー .....	3-32
リポジトリ更新の「Configuration Assistant の進行」 .....	3-33
<b>既存リポジトリの削除 .....</b>	<b>3-33</b>
Management Server および Enterprise Manager アプリケーションの停止 .....	3-33
Configuration Assistant の起動 .....	3-33
「構成操作」でのリポジトリの削除 .....	3-34
削除するリポジトリのデータベースの選択 .....	3-34
削除するリポジトリの選択 .....	3-34
リポジトリの削除オプションの選択 .....	3-35
リポジトリ削除のサマリー .....	3-35
リポジトリ削除の「Configuration Assistant の進行」 .....	3-36
<b>構成後の Management Server の管理 .....</b>	<b>3-36</b>
ローカル Management Server の起動 .....	3-36
Windows でのローカル Management Server の起動 .....	3-36
UNIX でのローカル Management Server の起動 .....	3-38
Management Server のステータスのチェック .....	3-38
ローカル Management Server の停止 .....	3-40

## 4 Management Server への接続時のコンソールの構成

Management Server へのログインによるコンソールの起動の選択 .....	4-2
Management Server 接続によるコンソールの起動 .....	4-4
使用環境のノードの検出 .....	4-6
管理者アカウントの作成 .....	4-8
データベースの優先接続情報リストへの OEM_MONITOR ロールの付与 .....	4-9
ジョブ・システムの有効化 .....	4-10
Windows NT の新規ユーザー・アカウントの作成 .....	4-11
既存の Windows NT ユーザー・アカウントへの権限の割当て .....	4-11
Intelligent Agent ユーザーとしての Windows NT ドメイン・ユーザーの構成 .....	4-12
<b>ポケットベル・サーバーの構成および起動 .....</b>	<b>4-13</b>
ポケットベル・サーバーの構成 .....	4-14
ポケットベル・サーバーの追加 .....	4-15
ポケットベル・キャリアの追加 .....	4-15
ポケットベル通知の作業環境の指定 .....	4-17

電子メール・サーバーの構成 .....	4-17
Enterprise Manager レポート作成の構成 .....	4-18
Oracle HTTP Server の起動および停止 .....	4-18
REPORTS_USER 管理者パスワードの変更 .....	4-19
oemctl configure rws スクリプトの実行 .....	4-19
ダイヤルアップ回線を使用する場合のコンソールの構成 .....	4-20

## 5 Web ブラウザからの Enterprise Manager の実行

Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager の実行 .....	5-2
クライアント・インストール .....	5-3
サーバー側インストール .....	5-3
クライアントでのブラウザベースの Oracle Enterprise Manager の実行 .....	5-5
OEM_Webstage の Web サーバーおよびディレクトリ・マッピングの構成 .....	5-8
Apache 1.3.9 以上 .....	5-8
Internet Information Server (IIS) 4.0 .....	5-10

## 6 Oracle Management Server のチューニング

ping 間隔の設定 .....	6-2
最大発信接続数の設定 .....	6-2
最大着信接続数の設定 .....	6-2
Management Server 再試行間隔の設定 .....	6-3
一時的なネットワーク障害を許容する設定 .....	6-4

## A ディレクトリ構造

\$ORACLE_HOME/sysman/ ディレクトリ .....	A-2
\$ORACLE_HOME/sysman/config/ ディレクトリ .....	A-3

## B ログिंगおよびトレースのアクティブ化

Intelligent Agent のトレース / ログिंग .....	B-2
Management Server のトレース / ログング .....	B-2
Management Server のトレース .....	B-2
Management Server のログング .....	B-3
Enterprise Manager クライアント・アプリケーションのトレース .....	B-5
ブラウザベースの Enterprise Manager のトレース .....	B-6
ポケットベル・サーバーのトレース .....	B-7
SQL エンジンのトレース .....	B-8
Management Pack アプリケーションのトレースおよびログング .....	B-9

## C 一般的なリポジトリのガイドライン

リポジトリのサイズ設定 .....	C-1
-------------------	-----

## D グローバリゼーション・サポート

英語以外の言語のブラウザベースの Enterprise Manager へのアクセス .....	D-2
コンソールの言語設定 .....	D-2

## E Windows 2000 での Enterprise Manager の使用

Windows NT と Windows 2000 間の Enterprise Manager の使用における差異 .....	E-2
手順 .....	E-2
Windows 2000 のサービスの操作 .....	E-2
Windows 2000 の新規ユーザーの作成 .....	E-3
Windows 2000 ユーザーへの権限の割当て .....	E-3

## F トラブルシューティング

オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題の報告 .....	F-2
マニュアル .....	F-2
MetaLink .....	F-2
オラクル社カスタマ・サポート・センター .....	F-4
<b>Enterprise Manager Configuration Assistant のトラブルシューティング .....</b>	<b>F-5</b>
Enterprise Manager Configuration Assistant のエラー .....	F-5
リポジトリ・データベースのデフォルト表領域に十分な空き領域がない .....	F-7
OEM_REPOSITORY 表領域が存在しない場合の作成 .....	F-7
別の表領域の作成 .....	F-8
既存の表領域のサイズを拡張 .....	F-9
リポジトリ操作には不十分なデータベース・パラメータ .....	F-10
<b>omsconfig.properties ファイルに関する許可の変更 .....</b>	<b>F-11</b>
<b>Management Server のトラブルシューティング .....</b>	<b>F-13</b>
Management Server がデフォルト以外の Oracle ホームから正しく実行できない場合 .....	F-13
Management Server が起動されない場合 .....	F-14
oms.log ファイル .....	F-14
oms.nohup ファイル .....	F-14
Windows NT のイベント・ログ .....	F-15
oemctl バッチ・ファイル .....	F-16
Management Server 起動時のエラー・メッセージ .....	F-16
クライアント・アクセス用の Management Server の変更 .....	F-17
マルチ NIC マシンでの Management Server の実行 .....	F-17
<b>ポケットベル・サーバーのトラブルシューティング .....</b>	<b>F-18</b>
<b>Web ブラウザのトラブルシューティング .....</b>	<b>F-18</b>
コンソールの停止 .....	F-18
コンソールで Web ブラウザが起動しない場合 .....	F-19
リポジトリ・ユーザーのパスワード変更 .....	F-19
パスワードの再設定 .....	F-20
日付書式の設定 .....	F-20

## G キーボード・ナビゲーション

### 索引



---

# はじめに

『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』では、Oracle® Enterprise Manager リリース 9.0.1 の構成方法を説明します。

Oracle Enterprise Manager は、異種環境を管理するための統合ソリューションを提供するシステム管理ツールです。グラフィカル・コンソール、Agent、共通サービスおよびツールの組合せにより、Oracle 製品を管理するための統合された総合システム管理プラットフォームを提供します。

構成手順の完了後、Oracle Enterprise Manager の使用方法について、Oracle Enterprise Manager のオンライン・ヘルプまたは『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

プログラムの更新および Oracle Enterprise Manager の使用上の重要な注意は、『Oracle Enterprise Manager 日本語リリース・ノート』を参照してください。

# このマニュアルの対象読者

このマニュアルは、Oracle Enterprise Manager を構成するデータベース管理者およびシステム管理者を対象としています。読者は、Oracle と、実行する管理作業に精通している必要があります。

Oracle9i の一般情報とその機能は、『Oracle9i データベース概要』を参照してください。データベース管理手順の詳細は、Oracle9i ドキュメント・セットを参照してください。Oracle9i ドキュメント・セットには、Oracle Enterprise Manager の各種ツールで実行できるデータベース管理作業についての、具体的に詳細な説明が記載されています。また、Oracle9i ドキュメント・セットには、データベースの最適な管理方法についてのアドバイスも記載されています。

読者は、使用している Microsoft Windows または UNIX システムの操作についても精通している必要があります。必要に応じて、ご使用の Windows または UNIX システムのドキュメントを参照してください。

# 構成

このマニュアルは、次の章と付録から構成されています。

章	説明
第 1 章 「概要」	この章では、Oracle Enterprise Manager 構成の概要について説明します。概要では、Oracle Enterprise Manager のアーキテクチャ、配置方法、動作保証およびシステムとハードウェアの要件について説明されます。
第 2 章 「スタンドアロン」	この章では、コンソールをスタンドアロンで実行するための構成の要件について説明します。
第 3 章 「Management Server の構成および管理」	この章では、Enterprise Manager フレームワーク全体（たとえば、コンソール、Management Server および Intelligent Agent）を配置する場合に、中間層の Management Server マシンで実行する必要がある追加の構成タスクについて説明します。
第 4 章 「Management Server への接続時のコンソールの構成」	この章では、中間層の Management Server への接続時の Enterprise Manager コンソールの構成方法を説明します。
第 5 章 「Web ブラウザからの Enterprise Manager の実行」	この章では、Web ブラウザを介しての Enterprise Manager の実行に必要な追加のタスクを説明します。

章	説明
第 6 章 「Oracle Management Server のチューニング」	この章では、Oracle Management Server のチューニングについて説明します。
付録 A 「ディレクトリ構造」	この付録では、Oracle Enterprise Manager リリース 9.0 のディレクトリ構造について説明します。
付録 B 「ロギングおよびトレースのアクティブ化」	この付録では、Enterprise Manager のロギングおよびトレース用のパラメータの指定について説明します。
付録 C 「一般的なリポジトリのガイドライン」	この付録では、Oracle Enterprise Manager のリポジトリに対して、記憶域要件とディスクの領域割当てを決定する際のガイドラインについて説明します。
付録 D 「グローバリゼーション・サポート」	この付録では、Enterprise Manager が翻訳されている言語を記載します。
付録 E 「Windows 2000 での Enterprise Manager の使用」	この付録では、Windows NT と Windows 2000 間の、Enterprise Manager の使用における差異を説明します。
付録 F 「トラブルシューティング」	この付録では、考えられるトラブルシューティングの問題を説明します。
付録 G 「キーボード・ナビゲーション」	この付録では、標準的ではないキー操作を説明します。

## ドキュメント・セット

Oracle Enterprise Manager リリース 9.0 のドキュメント・セットには、次のドキュメントが含まれています。

- 『Oracle Enterprise Manager 日本語リリース・ノート』には、Oracle Enterprise Manager の最新情報に関する重要な説明とその他の最新ニュースに加えて、製品の実際の動作とドキュメントの説明との違いが記載されています。
- 『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』には、Oracle Enterprise Manager システムの構成に関する情報が記載されています。
- 『Oracle Enterprise Manager 概説』には、Enterprise Manager システムの概要が記載されています。
- 『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』には、Oracle Enterprise Manager システムのコンポーネントおよび機能が記載されています。
- 『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』には、Oracle Intelligent Agent の管理方法が記載されています。

- 『Oracle Enterprise Manager メッセージ・マニュアル』には、Oracle Enterprise Manager のエラーについて、考えられる原因と推奨される処置が記載されています。

Oracle Enterprise Manager ドキュメント・セットの他にも、Oracle Enterprise Manager では、各種コンポーネントの詳しいオンライン・ヘルプが提供されています。

## 関連ドキュメント

関連資料は、次のとおりです。

- Oracle9i の新機能、新規オプションおよび拡張機能の詳細は、『Oracle9i データベース新機能』を参照してください。Oracle9i の各エディション（Standard Edition、Enterprise Edition および Personal Edition）で使用可能な機能が記載されています。Oracle9i で使用可能なドキュメントが参照され、非推奨機能または非サポート機能が記載されます。
- Oracle サーバーの稼働方法の詳細については、『Oracle9i データベース概要』で、他の Oracle サーバーのマニュアルに含まれる多くの実用的な情報の基礎概念が説明されます。
- Oracle データベース・システムの操作管理の詳細は、『Oracle9i データベース管理者ガイド』を参照してください。このマニュアルには、Oracle データベースの作成、データベースの円滑な操作の確認、およびデータベース使用の監視についての情報が記載されます。
- Oracle の SQL コマンドおよび関数の詳細は、『SQL\*Plus ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』を参照してください。
- Oracle 製品を使用中に表示されるエラー・メッセージの詳細は、『Oracle9i データベース・エラー・メッセージ』を参照してください。マニュアルに記載された各メッセージには、メッセージ文、メッセージの考えられる原因、および推奨される処置が含まれます。
- Oracle グローバリゼーション・テクノロジーの問題の詳細は、『Oracle9i グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。
- Oracle データベース・システムでの移行、アップグレードおよびダウングレードの計画と実行プロセスの詳細は、『Oracle9i データベース移行ガイド』を参照してください。
- Oracle パフォーマンスを拡張するための、SQL の適切な記述とチューニング、パフォーマンス・ツールの使用およびインスタンス・パフォーマンスの最適化方法の詳細は、『Oracle9i データベース・パフォーマンス・ガイドおよびリファレンス』を参照してください。
- 効率のよいアプリケーション設計に始まり、統計を使用してアプリケーション・パフォーマンスを監視することにより Oracle パフォーマンスを向上させる方法の詳細は、『Oracle9i データベース・パフォーマンス・メソッド』を参照してください。

- データ転送、データ・メンテナンスおよびデータ管理のための **Oracle9i** ユーティリティの使用方法の詳細は、『**Oracle9i データベース・ユーティリティ**』を参照してください。
- **Oracle** のバックアップおよびリカバリの基本概念は、『**Oracle9i バックアップおよびリカバリ概要**』を参照してください。
- **Recovery Manager** ユーティリティを使用するバックアップおよびリカバリ手順の実行に必要な概念情報およびタスクに関する情報は、『**Oracle9i Recovery Manager リファレンス**』および『**Oracle9i Recovery Manager ユーザーズ・ガイド**』を参照してください。
- **Oracle** ネットワーキング・システムの詳細は、ネットワーク固有のドキュメントを参照してください。

## 表記規則

ここでは、このマニュアルで使用されている表記規則を説明します。

### 例

このマニュアルには、コードの例が記載されています。例のテキストは、このマニュアルの本文とは違う書体で示されていますので注意してください。次に示すのは、**SELECT** 文の例です。

```
SELECT * FROM emp
```

このマニュアルで示す例は、大文字と小文字を次の表記規則に基づいて使い分けています。

- **CREATE**、**NUMBER** などのキーワードは大文字で表記してあります。キーワードには特別な意味があります。キーワードは大文字または小文字のどちらでも指定できますが、それらを使用する場合はコード例と同じ表記をする必要があります。
- データベース・オブジェクトとそれらの部分の名前は、**emp** や **empno** のように、小文字で表記してあります。ただし、このマニュアルの本文中では、データベース・オブジェクトとその部分の名前は、大文字で示されています。
- 例では、パラメータがプレースホルダの役割を果たします。パラメータは小文字で表記されます。パラメータは、通常、スキーマ・オブジェクトの名前、**Oracle** データ型または式です。構文図にパラメータがある場合、該当する型のオブジェクトまたは式を代入してください。このマニュアルの本文では、パラメータ名はイタリック体で表記されますので注意してください。

## コマンド構文

- イタリック体は、*application\_name* などの変数に使用します。実際に使用する値を指定してください。
- | は、選択肢を示します。
- {*param1* | *param2* | ...} は {} 内のパラメータの 1 つを指定する必要があることを示します。カッコは入力しないでください。
- [ ] は、オプション・パラメータを示します。カッコは入力しないでください。

この章では、Oracle Enterprise Manager および個別にライセンスを取得できる Management Pack の配布に関連する主要概念および要件について説明します。

- 製品アーキテクチャ
- 配置オプション
- 動作保証
- システムおよびハードウェアの要件

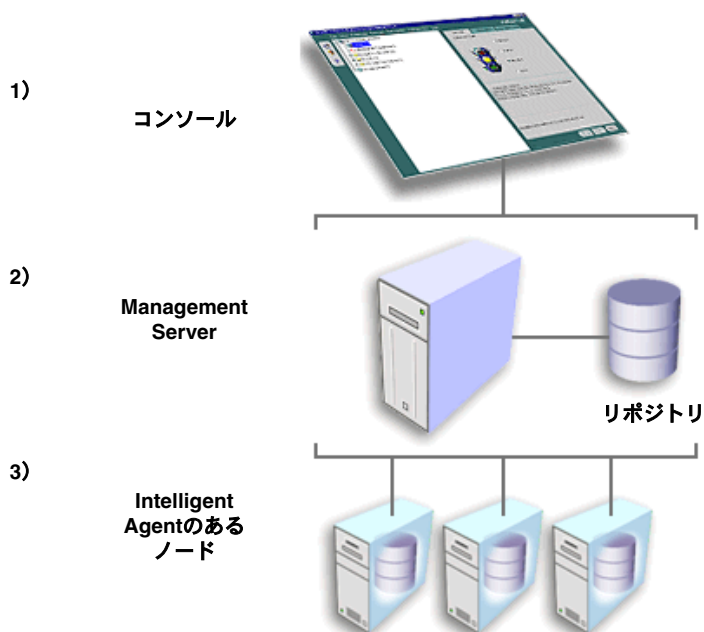
## 製品アーキテクチャ

Oracle Enterprise Manager は、グローバル・エンタープライズを管理および監視する、Oracle の 1 つの統合ソリューションです。Enterprise Manager は、軽量な 3 層アーキテクチャに基づいており、柔軟な配置オプション、24 時間稼働の信頼性および他にはない拡張性を提供します。製品の 3 層アーキテクチャは、次のものから構成されています。

- コンソール（統合アプリケーションおよび Management Pack）
- Management Server およびデータベース・リポジトリ
- Intelligent Agent

Enterprise Manager フレームワークの基礎となるこのアーキテクチャの詳細は、後述の項で説明します。

図 1-1 3 層アーキテクチャ





## 第 1 層 : 中央コンソール

第 1 層の Enterprise Manager クライアントの主要目的は、管理者にすべての管理作業用のユーザー・インタフェースを表示することです。インストールおよびライセンスを取得したものに依拠して、第 1 層クライアントは次のコンポーネントで構成されます。

- コンソール

---

---

**注意：** リリース 9.0 から、Oracle DBA Studio の機能がコンソールに完全に統合されました。

---

---

- 統合される管理アプリケーションには、次のものが含まれます。
  - Oracle Forms Server Manager
  - Oracle Policy Manager
  - OLAP Services
  - Oracle Cube Viewer
  - Oracle Directory Manager
  - Oracle Net Manager
  - Oracle Spatial Index Advisor
  - Oracle Data Guard Manager
  - Oracle LogMiner Viewer
  - SQL\*Plus Worksheet
  - Oracle Text Manager
- 次の Management Pack それぞれに、列記したアプリケーションが含まれます。
  - Oracle Diagnostics Pack
    - \* Oracle Performance Manager
    - \* Oracle Capacity Planner
    - \* Oracle TopSessions
    - \* Oracle Trace
  - Oracle Tuning Pack
    - \* Oracle Expert
    - \* Oracle Index Tuning Wizard
    - \* Oracle SQL Analyze

- \* Oracle Tablespace Map
- \* Reorg Wizard
- \* Outline Editor (Oracle9i の新規アプリケーション)
- \* Outline Management (Oracle9i の新規アプリケーション)
- Oracle Change Management Pack
  - \* Oracle Change Manager
- Oracle Standard Management Pack
  - \* Oracle Performance Manager
  - \* Oracle Index Tuning Wizard
  - \* Oracle Create Baseline
  - \* Oracle Compare Database Objects
  - \* Oracle Advanced Events (データベースおよびノード)
- Oracle Management Pack for Oracle Applications
  - \* Oracle Performance Manager
  - \* Oracle Capacity Planner
  - \* Concurrent Processing Tuning Assistant
  - \* Oracle Applications Advanced Events

第1層のコンソールおよびアプリケーションは、大部分のアプリケーション・ロジック用の第2層の Management Server に基づいているので、これらクライアントを、重要な管理サービスを格納するオーバーヘッドおよび処理負荷なしに実行できます。

## 第2層：集中化した、スケーラブルで信頼性のある Oracle Management Server

Oracle Enterprise Manager の第2層コンポーネントである Management Server は、フレームワーク・エンジンです。Management Server は、集中化されたインテリジェント機能、およびクライアントと管理対象ノード間の制御の分散を維持します。事業のメンテナンス用のバックエンド・アプリケーションおよび重要なサービス（すなわち、イベント・システム、ポケットベル、電子メール通知、レポート作成、ジョブ・システム）を実行します。

この中間層では、第1層クライアントからの要求を処理し、データベース・リポジトリに情報を格納して、第3層の Intelligent Agent を実行するタスクを配布します。

リポジトリは、システム・データ、アプリケーション・データおよび環境全体に配置された管理対象ターゲットの状態を保持するバックエンドの永続格納場所としても機能します。リポジトリに格納されるデータは、1つのリポジトリに接続する1つ以上の Management Server にアクセスする複数の管理者間で共有できます。

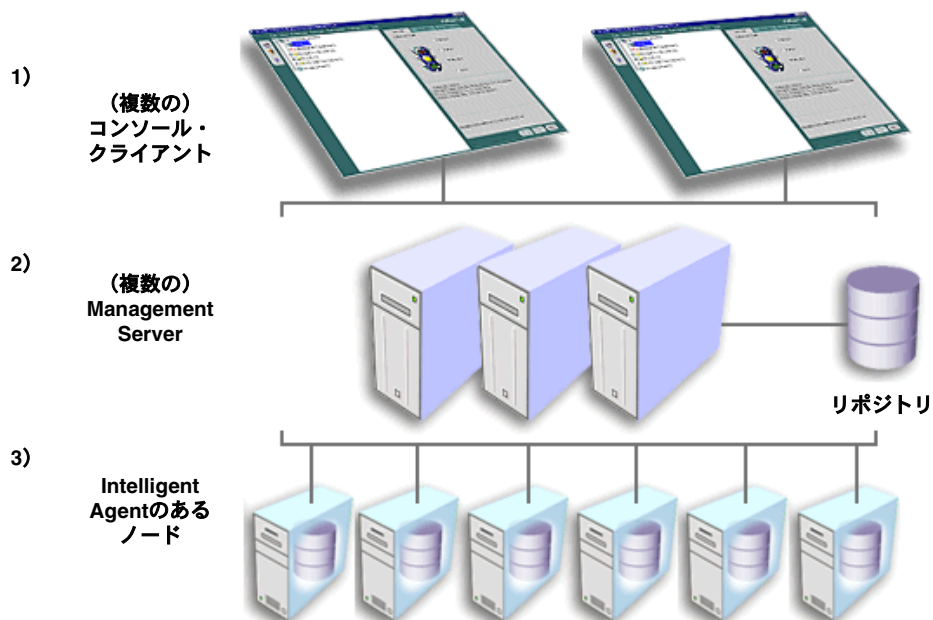
## 第3層：管理対象ターゲットおよび自律型 Intelligent Agent

Enterprise Manager フレームワークの第3層は、管理対象ターゲットおよび Intelligent Agent で構成されています。管理対象ターゲット（たとえば、ノード、データベース、Web サーバー、アプリケーション・サーバー、アプリケーションなど）で、Management Server で指定されたタスクを実行するには、Intelligent Agent が必要です。タスクが割り当てられると、自律型 Intelligent Agent により、管理対象ターゲット、Management Server またはクライアントの状態に関係なく、スケジュールどおりに作業が実行されます。このようなタスクの例として、SQL スクリプトの実行、表領域の使用可能な領域の監視、毎週のデータベース・バックアップの実行、リアルタイム・データベース物理 I/O 率の監視、またはアプリケーション・サーバーの可用性の監視があげられます。

## アーキテクチャの拡張性

重要なフレームワーク機能を提供するために、Enterprise Manager アーキテクチャを、各層で容易に拡張できます。第1層により、複数のクライアントが第2層の1つ以上の Management Server にアクセスできます。Management Server を追加することにより、拡張性および信頼性が増加し、Management Server と1つのリポジトリのグループ化、またはリポジトリを持つ小さなセットへの Management Server の分割の選択肢が増えます。前の構成では、すべての管理者が1つのリポジトリに含まれるデータを共有でき、後の構成は、相互に作用しない自律型ユニットを提供します。最後に、第3層の管理対象サービスおよび Intelligent Agent 数は、業務の要求に応じて増加させることができます。

図 1-2 アーキテクチャの拡張性



Enterprise Manager アーキテクチャの 3 層すべてで、強力な Enterprise Manager フレームワークの基礎を構築します。

## 配置オプション

Enterprise Manager の 3 層アーキテクチャでは、最高レベルの信頼性および拡張性が提供されます。ただし、すべての企業で Enterprise Manager を 3 層のシステムとして実装する必要はありません。つまり、すべての業務で 3 層それぞれを配置する必要も、すべての会社で別々のマシンに各層を配置する必要もありません。Enterprise Manager のアーキテクチャの柔軟性により、多くの配置オプションを使用できます。環境を分析し、一般的な管理ニーズを判断して慎重に計画をたてることで、事業に最適な配置オプションの効果的な選択ができます。次に示すのは、使用可能な配置オプションです。

## クライアント / サーバー配置

クライアント / サーバー配置では、コンソールおよび管理アプリケーションのみが配置されます。中間層の **Management Server** および **Intelligent Agent** はインストールおよび使用されません。このスタンドアロン構成では、クライアントは直接管理対象ターゲットに接続し、管理タスクを実行します。

---

**注意：** Enterprise Manager リリース 9.0 では、このタイプの配置は、データベースに対してのみサポートされています。他のターゲット・タイプは、クライアント / サーバー配置では現在サポートされていません。

---

次の条件の場合、このタイプの配置モデルを使用する必要があります。

- Oracle データベースのみを管理する必要がある場合
- 複数の管理者間で、管理データを共有する必要がない場合
- 潜在的な問題の通知を事前に行う必要がない場合
- 繰り返される管理タスクを自動化する必要がない場合
- Web ブラウザ内からクライアントを実行する必要がない場合

## 3 層配置

3 層配置では、Enterprise Manager フレームワーク全体（コンソール、Management Server とリポジトリ、および Intelligent Agent）のインストールおよび構成が行われます。

次の機能を必要とする場合、このタイプの配置モデルを使用する必要があります。

- いくつかの異なるターゲット・タイプ（たとえば、データベース、Web サーバー、アプリケーション・サーバー、アプリケーションなど）の管理
- 複数の管理者間での管理データの共有
- 潜在的な問題の事前の通知
- 繰り返される管理タスクの自動化
- Web ブラウザ内からのクライアントの実行

Enterprise Manager の 3 層配置で最適なパフォーマンスを得るには、次のガイドラインに従ってください。

- Management Server マシンを、長期間 CPU または RAM 不足で実行しないでください。このようなリソース不足を回避する適切な方法は、Management Server を Management Server またはデータベース・リポジトリ、あるいはその両方専用のマシンで実行することです。したがって、アプリケーションを同時に実行することで起こる競合は、要因ではありません。

- ほとんどの Enterprise Manager 管理者が接続する Local Area Network (LAN) に、Management Server をインストールします。ただし、パフォーマンスに大きな影響を与える過剰なネットワーク通信量が発生する場合があります。
- 最大 400 ターゲットを含む企業内の連結した 70 すべての管理対象ノードに Management Server をインストールします。この推奨事項は、Management Server が 1-11 ページで示された推奨ハードウェア要件を満たすマシンにある場合に、適用可能です。1 つの Management Server が管理できるノードおよびターゲット数は、Management Server を実行するマシンのタイプに応じて変更できます。たとえば、Management Server がインストールされたマシンが指定のハードウェア要件を上回る場合、推奨管理対象ノードおよびターゲット数が増加します。
- Management Server 間のフォールト・トレラントおよびロード・バランスを確保するには、少なくとも 2 つの Management Server を配置します。

広範囲なグローバル配置、または一連の WAN および LAN にわたる配置に対する管理リージョンを定義します。管理リージョンにより、リージョン間またはネットワーク間通信が発生しなくなります。また、管理リージョンより、ファイアウォール境界を越えたノードのマッピングが可能になります。

**注意：** Enterprise Manager リリース 9.0 で紹介される機能、管理リージョン定義の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

## 動作保証

選択した配置方法に関係なく、次のオペレーティング・システムの動作保証は、Oracle Enterprise Manager リリース 9.0 の各種コンポーネントに適用されます。

表 1-1 オペレーティング・システム・サポート

	Windows NT 4.0 Service Pack 6a	Windows 2000	Windows 98	Sun SPARC Solaris 64 ビット 2.6、2.7、 2.8	HP-UX 64 ビット 11.0	IBM AIX 64 ビット 4.3.3	Compaq Tru64 5.0a、5.1	Intel Linux 32 ビット SuSe 7.1 Kernal 2.4 glib 2.2
コンソール	○	○	○	○	○	○	○	○
統合アプリケーション	○	○	○	○	○	○	○	○
パック： Tuning Pack	○	○	○	○	○	○	○	○
Diagnostics Pack								
Change Management Pack								
Standard Management Pack								
Management Pack for Oracle Applications								
Management Server	○	○		○	○	○	○	○
中間層で自動的に インストールされ る Oracle HTTP Server 1.3.12	○	○	○	○	○	○	○	○

**注意：** プラットフォーム固有の詳細情報は、指定のプラットフォームのリリース・ノートを参照してください。

Pack のリストされた次のコンポーネントは、UNIX プラットフォームでは使用できません。

- SQL Analyze
- Expert
- Index Tuning Wizard
- Trace Data Viewer

ブラウザから Enterprise Manager の実行を選択した場合、次の動作保証も適用されます。

表 1-2 Web 対応 Enterprise Manager のオペレーティング・システム・サポート

	Windows NT 4.0 Service Pack 6a	Windows 2000	Windows 98	Sun SPARC Solaris 2.6、 2.7、2.8
シン・クライアント (Oracle HTTP Server 1.3.12)	○	○	○	
Apache 1.3.9 以上	○	○		○
Microsoft Internet Information Server (IIS) 4.0 以上	○	○		
Netscape Navigator® 4.7 以上	○	○	○	
Microsoft® Internet Explorer 5.0 以上	○	○	○	

**注意：** 前述の表のシン・クライアントは、コンソール、すべての統合アプリケーション、および Oracle Directory Manager、Oracle Net Manager、Oracle Expert、SQL Analyze、Oracle Index Tuning Wizard、Trace Data Viewer および Oracle Capacity Planner を除くすべての Management Pack アプリケーションを示しています。これらのコンポーネントは、Web 対応していません。



## システムおよびハードウェアの要件

Enterprise Manager の配置方法を決定し、動作保証を確認した後、インストールおよび構成の前に次のシステムおよびハードウェア要件が満たされているか確認します。

**注意：** FAT Windows ベースのオペレーティング・システムにおけるハード・ディスク領域の要件は、最大で次に示す値の 4 倍必要になります。

表 1-3 システムおよびハードウェアの要件

コンポーネント	ディスク領域	最小プロセッサ / RAM	推奨プロセッサ / RAM
コンソール	510MB	Pentium 166 / 64MB SPARC 20/128MB	Pentium 1 266/128MB SPARC Ultra 1/128MB
Oracle Diagnostics Pack	515MB	Pentium 166 / 64MB SPARC 20/128MB	Pentium 1 266/128MB SPARC Ultra 1/128MB
Oracle Tuning Pack	511MB	Pentium 166 / 64MB SPARC 20/128MB	Pentium 1 266/128MB SPARC Ultra 1/128MB
Oracle Change Management Pack	625MB	Pentium 166 / 64MB SPARC 20/128MB	Pentium 1 266/128MB SPARC Ultra 1/128MB
Oracle Management Pack for Oracle Applications	511MB	Pentium 166 / 64MB SPARC 20/128MB	Pentium 1 266/128MB SPARC Ultra 1/128MB
Oracle Standard Management Pack	625MB	Pentium 166 / 64MB SPARC 20/128MB	Pentium 1 266/128MB SPARC Ultra 1/128MB
Management Server	730MB	Pentium 266/128MB SPARC Ultra 1/128MB	Pentium II 300/256MB SPARC Ultra 1/256MB
Enterprise Manager Web サイト	820MB	Web サーバーに対応	Web サーバーに対応

**注意：** この要件では、Enterprise Manager リポジトリに対してデータベースがすでに存在していると仮定しています。データベースがインストールされていない場合は、インストールする必要があります。Oracle データベースに対して推奨されるシステムおよびハードウェアの要件は、対象のデータベース・リリースのインストール・ガイドを参照してください。



---

## スタンドアロン

リリース 9.0 から、Enterprise Manager コンソールまたはその他各種の Enterprise Manager アプリケーションを起動する際、製品をスタンドアロンで起動するか（すなわち、中間層の Management Server に接続しない）、Management Server にログインするか選択するよう要求されます。

コンソールをスタンドアロンで起動すると、1 人の管理者がターゲット・データベースに直接接続して、簡単なデータベース・スキーマ、インスタンス、記憶域、セキュリティおよびその他のデータベース・タスクを実行できます。

スタンドアロンで起動する場合、中間層の Management Server またはターゲット・マシンの Intelligent Agent は必要ありません。

この章では、コンソールをスタンドアロンで実行するための構成の要件について説明します。

## コンソールをスタンドアロンで起動する選択

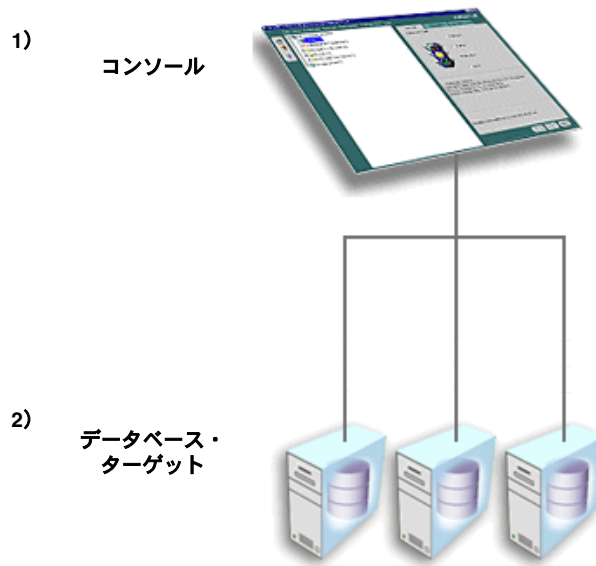
Enterprise Manager コンソールの起動時、製品をスタンドアロンで起動するか、Management Server にログインするかを選択するよう要求されます。

図 2-1 Oracle Enterprise Manager ログイン



管理対象ターゲットに直接接続し、管理タスクを実行する場合、スタンドアロンでのコンソールの起動を選択します。Enterprise Manager リリース 9.0 では、スタンドアロン・コンソールでサポートされているのは、データベース・ターゲットへの直接接続のみです。他のタイプのターゲットは、現在サポートされていません。

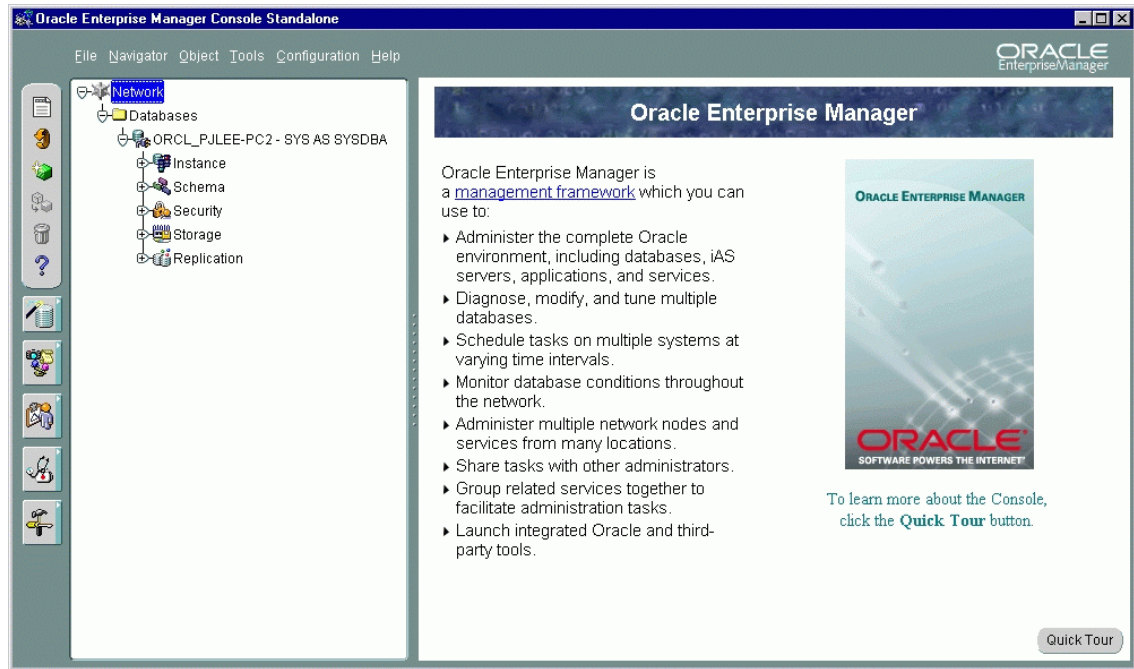
図 2-2 スタンドアロンの構成



スタンドアロンで起動する場合、中間層の Management Server または管理対象ターゲットの Intelligent Agent は必要ありません。したがって、コンソールをスタンドアロンで起動した場合、Management Server および Intelligent Agent を介して通常使用可能な次に示す機能にはアクセスできません。

- 異なるいくつかのターゲット・タイプ（たとえば、データベース、Web サーバー、アプリケーション・サーバー、アプリケーションなど）の管理
- 複数の管理者間での管理データの共有
- 潜在的な問題の事前の通知
- 繰り返される管理タスクの自動化
- バックアップおよびデータ管理ツール
- レポートのカスタマイズ、スケジューリングおよび公開
- Web ブラウザ内からのクライアントの実行

図 2-3 スタンドアロン・コンソール



## スタンドアロン・コンソールの起動

Windows ベースのプラットフォームで、Windows の「スタート」メニューからコンソールを起動します。

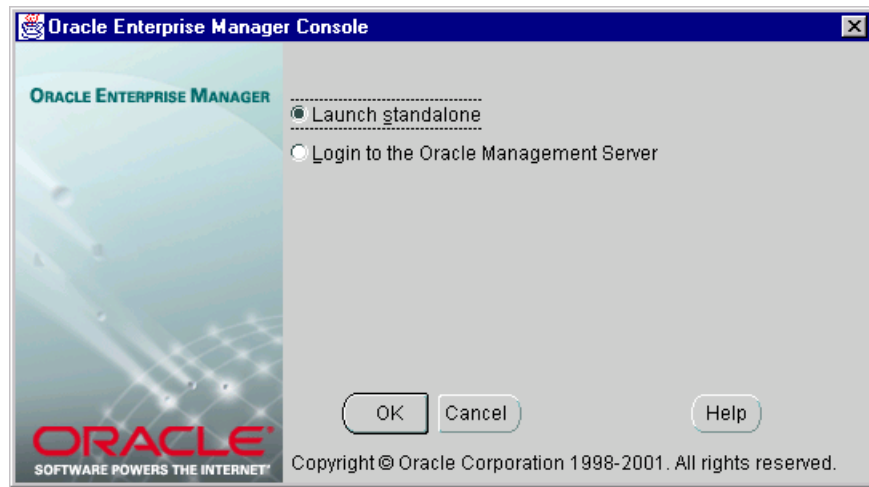
サポートされているプラットフォームで、次のコマンドを使用し、コマンドラインからコンソールを起動します。

```
oemapp console
```

UNIX プラットフォームでは、コマンドラインの `oemapp` 部分は大文字と小文字が区別されるので、小文字で入力してください。

コンソールの起動方法にかかわらず、「コンソール」ログイン・ダイアログが表示されます。

図 2-4 Enterprise Manager ログイン



ダイアログが表示されたら、「スタンドアロンで起動」を選択し、「OK」を押します。

---

**注意：** 次回ログインする際、前回のログインの選択が「スタンドアロンで起動」か「Oracle Management Server へログイン」かが確認されます。「Oracle Management Server へログイン」を選択した場合、Management Server が確認されます。

---

コンソール・ログインを回避するには、サポートされているオペレーティング・システムのコマンドラインに次のコマンドを入力します。

```
oemapp console oem.loginmode=standalone
```

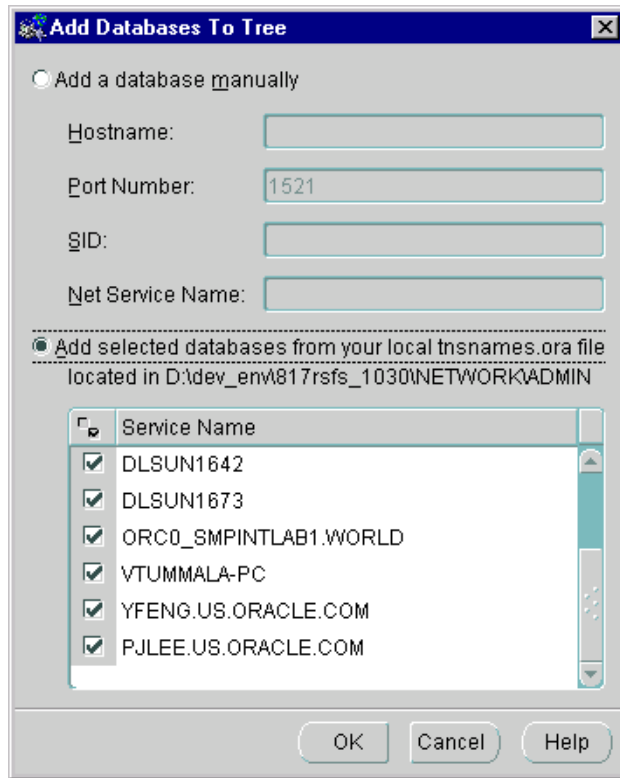
このコマンドの入力により、スタンドアロン・コンソールを即座に表示できます。

スタンドアロン・コンソールを最初に起動した時点では、管理対象のデータベースが追加されていないため、スタンドアロン・コンソールの左側のパネルには何も表示されません。「データベースをツリーに追加」ダイアログ・ボックスが自動的に表示され、ここでナビゲータ・ツリーにデータベースを追加できます。

## スタンドアロン・コンソールのツリーへのデータベースの追加

「データベースをツリーに追加」ダイアログは、「ナビゲータ」メニューからも表示可能です。

図 2-5 「データベースをツリーに追加」ダイアログ



「データベースをツリーに追加」ダイアログ・ボックスでは、ネット・サービス名を手動で入力するか、またはローカルの `tnsnames.ora` ファイルから追加できます。

### 手動によるデータベースの追加

次のフィールドに手動で入力し、スタンドアロン・コンソールのナビゲータ・ツリーにデータベースを追加できます。

- **SID:** データベース・システムの識別子で、通常は `ORCL` などのインスタンス名。
- **ホスト名:** データベースが格納されているマシン名またはノード名。



- ポート番号: データベース・リスナーのポート・アドレスで、通常は 1521 または 1526。
- ネット・サービス名: マシンへの接続時にデータベースを一意に識別する名前。通常はグローバル・データベース名です。

たとえば、ORCL.world. になります。

---

---

**注意:** データベースを手動で追加すると、  
<Oracle\_Enterprise\_Manager\_Home>/network/admin ディレクトリ  
の tnsnames.ora ファイルが自動的に更新されます。

---

---

### ローカルの tnsnames.ora ファイルから選択したデータベースを追加

Oracle Enterprise Manager ホームのローカルの tnsnames.ora ファイルからデータベース・サービス名を読み込み、スタンドアロン・コンソールのナビゲータ・ツリーに移入できます。「データベースをツリーに追加」ダイアログには、tnsnames.ora ファイルに保存されているデータベースがリスト表示され、ここでデータベースを選択または選択解除できます。「サービス名」の左側の列ヘッダーをクリックし、すべてのデータベースを選択または選択解除します。すべてのデータベースを選択解除した場合は、チェックボックスでデータベースを個別に選択できます。

---

---

**注意:** 現在、TCP/IP サービス名のみスタンドアロン・コンソールで手動で入力できます。他のネットワーク・プロトコルが必要な場合は、Oracle Net Configuration Assistant を使用して、tnsnames.ora ファイルにプロトコルを入力して追加します。tnsnames.ora ファイルから選択したサービスをインポートする場合には、すべてのプロトコルがサポートされます。

---

---

ツリーにデータベースを追加後、スタンドアロン・コンソールを使用した管理タスクの実行方法の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

## スタンドアロン・リポジトリ

スタンドアロン・コンソールには、いくつかの統合アプリケーションが含まれます。これら統合アプリケーションの中で、次のものには、情報を保存するスタンドアロン・リポジトリが必要です。

- Change Manager
- Oracle Expert
- Oracle SQL Analyze
- Oracle Index Tuning Wizard
- Oracle Tablespace Manager

---

**注意：** スタンドアロン・リポジトリと Management Server で使用されるリポジトリは、スタンドアロン・リポジトリが 1 人のユーザーが使用するのに対して、Management リポジトリは複数ユーザーに使用される点で異なります。

---

前述のスタンドアロン・アプリケーションのいずれかに最初にアクセスすると、スタンドアロン・リポジトリ・スキーマを所有するデータベース・ユーザーを作成するよう要求されます。ユーザーがすでに作成されている場合は、ユーザー名およびパスワードを指定するよう要求されます。

図 2-6 データベース・ユーザー作成のプロンプト

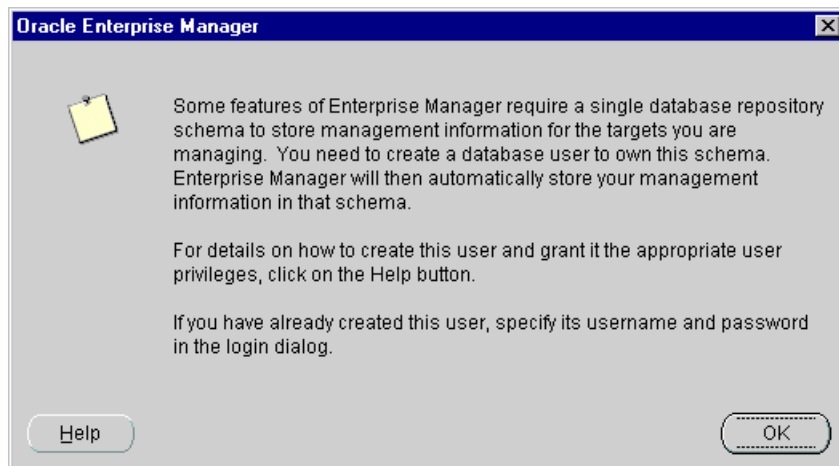


図 2-7 リポジトリ・ログイン



このデータベース・ユーザーには、特定のロールおよび権限が必要です。スタンドアロン・リポジトリ・スキーマを所有する新しいデータベース・ユーザーを作成することをお勧めします。また、特定の表領域属性がスタンドアロン・リポジトリには必要ですので、新しい表領域も作成する必要があります。ユーザーおよび表領域が作成されると、ユーザーのユーザー名およびパスワードを指定できます。スタンドアロン・アプリケーションでは、スタンドアロン・リポジトリが自動的に作成されます。

スタンドアロン・リポジトリを必要とするスタンドアロン・アプリケーションにその後アクセスすると、それらアプリケーションではすべて、同じスタンドアロン・リポジトリが使用されます。

---

**注意：** スタンドアロン・アプリケーションを起動するたびに、スタンドアロン・リポジトリ・ダイアログの要求を表示する必要はありません。「パスワードを保存し、次回はリポジトリに自動的にログイン」チェックボックスをクリックし、次からの使用のために接続情報を保存できます。

---

## スタンドアロン・リポジトリのデータベース要件

次のデータベースのリリースは、スタンドアロン・リポジトリでサポートされています。

- Enterprise Edition または Standard Edition のリリース 9.0
- Enterprise Edition または Standard Edition のリリース 8.1.7
- Enterprise Edition または Standard Edition のリリース 8.1.6
- Enterprise Edition のリリース 8.0.6（オブジェクト・オプションがインストールされており、使用可能な場合）

リポジトリを配置するデータベースにオブジェクト・サポートがあることを確認する必要があります。ない場合は、リポジトリの作成は失敗します。オブジェクト・サポートのある別のデータベースを選択するか、選択したデータベースにオブジェクト・サポートをインストールして使用可能にします。

---

---

**注意：** オブジェクト・サポートは、データベースのリリース 9.0、8.1.7 および 8.1.6 では、デフォルトでインストールされ、使用可能になっています。ただし、Enterprise Edition データベースのリリース 8.0.6 では、デフォルトではインストールされず、使用可能ではありません。

---

---

## スタンドアロン・リポジトリの表領域の作成

次の属性で、表領域を作成します。

- タイプ： パーマネント
- 8i 以上のデータベースの記憶域属性：
  - エクステンツ管理： ローカルでの管理
- 8i より前のデータベースの記憶域属性：
  - 初期サイズ： 16K
  - 次のサイズ： 128K
  - 最小サイズ： 16K
  - 増分サイズ： 0%
  - 最小値： 1
  - 最大値： Unlimited
- データファイル属性：
  - サイズ：
    - \* 2KB ブロックの場合： 16MB

- \* 4KB ブロックの場合: 24MB
- \* 8KB ブロックの場合: 32MB
- \* 8KB を超えるサイズの場合: 64MB
- 既存ファイルを再使用: Yes
- AUTOEXTEND: Yes
- AUTOEXTEND 増分: 5MB
- AUTOEXTEND 最大値: 2000MB

スタンドアロン・リポジトリの表領域を作成するには、まずスタンドアロン・リポジトリを配置するデータベースが、2-10 ページで説明した要件を満たしていることを確認して選択します。次に、この項で説明する手順に従ってください。

1. スタンドアロン・コンソールを起動します。

- Windows の場合

Windows の「スタート」メニューからスタンドアロン・コンソールを起動できます。

- UNIX の場合

コマンドラインから次のコマンドを使用して、スタンドアロン・コンソールを起動できます。

```
oemapp console
```

ログイン・ダイアログが表示され、データベースに直接接続するには、「スタンドアロンで起動」を選択して「OK」を押します。

2. ナビゲータ・ツリーのデータベース・ノードをダブルクリックし、NORMAL 権限を持つユーザーとしてデータベースに接続します。
3. 「オブジェクト」メニューから「作成」を選択します。作成ウィンドウが表示されます。
4. 作成ウィンドウのデータベース・ノードを展開し、「表領域」を選択します。次に「作成」ボタンをクリックします。「作成 表領域」プロパティ・シートが表示されます。
5. 「作成 表領域」プロパティ・シートの「一般」ページで、次のようにします。
  - a. 新しい表領域の名前として OEM\_REPOSITORY と入力します。
  - b. 永続的なデータベース・オブジェクトの保持に、表領域が使用されるように指定します。
6. 「データ・ファイル」セクションに、新しいデータ・ファイルのサイズを指定します。「ファイル名」および「ファイル・ディレクトリ」の列には、デフォルトの内容が自動的に設定されます。データファイルは、データベースのバージョンによって、OEM\_REPOSITORY.dbf または OEM\_REPOSITORY.ora と呼ばれます。

7. OEM\_REPOSITORY.dbf の隣にあるプラス記号を右クリックし、「編集」を選択します。「作成 データファイル」プロパティ・シートが表示されます。
8. 「作成 データファイル」の「一般」ページで、「既存ファイルを再使用」ボックスを選択します。
9. 「作成 データファイル」の「記憶域」ページで、適切な属性を入力します。
  - a. 「満杯時に自動的にデータファイルを拡張 (AUTOEXTEND)」ボックスを選択して、データベースでこれ以上の領域が必要になった場合に、サイズが自動的に拡張されるようにします。
  - b. 「増分サイズ」で 5MB を指定します。
  - c. 「最大サイズ」で 2000MB を指定します。
10. 「作成 データファイル」プロパティ・シートの「OK」ボタンをクリックします。
11. 「作成 表領域」プロパティ・シートの「記憶域」ページで、データベースのバージョンに応じて適切な属性を入力します。

9.0、8.1.7 および 8.1.6 データベースの場合、領域管理の方法として、「ローカルでの管理」を選択します。

8.0.6 データベースの場合：

- 「初期サイズ」は 16K
  - 「次のサイズ」は 128K
  - 「最小サイズ」は 16K
  - 「増分サイズ」は 0%
  - 「最小値」は 1
  - 「最大値」は「UNLIMITED」
12. 「作成 表領域」プロパティ・シートの「作成」ボタンをクリックします。

## スタンドアロン・リポジトリのデータベース・ユーザーの作成

スタンドアロン・リポジトリの所有者は、データベース・ユーザーです。リポジトリを所有するデータベース・ユーザー（リポジトリ・スキーマ・ユーザー）は、Enterprise Manager でスタンドアロン・リポジトリを作成する前に作成する必要があります。

スタンドアロン・リポジトリを所有するデータベース・ユーザーを作成するには、この項で説明する手順に従ってください。

1. スタンドアロン・コンソールを起動します。
2. ナビゲータ・ツリーのデータベース・ノードをダブルクリックし、NORMAL ロールを持つユーザーとしてデータベースに接続します。
3. 「オブジェクト」メニューから「作成」を選択します。作成ウィンドウが表示されます。
4. 作成ウィンドウのデータベース・ノードを展開し、「ユーザー」を選択します。次に「作成」ボタンをクリックします。「ユーザー作成」プロパティ・シートが表示されます。
5. 「一般」ページで、ユーザー名およびそのパスワードを指定し、デフォルト表領域として OEM\_REPOSITORY を、一時表領域として TEMP を選択します。
6. 「ロール」ページで、リポジトリ・ユーザーに CONNECT および SELECT\_CATALOG\_ROLE ロールを付与します。
7. 「システム権限」ページで、リポジトリ・ユーザーに CREATE TRIGGER、CREATE PROCEDURE、EXECUTE ANY PROCEDURE、CREATE TYPE、EXECUTE ANY TYPE、SELECT ANY TABLE および (9i の場合) SELECT ANY DICTIONARY 権限を付与します。
8. 「割当制限」ページで、OEM\_REPOSITORY および TEMP に対して無制限を指定します。
9. 「ユーザー作成」プロパティ・シートの「作成」ボタンをクリックします。

表領域およびリポジトリ・ユーザーを作成したら、スタンドアロン・リポジトリを必要とするスタンドアロン・アプリケーションを起動します。

Enterprise Manager の特定の機能でスタンドアロン・リポジトリを必要とし、スタンドアロン・リポジトリ・スキーマを所有する新しいデータベース・ユーザーを作成する必要があることを知らせるダイアログが表示された場合、ユーザーをすでに作成しているので、「OK」をクリックしてダイアログを消します。

リポジトリ・ログインのためにユーザーのユーザー名およびパスワードを指定し、「OK」を押します。スタンドアロン・アプリケーションでは、スタンドアロン・リポジトリが自動的に作成されます。

---

---

**注意：** コンソールをスタンドアロンで使用し、その後フレームワーク全体を配置する場合、スタンドアロン・リポジトリを完全なフレームワーク /Management Server リポジトリに移行できません。このタイプの移行はサポートされていません。スタンドアロン・リポジトリのデータのエクスポート、別のスキーマへのデータのインポート、および Management Server リポジトリでのそのスキーマ作業もサポートされていません。

---

---



---

## Management Server の構成および管理

Enterprise Manager フレームワーク全体（たとえば、コンソール、Management Server および Intelligent Agent）の配置を選択した場合は、中間層の Management Server マシンで追加の構成タスクを実行する必要があります。このようなマシンで、Enterprise Manager Configuration Assistant を使用して Management Server を構成する必要があります。

この章の内容は、次のとおりです。

- ローカル Management Server の構成
  - 新規リポジトリの使用方法
  - 既存のリポジトリの使用方法
- リリース 2.x のリポジトリからリリース 9.0 のリポジトリへのアップグレード
- リポジトリの削除
- 構成後の Management Server の管理

## Enterprise Manager Configuration Assistant の起動

Management Server がインストールされており、次のいずれかのインストール・シナリオを実行している場合は、インストール後の構成フェーズで Enterprise Manager Configuration Assistant が自動的に起動されます。

- 「Oracle9i Enterprise Edition」 → 「カスタム」
- 「Oracle9i Management and Integration」 → 「Oracle Management Server」
- 「Oracle9i Management and Integration」 → 「カスタム」

他のインストールを実行中は、Enterprise Manager Configuration Assistant は自動的に起動されません。インストール完了後、Enterprise Manager Configuration Assistant を手動で起動する必要があります。

---

---

**注意：** Oracle Enterprise Manager リポジトリ・スキーマを作成する前に、ネットワーク上に必ずデータベース（9i Management Server リポジトリでサポートされているバージョン）をインストールし、実行しておいてください。

次の基準にも適合するデータベースを選択してください。

- データベースは常に使用できる状態となっている必要があります。
  - データベースが他の管理者によって停止されないようにします。
- 
- 

Enterprise Manager Configuration Assistant を起動するには、次の操作を行います。

- Windows NT の場合

Windows の「スタート」メニューから Enterprise Manager Configuration Assistant を起動できます。

また、コマンドラインから次のコマンドを使用しても、Enterprise Manager Configuration Assistant を起動できます。

```
emca
```

- UNIX の場合

コマンドラインから次のコマンドを使用して、Enterprise Manager Configuration Assistant を起動します。

```
emca
```

emca コマンドを実行するには、\$ORACLE\_HOME/sysman/config ディレクトリの omsconfig.properties ファイルに対する書込みアクセスが必要です。

## リリース 9.0 の新規リポジトリを使用するためのローカル Management Server の構成

(インストール後の構成時か手動による Assistant の起動にかかわらず) リリース 9.0 の新しいリポジトリを作成するために Enterprise Manager Configuration Assistant を起動すると、次のタスクが実行されます。

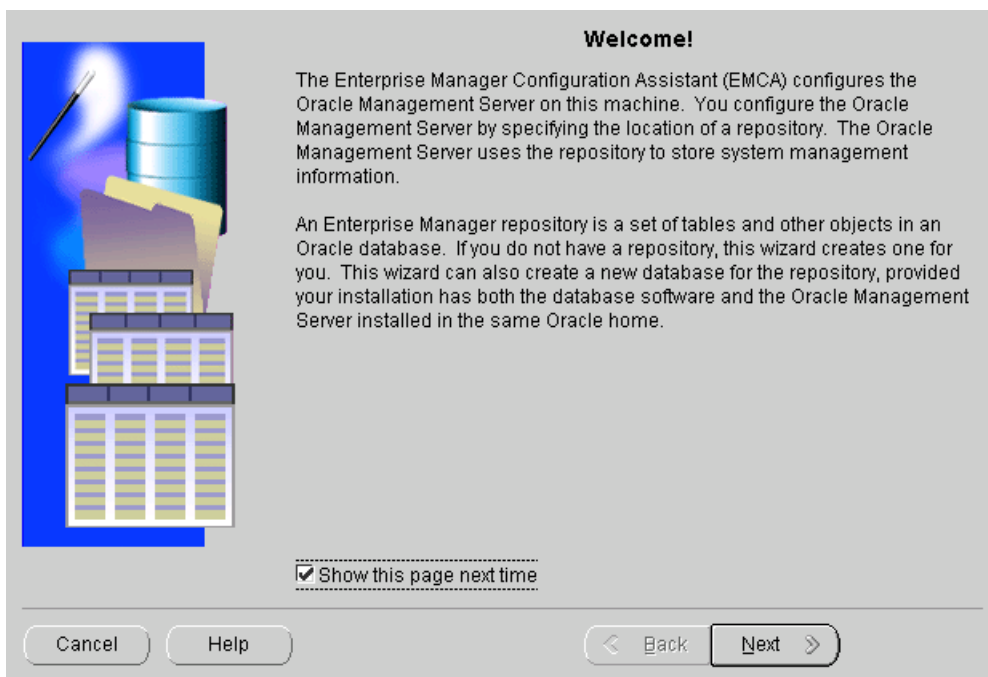
- オプションで、リポジトリを配置するローカル・データベース・インスタンス、および CATTBS 表領域のリカバリ・カタログを作成します。リカバリ・カタログのユーザーおよびパスワードは、rman/rman です。
- オプションで、OEM\_REPOSITORY 表領域を作成します。
- Enterprise Manager および Management Pack のリポジトリの所有者となる新しいデータベース・ユーザーを作成し、ユーザーのデフォルト表領域および一時表領域を指定します。
- 新しいデータベース・ユーザーに、適切な権限およびロールを割り当てます。
- 情報をリポジトリにロードします。この情報は、Oracle Enterprise Manager の実行時に必要です。
- ローカル Management Server 構成ファイル  
ORACLE\_HOME/sysman/config/omsconfig.properties を作成または更新（あるいはその両方）します。
- Management Server リストにマシンで実行されるコンソールの接続先の Management Server が含まれるように、ローカル・マシンのクライアント・レジストリに必要な情報を入力します。
- (Windows NT または Windows 2000 のみ) Windows に Management Server サービスがすでに存在するかどうかを確認します。存在しない場合、Windows に Management Server サービスを作成し、「手動」に設定します。存在する場合は、それを使用します。
- (Windows NT または Windows 2000 のみ) Windows の Management Server サービスを起動します。

## ようこそ

手動で Configuration Assistant を起動すると、「ようこそ」ページが表示されます。

Configuration Assistant に慣れたら、「次回このページを表示」チェックボックスを利用し、このページを再び表示しないように指定できます。デフォルトでは、チェックボックスは選択されています。チェックボックスの選択を解除した場合、次回 Configuration Assistant は「構成操作」ページから起動します。

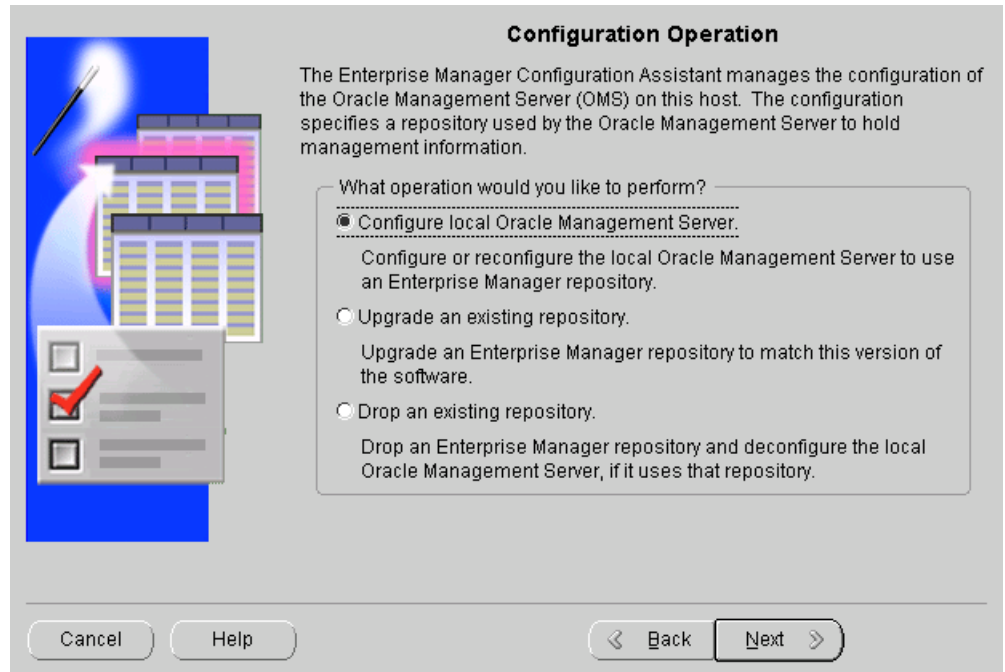
図 3-1 ようこそ



## 構成操作

「ようこそ」ページで「次へ」ボタンを押すと、「構成操作」ページが表示されます。

図 3-2 構成操作



リポジトリの作成または既存のリポジトリ構成の編集により Management Server を構成する場合は、リポジトリ操作のリストから「ローカルの Oracle Management Server を構成します。」を選択し、「次へ」を押します。

前の構成が存在しない場合は、「[Oracle Management Server の構成](#)」ページが表示されます。

構成がすでに存在する場合は、この構成を編集するか、新しい構成を作成するかを尋ねるダイアログが表示されます。

図 3-3 編集または作成ダイアログ



「編集」または「作成」ボタンを押します。

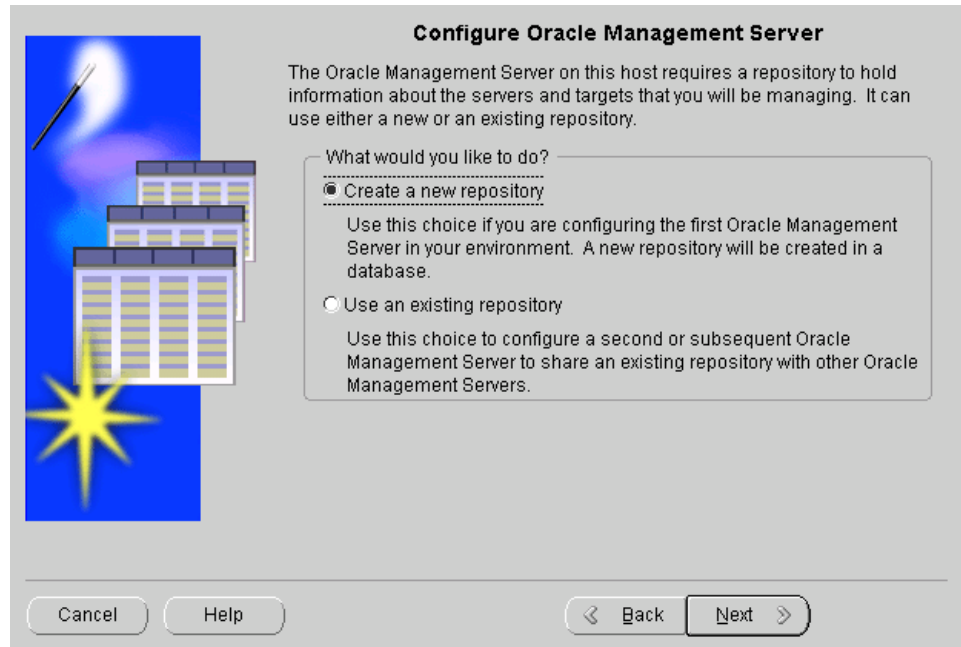
「編集」ボタンを押した場合、「構成パラメータの編集」ページが表示されます。構成の編集の詳細は、3-25 ページの「[構成パラメータの編集](#)」を参照してください。

「作成」ボタンを押した場合、「[Oracle Management Server の構成](#)」ページが表示されます。

## Oracle Management Server の構成

このホストの Management Server では、管理するサーバーおよびターゲットの情報を保持するリポジトリが必要です。

図 3-4 Oracle Management Server の構成



新しい Oracle Enterprise Manager ユーザーの場合、または環境に最初の Management Server を構成し、リリース 9.0 の新しいリポジトリを作成する場合、「新規リポジトリの作成」を選択します。リリース 9.0 のリポジトリを作成してロードし、ローカル Management Server の構成パラメータを設定します。

## 新規リポジトリ作成オプション

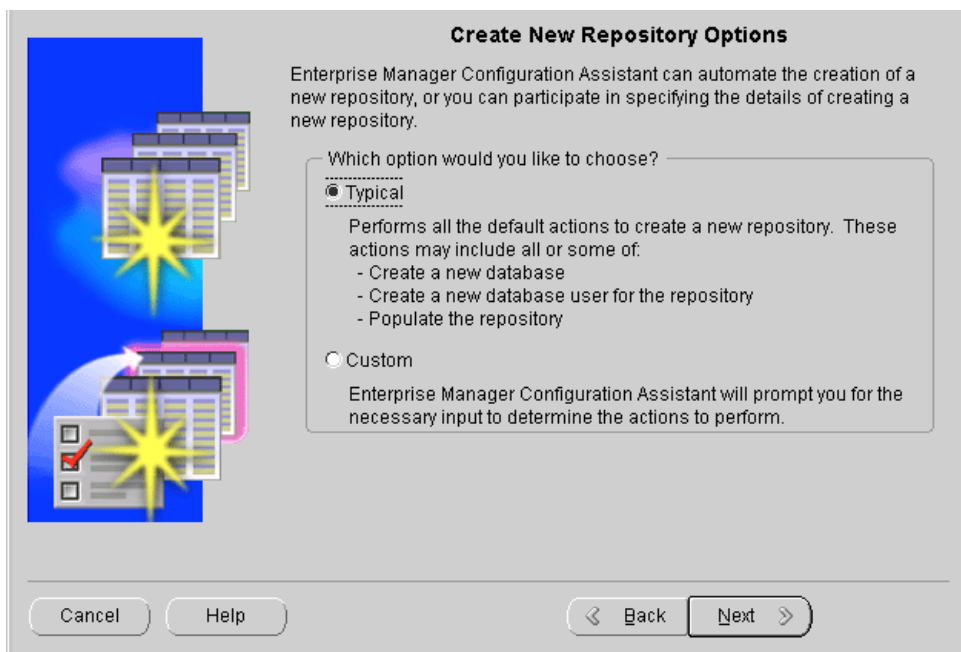
Enterprise Manager Configuration Assistant では、新しいリポジトリの作成を自動化できます。また、新規リポジトリ作成の詳細部分は、ユーザーが指定できます。

---

**注意：** このページは、Configuration Assistant が 9i データベース・サーバーを含む Oracle ホームから実行された場合にのみ表示されます。

---

図 3-5 新規リポジトリ作成オプション






**標準**

この操作には、次の中のいくつかまたはすべてが含まれます。

- ローカル・データベースの作成
- リポジトリの新しいデータベース・ユーザーの作成
- リポジトリへの移入

「標準」を選択した場合は、これ以上実行するステップはありません。次の「リポジトリ作成のサマリー」ページには、特別なエントリが表示されます。

図 3-6 「標準」リポジトリ・オプションの際の「リポジトリ作成のサマリー」



**Create Repository Summary**

You have chosen the following options for creation of your repository. Verify that these options are correct, and then click the Finish button to create your repository.

Create options	
Create local database:	Yes
Local database SID:	OEMREP
Repository user name:	OEM_PJLEE-PC2_OEMREP
Password:	shmmi9bzn5he7wa3
Create user:	Yes
Default tablespace:	OEM_REPOSITORY
Temporary tablespace:	TEMP
Update OMS configuration:	Yes

**Notes:**  
 You should record the password for future use.  
 To change any of these options, click the Back button, and then choose Custom.

Cancel Help < Back Next > Finish

---

---

**注意：** 今後参照するときのために、リポジトリ・ユーザーのパスワードを記録してください。このときのみパスワードが表示されます。リポジトリの削除またはアップグレードなどのタスクを実行するには、パスワードが必要になります。後にリポジトリ・ユーザーのパスワードを変更するには、F-19 ページの「[リポジトリ・ユーザーのパスワード変更](#)」を参照してください。

---

---

「完了」をクリックしてリポジトリの作成を開始するか、または「戻る」をクリックして、前のページに戻って設定を変更します。

「完了」ボタンをクリックすると、Enterprise Manager Configuration Assistant では、データベース・インスタンスを作成する Database Configuration Assistant が起動されます。

---

---

**注意：** 進捗状況ダイアログでは Database Configuration Assistant は識別されないので、Database Configuration Assistant が実行されているのが明確ではない場合があります。

---

---

Database Configuration Assistant において、最後のダイアログでデータベースのパスワード変更が可能な場合、変更せずにデフォルト・パスワードを使用します。

---

---

**注意：** SYS のパスワードは変更しないでください。Enterprise Manager Configuration Assistant では、パスワードは change\_on\_install を想定しています。パスワードをここで変更した場合、Enterprise Manager でこの接続情報を使用してログインしようとすると、失敗します。Enterprise Manager Configuration Assistant によるこの操作が完了すると、SYS 接続情報は必要なくなるので、パスワードの変更ができます。

---

---

インスタンスが作成され、Database Configuration Assistant を終了すると、Enterprise Manager Configuration Assistant では、SYS 接続情報を使用してデータベースへの接続が試行されます。接続されると、次に、Enterprise Manager Configuration Assistant ではリポジトリ・ユーザーが作成され、リポジトリ・スキーマに移入されます。

### カスタム

「カスタム」を選択した場合は、Enterprise Manager Configuration Assistant で、選択内容に応じて次の操作を後から選択できます。

- データベースの場所の選択
- リポジトリのデータベースの選択
- 新しいデータベース・インスタンスの作成を選択した場合の SID の変更
- リポジトリのユーザー名およびパスワードの選択
- リポジトリ・ユーザー表領域の選択

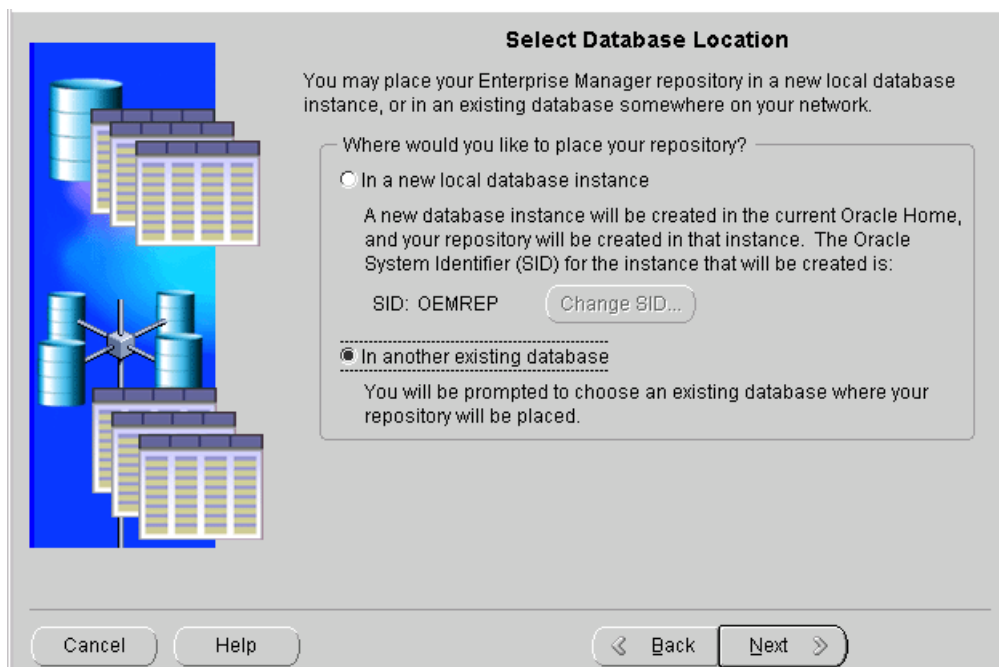
「カスタム」を選択した場合は、「データベースの場所の選択」ページが表示されます。

## データベースの場所の選択

Enterprise Manager リポジトリは、新しいローカル・データベースまたはネットワーク上の別の既存データベースに配置します。データベースは、9i の Management Server リポジトリをサポートするバージョンである必要があります。

**注意：** このページは、Configuration Assistant が 9i データベース・サーバーを含む Oracle ホームから実行された場合にのみ表示されます。

図 3-7 データベースの場所の選択



### ■ 新規ローカル・データベース・インスタンス内

現在の Oracle ホームに新しいデータベース・インスタンスを作成し、リポジトリおよび RMAN (Oracle Recovery Manager) リカバリ・カタログがそのインスタンスに作成されます。

リポジトリは、OEM\_REPOSITORY 表領域に作成され、RMAN リカバリ・カタログは CATTBS 表領域に作成されます。リカバリ・カタログのユーザーおよびパスワードは、rman/rman です。SID は OEMREP になります。SID を変更する場合は、「SID の変更」ボタンを押します。

**注意：** リポジトリの作成を取り消すと、リカバリ・カタログは作成されません。

- 別の既存データベース内

リポジトリを配置する既存データベースを選択するように要求されます。データベースがインストールされ、実行されていることを確認してください。

「SID の変更」ボタンを押さずに「新規ローカル・データベース・インスタンス内」を選択した場合は、「[リポジトリへのログイン情報](#)」ページが表示されます。詳細は、3-16 ページの「[リポジトリへのログイン情報](#)」を参照してください。

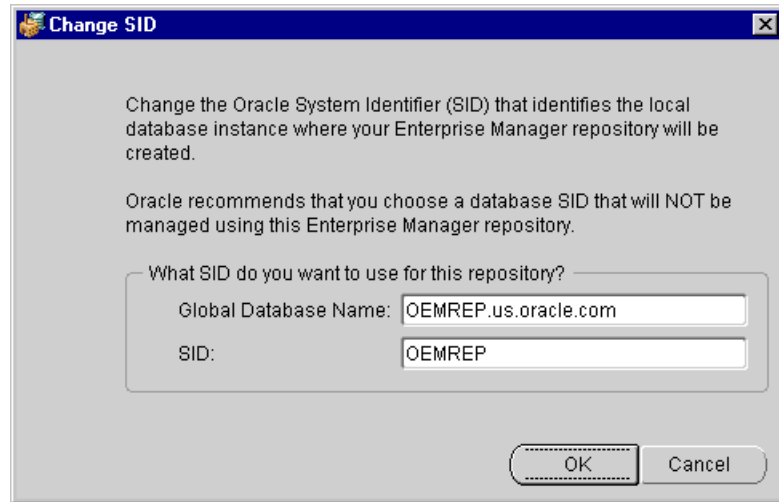
「新規ローカル・データベース・インスタンス内」を選択し、「SID の変更」ボタンを押した場合は、「[SID の変更](#)」ダイアログが表示されます。詳細は、3-13 ページの「[SID の変更](#)」を参照してください。

「別の既存データベース内」を選択した場合は、「[リポジトリのデータベースの選択](#)」ページが表示されます。詳細は、3-14 ページの「[リポジトリのデータベースの選択](#)」を参照してください。

## SID の変更

Enterprise Manager リポジトリが作成されるローカル・データベース・インスタンスを識別する Oracle システム識別子 (SID) は、変更できます。

図 3-8 SID の変更



この Enterprise Manager リポジトリを使用して管理されないデータベース SID を選択することをお勧めします。

- グローバル・データベース名

他のデータベースと一意に識別するデータベースの完全な名前。グローバル・データベース名は、`database_name.database_domain` の形式になります。たとえば、`oemrep.us.ovenbird.com` となります。

データベース名の部分、`oemrep` は、データベースを示す簡単な名前です。データベース・ドメインの部分、`us.ovenbird.com` は、データベースがあるデータベース・ドメインを指定し、グローバル・データベース名を一意にします。可能な場合は、データベース・ドメインでネットワーク・ドメインをミラー化することをお勧めします。

初期化パラメータ・ファイルの `SERVICE_NAMES` パラメータで指定されているように、グローバル・データベース名は、データベースのデフォルト・サービス名です。

- SID

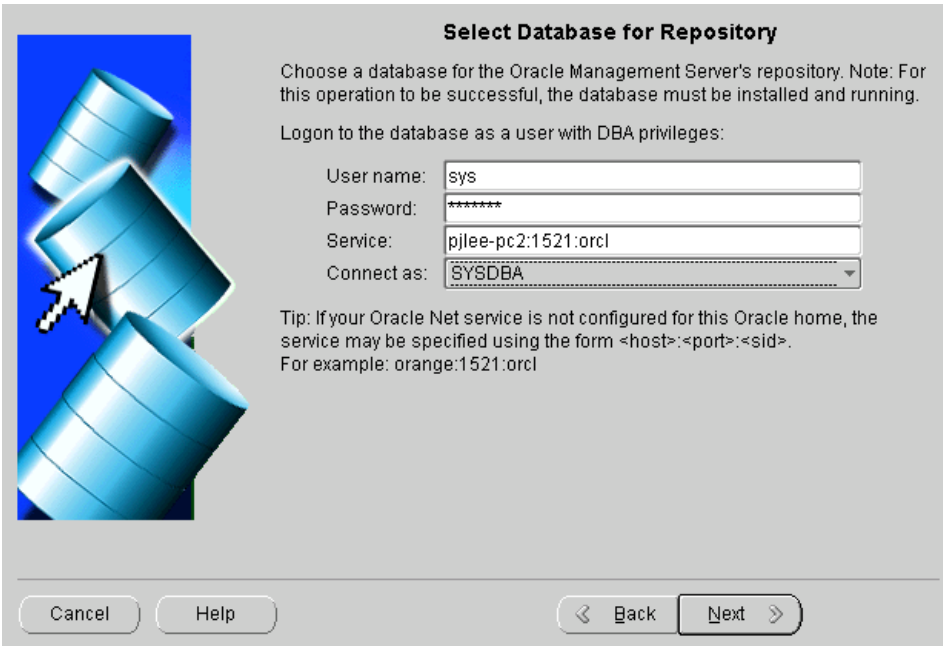
Oracle システム識別子 (SID)。Oracle データベースを実行する特定のインスタンスを識別する名前。各データベースに対して、データベースを参照するインスタンスが少なくとも 1 つあります。

データベース名または SID の変更後、「OK」を押してダイアログを閉じます。次に、「データベースの場所の選択」ページの「次へ」ボタンを押して、「[リポジトリへのログイン情報](#)」ページに進みます。詳細は、3-16 ページの「[リポジトリへのログイン情報](#)」を参照してください。

## リポジトリのデータベースの選択

リポジトリを作成するデータベースにログインします。

図 3-9 リポジトリのデータベースの選択



**Select Database for Repository**

Choose a database for the Oracle Management Server's repository. Note: For this operation to be successful, the database must be installed and running.

Logon to the database as a user with DBA privileges:

User name:

Password:

Service:

Connect as:

Tip: If your Oracle Net service is not configured for this Oracle home, the service may be specified using the form <host>:<port>:<sid>. For example: orange:1521:orcl

Cancel Help Back Next

ユーザー名およびパスワード： データベースには DBA 権限を持つユーザーとして接続してください。新規のユーザーをデータベース内に作成する必要が生じたときに、リポジトリが組み込まれ、**Configuration Assistant** でそのデータベース / リポジトリの照会ができるように、**Enterprise Manager Configuration Assistant** では DBA アカウントが要求されます。

これは個人のデータベース・ユーザー・アカウントで、Oracle Enterprise Manager 管理者アカウントではありません。

たとえば、system/manager です。

サービス： サービスは、次の形式で指定します。

<host>:<port>:<sid>

ここで

<host> は、データベースが格納されるマシン名を表します。

<port> は、データベース・リスナーのポート・アドレスで、通常は 1521 または 1526 となります。

<SID> はデータベースのシステム ID を表します。

例：

my\_em\_machine:1521:em90

このように指定すると、my\_em\_machine マシンでポート 1521 を使用して em90 データベースに接続します。

---

---

**注意：** サービスは <host>:<port>:<sid> のように指定することをお薦めしますが、Oracle Net クライアントが適切に構成されていれば、Oracle Net の名前を使用することもできます。

---

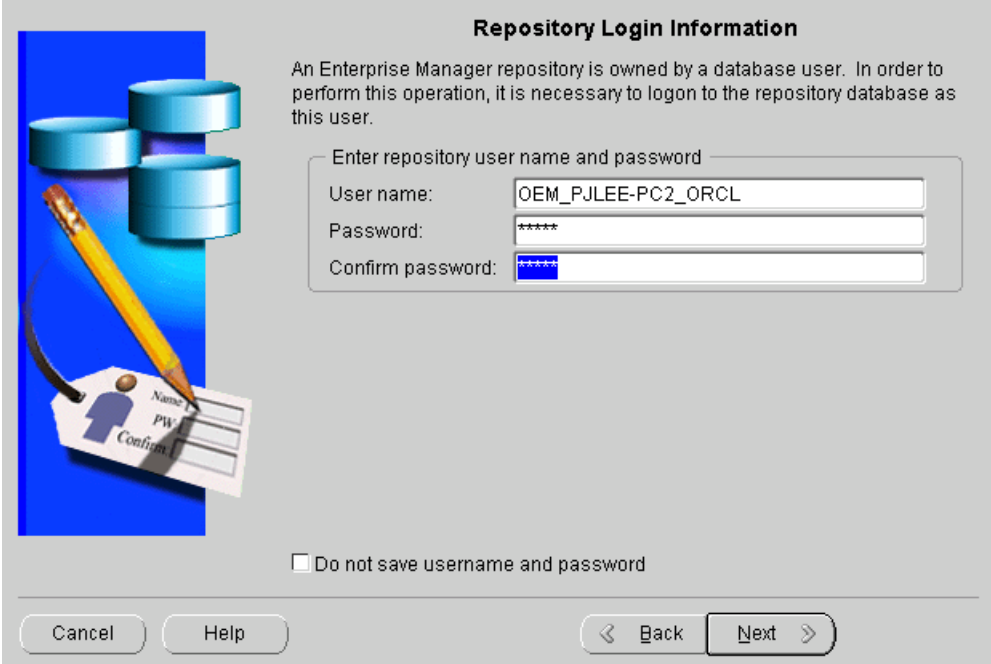
---

「次へ」を押して、操作を継続します。

## リポジトリへのログイン情報

Enterprise Manager リポジトリの所有者は、データベース・ユーザーです。リポジトリの作成時に、Enterprise Manager Configuration Assistant は、このページで指定するユーザー名とパスワードを使用して、リポジトリの所有者であるデータベース・ユーザー（リポジトリ・スキーマ・ユーザー）を作成します。

図 3-10 リポジトリへのログイン情報



ユーザー名： デフォルトでは、Enterprise Manager Configuration Assistant により、OEM\_<TCP/IP hostname of machine>\_<SID> が、リポジトリを所有するデータベース・ユーザーの作成に使用されるリポジトリのユーザー名として使用されます。

<TCP/IP hostname of machine> は、データベースが格納されるマシン名を表します。

<SID> はデータベースのシステム ID を表します。

リポジトリ・ユーザー名は、ネットワーク全体で一意の名前にしてください。別の名前を選択する場合は、それが一意であることを確認してください。



Intelligent Agent では、各 Management Server はそのリポジトリ名で識別されます。異なるデータベース内に同名のリポジトリが 2 つ存在する場合、Intelligent Agent が Management Server に接続する際に問題が発生します。

パスワード: ユーザーのパスワードを入力します。

パスワード確認: パスワードをもう一度入力して確認します。

ユーザー名および暗号化されたパスワードを、`omsconfig.properties` ファイルに保存するかどうかを選択できます。保存された内容は、起動時に Management Server によって読み込まれます。これらのリポジトリ接続情報がファイルに格納されていれば、Management Server はこの情報を使用してリポジトリにログインします。パスワードは、暗号化されて保存されます。

Windows NT および Windows 2000 では、リポジトリ接続情報が保存されていない場合、Management Server を起動するときに「コントロールパネル」の「スタートアップパラメータ」にリポジトリ接続情報を入力できます。「スタートアップパラメータ」フィールドにリポジトリ接続情報を入力しない場合は、ダイアログでリポジトリ接続情報を入力するように要求されます。

UNIX では、リポジトリ情報が保存されていない場合、Management Server の起動前にユーザー名およびパスワードを入力するように要求されます。

ユーザー名および暗号化されたパスワードを `omsconfig.properties` ファイルに保存しない場合は、「ユーザー名とパスワードを保存しない」チェックボックスを選択してください。リポジトリ接続情報を格納しないオプションは、セキュア Management Server モードといます。

リポジトリ・アカウント情報は、リポジトリ・スキーマ内のメンテナンス操作（作成、アップグレードまたは削除など）を実行する場合に使用されます。

Configuration Assistant で自動的に作成されたリポジトリ・スキーマ・ユーザーに必要なロールおよび権限は、次のとおりです。

- ロール: CONNECT および SELECT\_CATALOG\_ROLE
- 権限: CREATE TRIGGER、CREATE PROCEDURE、EXECUTE ANY PROCEDURE、CREATE TYPE、EXECUTE ANY TYPE、SELECT ANY TABLE および (9i のデータベースの場合のみ) SELECT ANY DICTIONARY

セキュリティの問題や、Oracle Enterprise Manager 外部のオブジェクトへの不要なアクセスが発生しないようにするため、リポジトリ・スキーマ・ユーザーに必要以上の権限を付与しないでください。

## リポジトリ・ユーザー表領域の選択

次の場合には、「リポジトリ・ユーザー表領域の選択」ページは表示されません。

- リポジトリ・ユーザーがすでに存在する場合  
または
- 次のようなときに、Enterprise Manager Configuration Assistant がインストール・セッションから実行されている場合
  - OEM\_REPOSITORY 表領域がすでに存在する場合、かつ
  - OEM\_REPOSITORY 表領域に適切なサイズ属性が定義されている場合

---

**注意：** Oracle Enterprise Manager のリポジトリを、SYSTEM（具体的には製品データベースの SYSTEM 表領域）、ROLLBACK または TEMPORARY 表領域にインストールしないでください。

SYSTEM 表領域で使用する表領域パラメータ設定は、Oracle Enterprise Manager で使用するには適切ではありません。SYSTEM 表領域は、system エントリに対してのみ使用してください。ツール、ユーザーおよび（Oracle Enterprise Manager などの）管理製品は、他の表領域に格納されます。

ROLLBACK 表領域は、ロールバック・セグメントの作成で使います。Oracle ユーザー・プロセスは、ロールバック・セグメントを使用してロールバック情報を保存します。

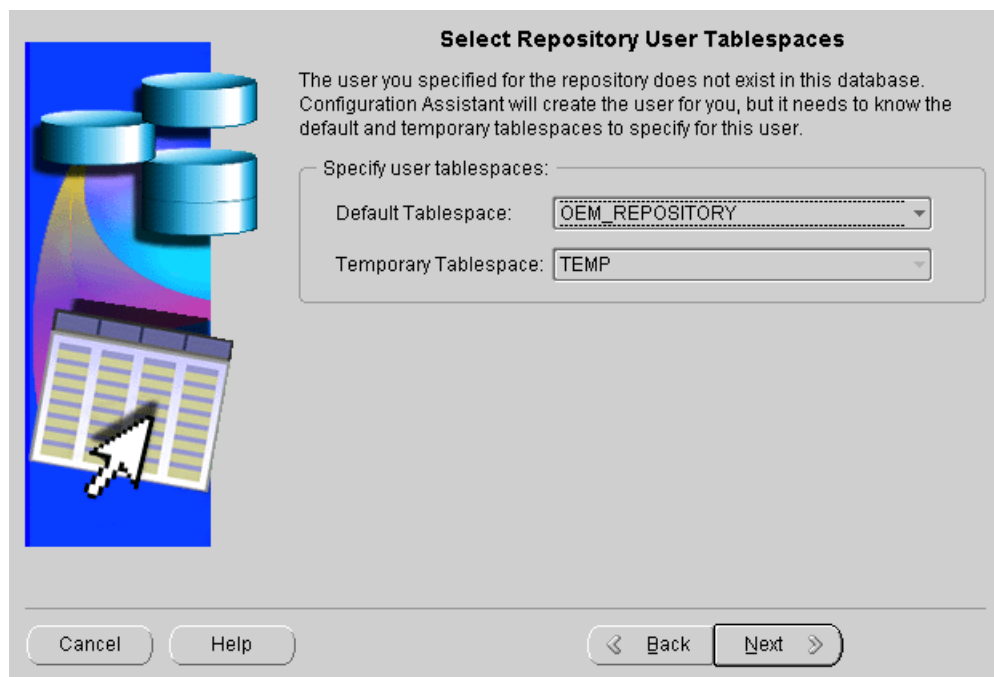
TEMPORARY 表領域は、ユーザーの TEMPORARY 表領域に割り当てられ、Oracle ユーザー・プロセスによって一時領域として使用されます。データベースの稼働中は、これら 2 つの表領域の使用率が変化します。TEMPORARY 表領域は、ユーザーの一時表領域として使用することができます。

Configuration Assistant では、SYSTEM 表領域は一時表領域としてもデフォルト表領域としても使用できません。

---

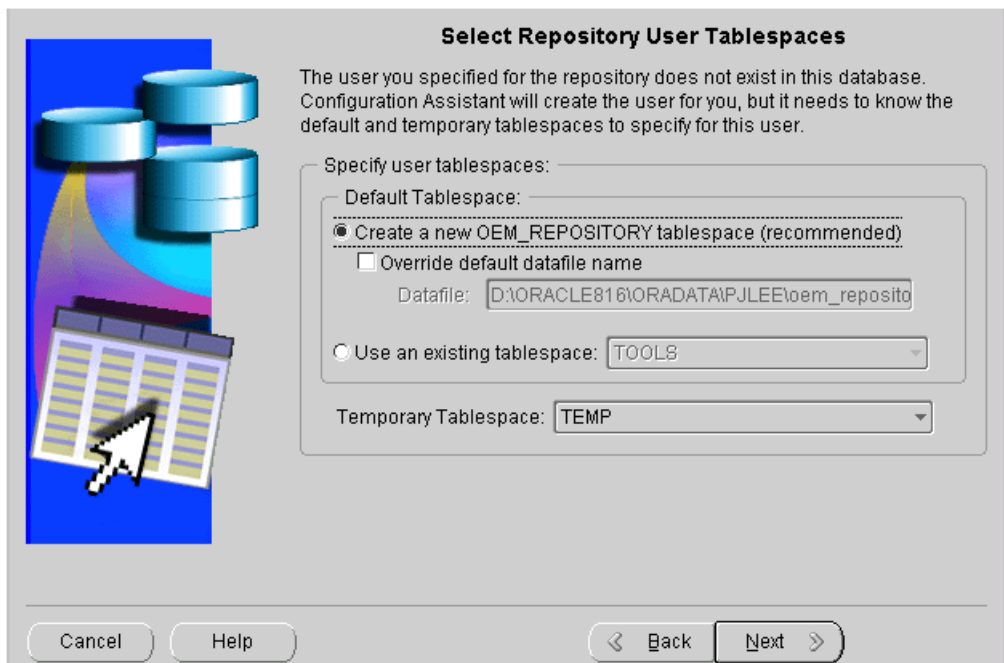
Configuration Assistant を手動で起動した場合、OEM\_REPOSITORY 表領域がすでに存在している場合に、「リポジトリへのログイン情報」ページでリポジトリを管理するユーザーとは異なるリポジトリ・ユーザー名を入力すると、「サービス "<service>" でユーザー "<user>" が所有するリポジトリを管理するように変更しますか。」というエラー・メッセージが表示されます。「はい」または「いいえ」ボタンをクリックすると、次のページが表示されます。

図 3-11 OEM\_REPOSITORY が存在する場合の「リポジトリ・ユーザー表領域の選択」



Enterprise Manager のリポジトリで使用するデフォルトの一時表領域を選択します。  
OEM\_REPOSITORY 表領域が存在しない場合は、次のページが表示されます。

図 3-12 OEM\_REPOSITORY が存在しない場合の「リポジトリ・ユーザー表領域の選択」



デフォルト表領域：

- 新規の OEM\_REPOSITORY 表領域の作成（推奨）

OEM\_REPOSITORY 表領域を作成する場合は、このオプションを選択します。これは、Enterprise Manager のリポジトリに対して特別な特性を持つ表領域で、リポジトリ・ユーザーのデフォルト表領域として使用されます。

- デフォルトのデータファイル名の上書き

OEM\_REPOSITORY 表領域のデータファイルのデフォルト名を変更する場合は、このチェックボックスを選択します。通常、これは推奨されません。

- 既存の表領域を使用

プルダウン・リストから、既存の表領域を選択します。

一時表領域

プルダウン・リストから一時表領域を選択します。

「次へ」をクリックして処理を続行します。

Enterprise Manager Configuration Assistant で、リポジトリのデフォルト表領域に必要な空き領域があることが確認されると、「リポジトリ作成のサマリー」ページが表示されます。それ以外の場合は、エラーが表示されます。

## リポジトリ作成のサマリー

「新規リポジトリ作成オプション」ページで新しいリポジトリ作成の詳細を指定した場合は、「リポジトリ作成のサマリー」ページで、指定したすべての情報のサマリーが表示されます。

次のページは、「カスタム」の手順の最後に表示されます。

図 3-13 リポジトリ作成のサマリー



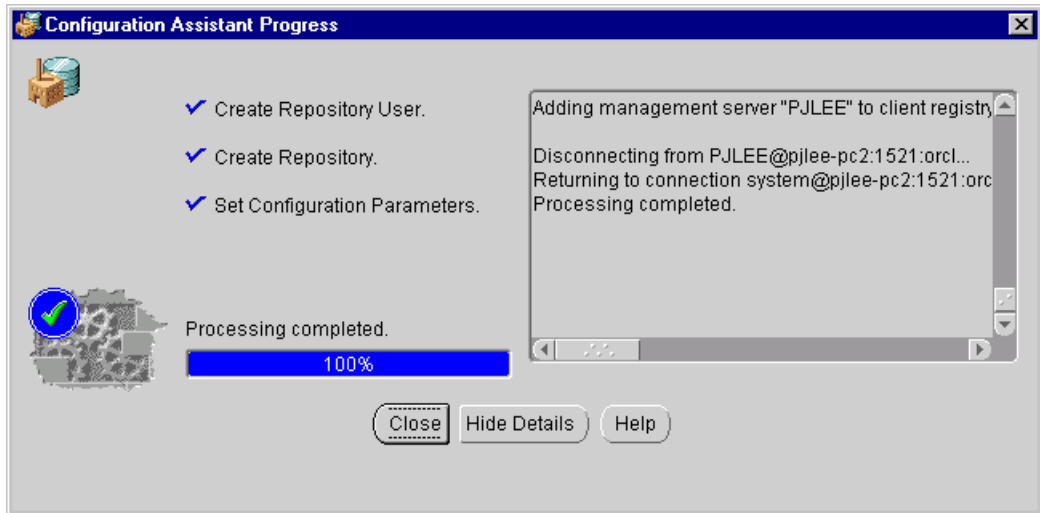
「完了」をクリックしてリポジトリの作成を開始するか、または「戻る」をクリックして、前のページに戻って設定を変更します。

「完了」ボタンをクリックすると、「Configuration Assistant の進行」ウィンドウが表示され、実行された処理と、実行中の操作の処理ステップが表示されます。

## 「Configuration Assistant の進行」ウィンドウ

処理の詳細情報（発生した可能性のあるエラーなど）が必要な場合は、「詳細の表示」ボタンをクリックし、ダイアログ・ボックスを拡張してテキスト領域を表示してください。「詳細を非表示」ボタンをクリックすると、詳細情報を非表示にすることができます。

図 3-14 Configuration Assistant の進行



結果のいかんにかかわらず、処理が完了すれば、「取消」ボタンは「閉じる」ボタンに変わります。

エラーなくすべてのステップが完了した場合、「処理完了」メッセージが表示されます。

「取消」ボタンをクリックすれば、要求された操作を完了前に取り消せます。

---

**注意：** 処理の進行中にリポジトリの作成を取り消すと、リポジトリは不正な状態になります。このような場合は、Enterprise Manager Configuration Assistant を使用してリポジトリを削除します。

---

Configuration Assistant を終了するには、「閉じる」ボタンをクリックします。

リポジトリの作成に失敗した場合、リポジトリを削除し、omsconfig.properties ファイルに適切なトレース・プロパティを追加して Management Server のトレースをオンにし、再びリポジトリ作成手順を実行します。Management Server のトレースおよびログギングの詳細は、[付録 B「ログギングおよびトレースのアクティブ化」](#)を参照してください。

リポジトリの削除の詳細は、3-33 ページの「[既存リポジトリの削除](#)」を参照してください。

## 既存リポジトリを使用するためのローカル Management Server の構成

複数の Oracle Management Server がある環境では、複数の Management Server で同じリポジトリを共有できます。ノードごとに実行される Management Server は、1 つのみです。

次の作業を実行する場合、「ローカルの Oracle Management Server を構成します。」を選択します。

- 既存リポジトリを管理するように Management Server を設定します。
- 同一または別のデータベース内の別のリポジトリを使用するように Management Server 構成を変更します。
- Management Server の起動時にリポジトリへのログインで使用されるパスワードを変更します。他のユーザーがデータベースのリポジトリ・ユーザー・パスワードを変更した場合は、パスワードを変更する必要があります。変更しない場合、Management Server の起動に失敗します。構成パラメータの編集時に Enterprise Manager Configuration Assistant により変更されるのは、omsconfig.properties ファイルのみです。データベース内のリポジトリ接続情報は変更されません。

ネットワーク内のノード数および管理対象のサービス数が増加した場合、または現行の Management Server がオーバーロードになった場合には、中間層に Oracle Management Server を追加してワークロードを分散し、平均化することができます。

Oracle Management Server を複数使用することにより、互いの耐障害性が確保されます。1 つの Oracle Management Server に障害が発生しても、他のサーバーは引き続き稼働します。障害が発生した Management Server に登録されているクライアントは、ただちにログインしなおし、同じリポジトリを使用または共有している他の Management Server のいずれかに登録すれば、残っている使用可能な Oracle Management Server で作業を継続できます。障害が発生したサーバー以外の Oracle Management Server に登録するように構成されているクライアントは、障害の影響を受けません。

使用可能な Management Server 数が CPU により制限される（CPU の使用が限界になる）場合、さらに Management Server を追加して、Management Server を実行するノードの容量を増やすこともできます。

---

**注意：** 同じリポジトリに接続する Management Server はすべて、同じ DNS ドメイン内に置く必要があります。

---

特定のマシンで Oracle Management Server を実行する場合は、そのマシンに Oracle Management Server ソフトウェアをインストールしておく必要があります。

詳細な手順は、対象のデータベース・リリースのインストール・ガイドを参照してください。

新しい Management Server を追加する場合は、Enterprise Manager Configuration Assistant を実行して、対象ノードの構成を更新する必要があります。

Configuration Assistant では、それが稼働しているマシンの構成パラメータ (omsconfig.properties ファイル) のみ設定または変更できます。別のマシンの構成パラメータについては変更できません。リポジトリを使用（共有）している他の Management Server それぞれで、Configuration Assistant を実行し、各マシンの構成パラメータを変更してください。

リポジトリ接続情報（ユーザー名、パスワード、サービス）を設定または変更して、正しいリポジトリを指定してください。同じリポジトリを使用（共有）するすべての Management Server マシンでは、構成パラメータが一致している必要があります。

---

---

**注意：** リポジトリの所有者であるデータベース・ユーザー・アカウントのパスワードを変更する場合は、対象リポジトリを使用しているすべての Management Server で、対応する Management Server の構成パラメータも変更する必要があります。変更しない場合は、Management Server を起動できなくなります。

---

---

Enterprise Manager Configuration Assistant の起動の詳細は、3-2 ページの「[Enterprise Manager Configuration Assistant の起動](#)」を参照してください。

## 構成操作

「構成操作」ページで構成操作のリストから「ローカルの Oracle Management Server を構成します。」を選択し、「次へ」を押して操作を継続します。

「構成操作」ページの詳細は、3-5 ページの「[構成操作](#)」を参照してください。

## Oracle Management Server の構成

「Oracle Management Server の構成」ページで、「既存リポジトリの使用」を選択して 2 つ目以降の Management Server を構成し、他の Management Server と既存のリポジトリを共有します。そして、「次へ」を押して操作を継続します。

構成がすでに存在する場合は、この構成を編集するか、新しい構成を作成するかを尋ねるダイアログが表示されます。[図 3-3 「編集または作成ダイアログ」](#)を参照してください。「編集」ボタンを押すと、「構成パラメータの編集」ページが表示されます。



## 構成パラメータの編集

「構成パラメータの編集」ページで、既存のリポジトリのユーザー名、パスワードおよびサービスを入力し、既存のリポジトリを使用するローカル Management Server に直接移動します。

### ユーザー名

このマシンの Management Server で使用する、既存リポジトリのユーザー名を入力します。または、Management Server の構成を別のリポジトリを使用するように変更するリポジトリのユーザー名を入力します。このユーザー名はデータベースのユーザー名で、Oracle Enterprise Manager の管理者名ではありません。

### パスワード

前述のユーザー名のパスワード入力するか、Management Server で起動時にリポジトリへのログインに使用されるパスワードを変更するリポジトリ・ユーザーのパスワードを入力します。この情報は、Management Server が次回起動するときに使用されます。

パスワードを変更する場合、「確認」フィールドもそれに合わせて変更してください。

### サービス

リポジトリが存在するサービスまたはデータベースを入力し、別のデータベースのリポジトリを使用するように Management Server を変更します。

この情報は、このマシンの Management Server が次回起動するときに使用されます。無効な情報があると、Management Server は起動しません。

### ユーザー名とパスワードを保存しない

ユーザー名および暗号化されたパスワードを、omsconfig.properties ファイルに保存するかどうかを選択できます。保存された内容は、起動時に Management Server によって読み込まれます。ユーザー名および暗号化されたパスワードがファイルに格納されている場合、Management Server はその情報を使用してリポジトリにログインします。

Windows NT では、リポジトリ接続情報が保存されていない場合、Management Server を起動するときに「コントロール パネル」の「サービス」内の「スタートアップ パラメータ」にリポジトリ接続情報を入力できます。「スタートアップ パラメータ」フィールドにリポジトリ接続情報を入力しない場合は、ダイアログでリポジトリ接続情報を入力するように要求されます。

UNIX では、リポジトリ情報が保存されていない場合、Management Server の起動前にユーザー名およびパスワードを入力するように要求されます。

ユーザー名とパスワードを保存しない場合は、「ユーザー名とパスワードを保存しない」チェックボックスを選択してください。リポジトリ接続情報を格納しないオプションは、セキュア Management Server モードといいます。

「次へ」ボタンを押すと、「構成パラメータの編集」ページから次に進みます。

ユーザー名およびパスワードが構成ファイルに格納されていない場合、「ログイン」ダイアログで、リポジトリにログインする接続情報が要求されます。Configuration Assistant では、

指定のリポジトリに接続し、指定のリポジトリを検証して、発生したエラーを表示します。検証に成功した場合は、「管理リージョンの選択」ページが表示されます。

### 管理リージョンの選択

Enterprise Manager が大規模なグローバル配置の場合、または WAN と LAN が組み合わさった状況で Enterprise Manager が配置されている場合、9i の新機能管理リージョンの使用を考慮する必要があります。両方の状況において、管理リージョンでは、Management Server のサブセットおよび検出されたノードのサブセットを管理リージョンに割り当て、リージョン間またはネットワーク間通信を回避することにより、通信速度の遅いネットワークのパフォーマンスを改善できます。また、管理リージョンは、ファイアウォール境界内の検出されたノードのマッピングに役立ちます。

たとえば、次のようになります。会社 XYZ には、イギリスで稼働する Management Server があり、イギリスには監視対象ターゲットがあります。また、カリフォルニアの本社にも稼働する Management Server があり、カリフォルニアに監視対象ターゲットがあります。

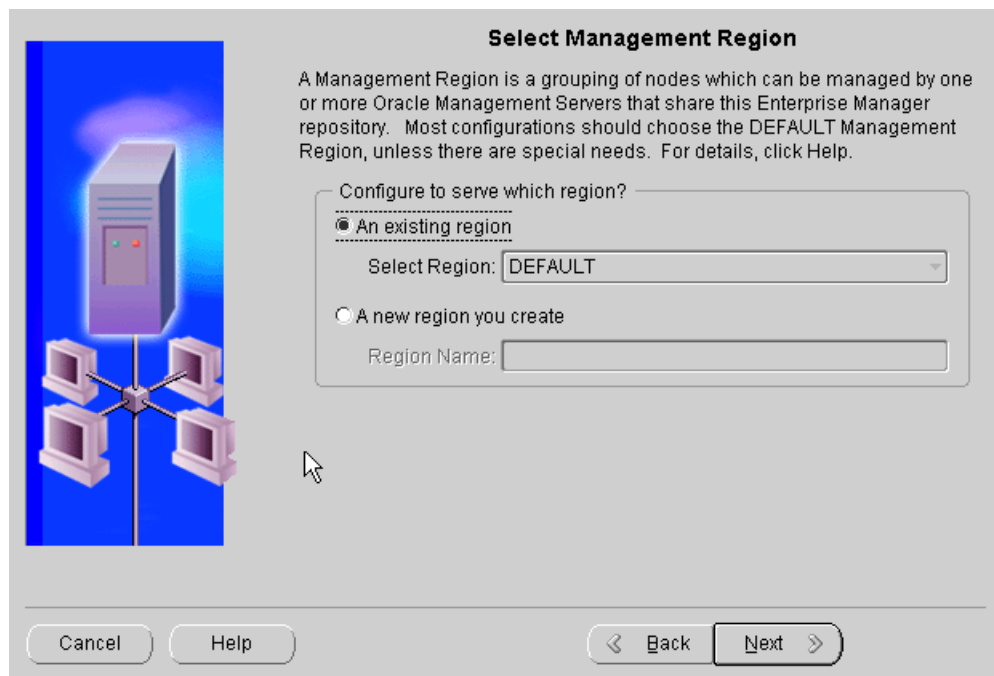
前のリリースの Enterprise Manager では、イギリスの Management Server でカリフォルニアのターゲットを実際に監視できました。Management Server をターゲットとバインドすることはできませんでした。また、イギリスの Management Server とカリフォルニアの監視対象ノードの間にファイアウォールがある場合は、Management Server とノードは、相互に対話できませんでした。リリース 9.0 の管理リージョン機能では、このリージョン間通信が回避され、ユーザーは、(ファイアウォール内で) イギリスの Management Server でイギリスのターゲットの監視のみをするように指定できます。カリフォルニアのターゲットを監視する必要はありません。

デフォルトでは、Enterprise Manager Configuration Assistant により、DEFAULT と呼ばれるデフォルトの初期管理リージョンが作成されます。デフォルトでは、既存リポジトリを使用するすべての Management Server およびそのリポジトリ内の検出されたすべてのノードが、この DEFAULT 管理リージョン内に配置されます。企業で管理リージョン機能を使用する必要がない場合（すなわち、大規模なグローバル企業ではない、またはいくつかの LAN および WAN にわたる配置が行われていない場合）、この DEFAULT 管理リージョンの使用で十分です。ただし、管理リージョン機能を完全に利用する場合、追加の管理リージョンを作成し、各管理リージョン内の検出されたノードのサブセットおよび Management Server のサブセットを指定する必要があります。

Management Server が管理リージョンに割り当てられていない場合、Enterprise Manager Configuration Assistant により、割り当てを行うか、またはローカル Management Server を割り当てるまったく新しい管理リージョンを作成するように要求されます。ほとんどの場合、Management Server はすでに管理リージョンに割り当てられているので、「管理リージョンの選択」ページは、オプションが使用不可の状態が表示されます。この場合、ページ内に赤の文字で説明のメッセージが表示されます。

ローカル Management Server が管理リージョンに割り当てられていない場合、Enterprise Manager Configuration Assistant では、次のページが表示されます。

図 3-15 管理リージョンの割当て



**Select Management Region**

A Management Region is a grouping of nodes which can be managed by one or more Oracle Management Servers that share this Enterprise Manager repository. Most configurations should choose the DEFAULT Management Region, unless there are special needs. For details, click Help.

Configure to serve which region?

☒ An existing region

Select Region:

☐ A new region you create

Region Name:

Cancel Help < Back Next >

**注意：** Enterprise Manager コンソールからも、新しい管理リージョンを作成し、Management Server を管理リージョンに割り当てる機能にアクセス可能です。コンソールからは、スーパー管理者のみがこの機能にアクセスできます。

リスト表示されたオプションのいずれかを選択するか、新しい管理リージョンの名前を入力します。

### 既存のリージョン

リージョンの選択： プルダウン・リストからリージョンを選択します。

デフォルトでは、すべてのノードおよび Management Server は、同じ管理リージョン内にあり、DEFAULT と呼ばれます。スーパー管理者としてコンソールにログインした場合は、ある管理リージョンから別の管理リージョンへノードおよび Management Server を再割当てできます。

### 作成した新規リージョン

リージョン名： リージョン名を入力します。

---

---

**注意：** 次のページに進むには、「構成パラメータの編集」ページまたは「管理リージョンの選択」ページのパラメータを少なくとも 1 つ変更する必要があります。何も変更せずに「次へ」ボタンを押すと、「構成パラメータは変更されていません。変更するか、取り消してください。」というエラー・メッセージが表示されます。この場合、Enterprise Manager Configuration Assistant では、次のページに移動できません。

---

---

## 構成パラメータ・サマリー

「構成パラメータ・サマリー」ページには、構成パラメータ変更操作時に指定した全情報のサマリーが表示されます。「完了」をクリックして変更を開始するか、または「戻る」をクリックして前のページに戻り、設定を変更します。

---

---

**注意：** 「構成パラメータの編集」を使用してパラメータを変更すると、Configuration Assistant により、構成ファイル `ORACLE_HOME/sysman/config/omsconfig.properties` に格納されている Management Server 構成パラメータが変更されます。これらのパラメータによって、Management Server が適切なデータベース内のリポジトリ・ユーザーに接続できるように、必要な入力データが Management Server に提供されます。リポジトリが作成されると、Configuration Assistant では、リポジトリ自体のリポジトリ・ユーザー名およびパスワードは変更されません。Configuration Assistant では、リポジトリ・ユーザーの作成時に、リポジトリ作成時点でのリポジトリ・ユーザーのパスワードが操作されるのみです。

---

---

## リリース 2.x のリポジトリからリリース 9.0 のリポジトリへのアップグレード

リリース 9.0 より前の既存リポジトリは、インストール時に自動的にアップグレードされません。アップグレードするには、インストール後に Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を手動で実行します。アップグレード前に、新しい 9i のリポジトリを作成する必要があります。

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant は、既存のリリース 2.x のリポジトリを取得して、リリース 9.0 に直接アップグレードします。アップグレードが終了すると、リポジトリが新しいリリースになります。

リリース 1.x のリポジトリからリリース 9.0 の単一のリポジトリへの直接の移行は、Enterprise Manager Configuration Assistant ではサポートされていません。この移行プロセスには、2 つのステップがあります。まず、Enterprise Manager Migration Assistant を実行してバージョン 1 からバージョン 2 に移行し、次に Enterprise Manager Configuration Assistant リリース 9.0 を実行して、バージョン 2 からバージョン 9 にアップグレードします。バージョン 1 の複数リポジトリをバージョン 2 の単一リポジトリに移行するには、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド リリース 2.2』を参照してください。

## Management Server および Enterprise Manager アプリケーションの停止

リポジトリのアップグレードを実行する前に、対象のリポジトリを使用しているすべての Management Server および Oracle Enterprise Manager アプリケーションを停止してください。Management Server が対象のリポジトリを使用している場合は、リポジトリをアップグレードすると、サーバー・エラーが発生します。

## リポジトリのバックアップ

リポジトリをアップグレードする前に、標準エクスポート・メカニズムを使用して、データベースまたはリポジトリ・スキーマをバックアップしてください。

---

**注意：** SYS ユーザーで作成したリポジトリは、エクスポートできません。

---

EXPORT ユーティリティは、Oracle データベース・サーバーに付随する基本ユーティリティです。エクスポート・ユーティリティの詳細は、『Oracle9i データベース・ユーティリティ』を参照してください。

リポジトリのアップグレード中に失敗すると、そのリポジトリは使用できなくなります。失敗したリポジトリは、アップグレード可能なりポジトリとしてリストに表示されなくなります。

## Oracle Enterprise Manager 製品のアップグレードの調整

リリース 2.x のリポジトリを使用しており、リポジトリをリリース 9.0 にアップグレードする場合、すべての Oracle Enterprise Manager コンポーネントがリリース 9.0 にアップグレードされるまで、リポジトリのアップグレードは実行しないでください。

Enterprise Manager リポジトリは共有されるため、リポジトリのアップグレードを、リポジトリを共有するすべてのマシン上の新しい Oracle Enterprise Manager ソフトウェアのインストールと調整することが重要です。リポジトリをアップグレードしない場合、新しいバージョンのソフトウェアは、そのリポジトリと一緒に動作しません。

リポジトリをアップグレードすると、旧バージョンのソフトウェアは、そのリポジトリと一緒に動作しません。Management Server を含む Oracle Enterprise Manager の基本システムと Oracle Enterprise Manager パックはどちらも 1 つのリポジトリを共有するため、引き続きすべてのユーザーが作業を実行する場合は、リポジトリのアップグレードが、関連するすべてのマシンにおけるソフトウェア・アップグレードと調整されていることを必ず確認してください。

Enterprise Manager コンソール、個別にライセンスを取得できるパック、Management Server およびリポジトリは、すべて同じリリースを使用してください。たとえば、リリース 9.0 のコンソールでリリース 2.2 の Management Server およびリポジトリを使用することも、リリース 2.2 のパックでリリース 9.0 の Management Server およびリポジトリを使用することもできません。

既存の Management Server およびリポジトリが以前のバージョンである場合は、それらを最新バージョンにアップグレードできます。Management Server およびリポジトリをリリース 9.0 にアップグレードする場合には、リポジトリで使用するすべての Enterprise Manager 製品がリリース 9.0 となるようにしてください。たとえば、Diagnostics Pack リリース 2.2 または Change Management Pack リリース 2.2 を使用したまま、Management Server およびリポジトリをリリース 9.0 にアップグレードしないでください。

---

---

**注意：** Enterprise Manager リリース 2.2 のレポート・ウィザードでスケジュールおよび生成されたレポートは、リリース 9.0.x にアップグレードできません。

---

---

## リポジトリ・アップグレードの Configuration Assistant のステップ

リポジトリをアップグレードするには、次の項のステップに従ってください。

---

**注意：** リポジトリのすべてのジョブおよびイベントの詳細は、バイナリ・フィールドに格納され、情報は保護されます。また、データ自体は、スキーマ所有者名を使用して暗号化されます。したがって、Enterprise Manager リポジトリを別のデータベースに移動できますが、そのリポジトリの所有者は同じスキーマ名を持つ必要があります。リポジトリのスキーマ名は変更できません。あるユーザーから別のユーザーにリポジトリをエクスポート / インポートした場合、複合化キーは一致せず、ジョブおよびイベントは使用できなくなります。

---

Enterprise Manager Configuration Assistant の起動の詳細は、3-2 ページの「[Enterprise Manager Configuration Assistant の起動](#)」を参照してください。

### 構成操作

「ようこそ」ページで「次へ」ボタンを押すと、「構成操作」ページが表示されます。

構成操作のリストから「既存のリポジトリを更新」を選択し、「次へ」を押して処理を続行します。「リポジトリのデータベースの選択」ページが表示されます。

### リポジトリのデータベースの選択

アップグレードするリポジトリが含まれているデータベースにログインします。

リポジトリをアップグレードするには、DBA 権限を持つユーザーとしてデータベースに接続してください。Enterprise Manager Configuration Assistant によって作成されたリポジトリ・スキーマには、このステップに必要な DBA 権限がありません。セキュリティの問題が発生しないようにするため、リポジトリ・スキーマ・ユーザーに必要な以上の権限を付与しないでください。データベースには、DBA 権限を持つ別のユーザーとして接続してください。たとえば、system/manager です。

リポジトリが含まれているデータベースへのログインの詳細は、3-14 ページの「[リポジトリのデータベースの選択](#)」を参照してください。

ログインに成功すると、「リポジトリの選択」ページが表示されます。

## アップグレードのためのリポジトリの選択

アップグレードするリポジトリを選択する場合、「リポジトリの選択」ページには、リリース 2.0、2.1 および 2.2 のリポジトリのみが表示されます。このような場合、Enterprise Manager Configuration Assistant ではリリース 9.0.1 のリポジトリは表示されません。これらのリポジトリは最新リリースなので、アップグレードする必要がないためです。

ユーザー名： リポジトリのユーザー名です。

バージョン： リポジトリのバージョンです。

タイプ： リポジトリのタイプです。タイプは、「Enterprise」または「スタンドアロン」のいずれかです。Oracle Enterprise Manager が Management Server に接続される場合、Enterprise リポジトリが使用されます。Management Server に接続せずに Oracle Enterprise Manager を使用する場合は、アプリケーションによってはスタンドアロン・リポジトリが必要になります。

該当するリポジトリを選択し、「次へ」ボタンを押して操作を続行します。

指定されたデータベースにリリース 2.2 のリポジトリが含まれていない場合は、リポジトリのリストは空でグレー表示され、「データベースでリポジトリが見つかりませんでした。」というメッセージが表示されます。「取消」ボタンをクリックして Enterprise Manager Configuration Assistant を終了するか、「戻る」ボタンをクリックして前のページに戻り、別のデータベースに接続します。

## リポジトリへのログイン情報

「リポジトリへのログイン情報」ページに、リポジトリ・ユーザー・パスワードを指定します。

リポジトリの作成時に、Enterprise Manager Configuration Assistant は、指定されたユーザー名とパスワードを使用して、リポジトリの所有者であるデータベース・ユーザー（リポジトリ・スキーマ・ユーザー）を作成しました。

リポジトリをアップグレードするには、リポジトリ・データベースに対して、このユーザーでログインする必要があります。

前のページで選択した結果として、「ユーザー名」フィールドには、リポジトリ・ユーザー名が挿入されます。ただし、パスワードは入力する必要があります。

「次へ」を押して、操作を続けます。「リポジトリ更新のサマリー」ページが表示されます。

## リポジトリ更新のサマリー

「リポジトリ更新のサマリー」ページには、リポジトリのアップグレード・セッション中に、指定したすべての情報の概要が表示されます。「完了」をクリックしてリポジトリのアップグレードを開始するか、「戻る」をクリックして前のページに戻り、設定を変更します。



## リポジトリ更新の「Configuration Assistant の進行」

「完了」ボタンをクリックすると、「Configuration Assistant の進行」ウィンドウが表示され、実行された処理と、実行中の操作の処理ステップが表示されます。各処理ステップは、1 行のテキストで表示されます。

詳細な情報が必要な場合は、「詳細表示」ボタンをクリックしてダイアログ・ボックスを拡張し、テキスト領域を表示します。テキスト領域は、「詳細を非表示」ボタンを押せば隠せます。

結果のいかんにかかわらず、処理が完了すれば、「取消」ボタンは「閉じる」ボタンに変わります。

エラーなくすべてのステップが完了した場合、「処理完了」メッセージが表示されます。

「取消」ボタンをクリックすれば、要求された操作を完了前に取り消せます。ただし、操作を取り消すと、リポジトリは使用不可能になります。

終了したら「閉じる」ボタンをクリックします。

Configuration Assistant のアップグレード操作中、Oracle Management Service が存在せず、アップグレードされているリポジトリが実際にローカル Management Server で使用されている場合にのみ、Oracle Management Service が作成されます。

## 既存リポジトリの削除

リポジトリを削除するには、DBA 権限を持つユーザーとして、データベースに接続してください。

リポジトリを削除し、ローカル Management Server でそのリポジトリが使用される場合にそのローカル Management Server の構成を解除するには、次の項で説明する手順に従います。

## Management Server および Enterprise Manager アプリケーションの停止

リポジトリを削除する前に、対象のリポジトリを使用しているすべての Management Server および Oracle Enterprise Manager アプリケーションを停止してください。

このリポジトリを使用中の Management Server がある場合、リポジトリを削除するとサーバー・エラーが生じます。

## Configuration Assistant の起動

Enterprise Manager Configuration Assistant の起動の詳細は、3-2 ページの「[Enterprise Manager Configuration Assistant の起動](#)」を参照してください。

## 「構成操作」でのリポジトリの削除

「ようこそ」ページで「次へ」ボタンを押すと、「構成操作」ページが表示されます。

構成操作リストから「既存のリポジトリの削除」を選択し、「次へ」を押して操作を続けます。「リポジトリのデータベースの選択」ページが表示されます。

## 削除するリポジトリのデータベースの選択

削除するリポジトリが含まれているデータベースにログインします。データベースには DBA 権限を持つユーザーとして接続してください。

Enterprise Manager Configuration Assistant によって作成されたリポジトリ・スキーマには、このステップに必要な DBA 権限がありません。セキュリティの問題が発生しないようにするため、リポジトリ・スキーマ・ユーザーに必要以上の権限を付与しないでください。データベースには、DBA 権限を持つ別のユーザーとして接続してください。たとえば、system/manager です。

リポジトリが含まれているデータベースへのログインの詳細は、3-14 ページの「[リポジトリのデータベースの選択](#)」を参照してください。ログインに成功すると、「リポジトリの選択」ページが表示されます。

## 削除するリポジトリの選択

削除するリポジトリを選択した場合、「リポジトリの選択」ページには、リリース 2.0 以上のすべてのリポジトリが表示されます。

該当するリポジトリを選択し、「次へ」ボタンを押して操作を続けます。

ユーザー名： リポジトリのユーザー名です。

バージョン： リポジトリのバージョンです。

タイプ： リポジトリのタイプです。タイプは、「Enterprise」または「スタンドアロン」のいずれかです。Oracle Enterprise Manager が Management Server に接続される場合、Enterprise リポジトリが使用されます。Management Server に接続せずに Oracle Enterprise Manager を使用する場合は、アプリケーションによってはスタンドアロン・リポジトリが必要になります。

指定されたデータベースにリリース 2.x または 9i のリポジトリが含まれていない場合は、リポジトリのリストは空でグレー表示され、「データベースでリポジトリが見つかりませんでした。」というメッセージが表示されます。「取消」ボタンをクリックして Enterprise Manager Configuration Assistant を終了するか、「戻る」ボタンをクリックして前のページに戻り、情報を変更します。

## リポジトリの削除オプションの選択

「リポジトリの削除オプションの選択」ページから、リポジトリ・ユーザーとそのスキーマ・オブジェクトをすべて削除することも、リポジトリ・オブジェクトのみを削除することもできます。

リポジトリのみを削除する場合は、リポジトリ・ユーザーのパスワードを指定する必要があります。これは、Enterprise Manager Configuration Assistant でリポジトリに接続し、Oracle Enterprise Manager の SQL の削除スクリプトをコールできるようにするためです。リポジトリ・オブジェクトのみが削除されます。リポジトリのその他のスキーマ・オブジェクトは残ります。

リポジトリ・ユーザーとそのすべてのスキーマ・オブジェクトを削除する場合、パスワードは不要です。このステップを継続する前に、そのスキーマに他に重要なオブジェクトがないか確認してください。これを確認しないと、貴重なデータが失われる可能性があります。

現在 / 最新のバージョンではないリポジトリを選択した場合、有効な選択は、リポジトリ・ユーザーの削除のみです。削除スクリプトでは、最新 / 現在のバージョンのみ処理できます。

Configuration Assistant では、管理対象のリポジトリが omsconfig.properties ファイルで指定されていることが認識されても、そのリポジトリを削除しない場合は、Management Server の構成は変更されません。

管理対象のリポジトリを削除すると、Configuration Assistant では、Management Server の構成が消去されます。

「次へ」を押して、操作を継続します。「リポジトリ削除のサマリー」ページが表示されます。

## リポジトリ削除のサマリー

「リポジトリ削除のサマリー」ページには、リポジトリ削除操作時に指定した全情報のサマリーが表示されます。

「完了」をクリックしてリポジトリ削除を開始するか、または「戻る」をクリックして前のページに戻り、情報を変更します。

## リポジトリ削除の「Configuration Assistant の進行」

「完了」ボタンをクリックすると、「Configuration Assistant の進行」ウィンドウが表示され、実行された処理と、実行中の操作の処理ステップが表示されます。各処理ステップは、1 行のテキストで表示されます。

詳細な情報が必要な場合は、「詳細表示」ボタンをクリックしてダイアログ・ボックスを拡張し、テキスト領域を表示します。テキスト領域は、「詳細を非表示」ボタンを押せば隠せます。

結果のいかんにかかわらず、処理が完了すれば、「取消」ボタンは「閉じる」ボタンに変わります。

エラーなくすべてのステップが完了した場合、「処理完了」メッセージが表示されます。

「取消」ボタンをクリックすれば、要求された操作を完了前に取り消せます。

終了したら「閉じる」ボタンをクリックします。

## 構成後の Management Server の管理

構成後、Management Server は、クライアントと管理対象ノード間の制御の分散を実現します。通知の中央エンジンである Management Server では、すべてのシステム管理作業の処理と、これらの作業の企業全体での分散管理が行われます。

この項の内容は、次のとおりです。

- [ローカル Management Server の起動](#)
- [Management Server のステータスのチェック](#)
- [ローカル Management Server の停止](#)

## ローカル Management Server の起動

Management Server を起動する前に、Management Server で使用するリポジトリ・データベースを起動してオープンし、データベース・リスナーを起動しておく必要があります。

### Windows でのローカル Management Server の起動

Windows で Management Server を起動するには、次の手順に従います。

1. 「スタート」メニュー→「設定」→「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. リポジトリの作成時に、リポジトリ接続情報を保存するように選択していない場合（セキユア Management Server モードと呼ばれる）は、Management Server の起動時に、データベース・ユーザーの作成に使用されたリポジトリのユーザー名とそのユーザーのパスワードを「コントロール パネル」の「スタートアップ パラメータ」フィールドに入力できます。「スタートアップ パラメータ」フィールドは、サービス・リストの下に

あります。データベース・ユーザーおよびパスワードは、<username>/<password> の形式で指定してください。

「コントロール パネル」の「スタートアップ パラメータ」フィールドに無効または不完全なリポジトリ接続情報を入力した場合、Management Server は起動されず、エラー・メッセージが表示されます。

セキュア・モードの場合、「スタートアップ パラメータ」フィールドにリポジトリ接続情報を入力しないと、後でダイアログで情報を入力するように要求されます。

Management Server が起動されない場合のトラブルシューティングの詳細は、F-14 ページの「[Management Server が起動されない場合](#)」を参照してください。

3. 「Oracle<Oracle\_Home\_Name>ManagementServer」 サービスを選択します。
4. 「スタートアップ」 ボタンをクリックして、「サービス」 ダイアログ・ボックスを表示します。

---

**注意：** 手順 4 は、サービスを起動するたびではなく、1 回だけ実行してください。

---

- a. 「スタートアップの種類」セクションで「自動」または「手動」を選択し、Management Server サービスをどのように起動するかを指定します。「手動」を選択した場合は、ユーザーが Management Server を起動します。「自動」を選択すると、システムを起動するたびに Management Server が自動的に起動されます。「無効」を選択した場合は、Management Server を起動できません。デフォルトでは、Configuration Assistant によりサービスは「手動」に設定されます。
  - b. 「ログオン」セクションで、次の設定を確認します。
    - \* 「システム アカウント」 オプションが選択されていることを確認します。このオプションは、Management Server を実行するためにサポートされている方法です。ローカル・アカウントを使用する場合、Management Server は稼働しません。
    - \* 「デスクトップとの対話をサービスに許可」ボックスが選択されていることを確認します。選択されていない場合、Management Server は稼働しません。
5. 「起動」 ボタンをクリックして、Management Server を起動します。

---

**注意：** Enterprise Manager Configuration Assistant をインストール・セッションから起動し、リポジトリ接続情報を保存するように選択した場合、Management Server サービスはリポジトリ作成時に Windows で自動的に起動され、「手動」に設定されます。

リポジトリ接続情報を保存しないように選択した場合は、Management Server の起動時に「コントロールパネル」の「サービス」内の「スタートアップ パラメータ」フィールドにリポジトリ接続情報を入力できます。「スタートアップ パラメータ」フィールドにリポジトリ接続情報を入力しない場合は、ダイアログでリポジトリ接続情報を入力するように要求されます。

---

### UNIX でのローカル Management Server の起動

UNIX で Management Server を起動するには、コマンドラインから次のように入力します。

```
% oemctl start oms
```

リポジトリの構成時に、リポジトリ接続情報を保存しないように選択した場合は、(データベース・ユーザーの作成で使用された) リポジトリのユーザー名、およびそのユーザーのパスワードを、接続情報を要求された際に入力します。リポジトリ所有者の定義の詳細は、3-16 ページの「[リポジトリへのログイン情報](#)」を参照してください。

---

**注意：** ORACLE\_HOME 環境変数が、Management Server が稼働している Oracle ホームに設定されていると、Management Server は、正しい Oracle ホームではなく、デフォルトの Oracle ホームでクラス・ファイルを探そうとするため、Management Server は正しく起動されません。Oracle 環境の設定の詳細は、F-13 ページの「[Management Server がデフォルト以外の Oracle ホームから正しく実行できない場合](#)」を参照してください。

---

### Management Server のステータスのチェック

Windows または UNIX でローカルまたはリモートの Management Server が実行されているか停止しているかをチェックするには、オペレーティング・システムのプロンプトで次のように入力します。

```
% oemctl ping oms
```

Windows または UNIX で Management Server のステータスをチェックするには、オペレーティング・システムのプロンプトで、次のように入力します。

```
% oemctl status oms
```

Oracle Enterprise のスーパー管理者のユーザー名とパスワードを入力するよう要求されます。リモート Management Server のステータスをチェックする場合は、Management Server が稼働しているマシンのホスト名も指定する必要があります。たとえば、znripley-pc.ovenbird.com とします。

oemctl status oms で返される情報は、次のようになります。

- Management Server のバージョン
- Management Server が稼働しているかどうか、および稼働時間
- Target database session count

セッション中のターゲット・データベース数を示します。ターゲット・データベース・セッションは、ユーザーが（ナビゲータの「データベース」フォルダの下のデータベースを展開して）データベースに接続しようとしたときに取得されます。データベース・セッションを必要とするたびにオープンおよびクローズするのは非効率的なので、特定数のターゲット・データベース・セッションをプールに保持し、Management Server で、それ以上の数がオープンされる前にこれらのセッションを使用するようにします。

- Operations queued for processing

処理を待機しているアクティビティ数を示します。アクティビティには、ジョブの発行、イベントの登録、電子メールの送信または他のメンテナンス・プロシージャが含まれます。

- Number of OMS systems in domain

企業内で稼働している Management Server の数とホスト名を示します。

- Number of administrators logged in

この Management Server にログインした Enterprise Manager 管理者数を示します。

- Repository session pool depth

Oracle Intelligent Agent へのジョブの発行およびイベントの登録などの操作を実行する、データベース・リポジトリから Oracle Management Server の間で使用可能なセッション数を示します。デフォルトでは、セッション・プールの深さは 15 に設定されています。このデフォルト値は、ほとんどの環境で十分な値です。ジョブの発行およびイベントの登録時にリポジトリ・セッションが使用されるので、管理チームが多くアクティビティを実行する場合にのみ、このデフォルト値を調整する必要があります。

- Repository session count

プール内の現在のリポジトリ・セッション数を示します。Management Server で、Enterprise Manager リポジトリの情報の取出しまたは更新を必要とするタスクが実行される場合、リポジトリ・セッションが取得されます。たとえば、ジョブまたはイベントの発行、グループ、ジョブ履歴、登録済イベントなどの表示などのタスクがあります。セッションを必要とするたびにオープンおよびクローズするのは非効率的なので、特定数のリポジトリのセッションをプールに保持し、Management Server で、それ以上の数がオープンされる前にこれらのセッションを使用するようにします。Management Server は起動時に約 5 ～ 7 セッションを保持します。

たとえば、次のような出力が示されます。

```
OEMCTL for Windows NT: Version 9.0.0.0.0  
Copyright (c) 1998, 2001 Oracle Corporation. All rights reserved.
```

```
The Oracle Management Server on host [znripley-pc.ovenbird.com] is functioning properly.
```

```
The server has been up for 0 00:00:25.953
```

```
Target database session count: 0 (session sharing is off)  
Operations queued for processing: 1  
Number of OMS systems in domain: 1 (znripley-pc.ovenbird.com)  
Number of administrators logged in: 0  
Repository session pool depth: 15  
Repository session count: 8 in-use and 1 available, pool efficiency: 18%
```

## ローカル Management Server の停止

ローカル Management Server を停止するには、次の手順を実行します。

### Windows の場合

1. 「スタート」メニュー→「設定」→「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. 「Oracle<Oracle\_Home\_Name>ManagementServer」サービスを選択します。
3. 「停止」ボタンをクリックして、Management Server を停止します。

Oracle Enterprise のスーパー管理者のユーザー名とパスワードを入力するよう要求されます。

### UNIX の場合

コマンドラインで、次のように入力します。

```
% oemctl stop oms
```

Oracle Enterprise のスーパー管理者のユーザー名とパスワードを入力するよう要求されます。



---

# Management Server への接続時のコンソールの構成

リリース 9.0 から、Enterprise Manager コンソールまたはその他各種の Enterprise Manager アプリケーションを起動する際、製品をスタンドアロンで起動するか（すなわち、中間層の Management Server に接続しない）、Management Server にログインするか選択するよう要求されます。コンソールをスタンドアロンで起動すると、1 人の管理者がデータベース管理を直接実行できるのに対し、コンソールを中間層の Management Server に接続して起動すると、複数管理者間の管理データの共有、潜在的な問題の事前の通知、繰り返される管理タスクの自動化などのより包括的な管理機能が使用できます。この章では、中間層の Management Server への接続時の Enterprise Manager コンソールの構成方法を説明します。

この章の内容は、次のとおりです。

- Management Server 接続によるコンソールの起動
- 使用環境のノードの検出
- 管理者アカウントの作成
- データベースの優先接続情報リストへの OEM\_MONITOR ロールの付与
- ジョブ・システムの有効化
- ポケットベル・サーバーの構成および起動
- 電子メール・サーバーの構成
- Enterprise Manager レポート作成の構成
- ダイアルアップ回線を使用する場合のコンソールの構成

---

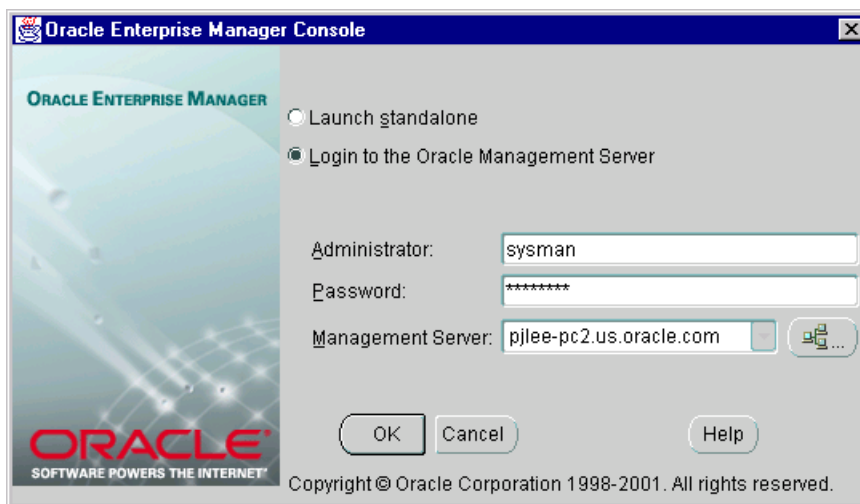
**注意：** これらの機能は、スタンドアロン・コンソールでは使用できません。

---

## Management Server へのログインによるコンソールの起動の選択

Enterprise Manager コンソールの起動時、製品をスタンドアロンで起動するか、Management Server にログインするかを選択するよう要求されます。

**図 4-1 Enterprise Manager コンソール・ログイン**



---

**注意：** Management Server にログインしてコンソールを起動する前に、まず Management Server をインストールし、構成する必要があります。インストールの説明は、インストレーション・ガイドを参照してください。構成の詳細は、第 3 章「Management Server の構成および管理」を参照してください。

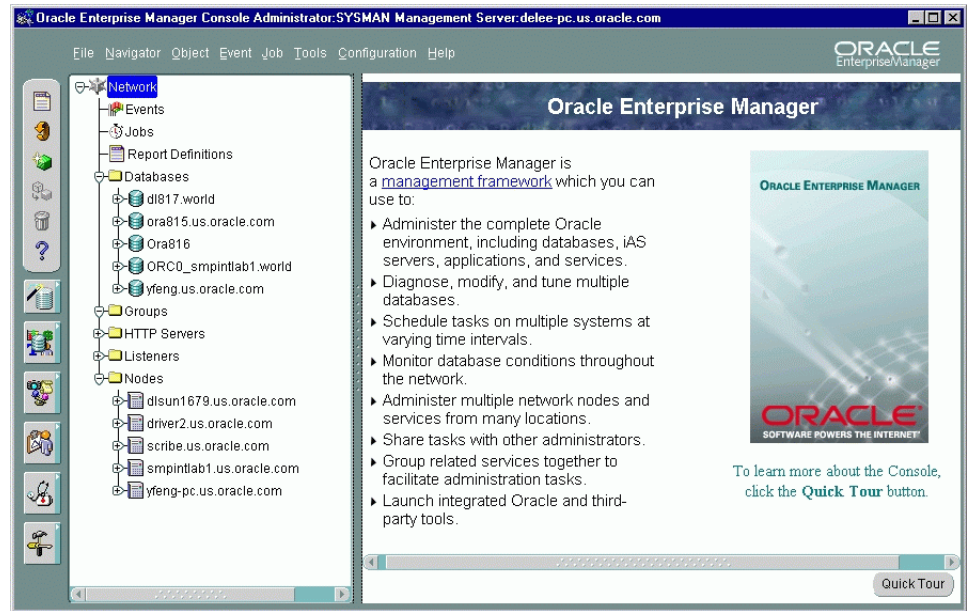
---

次の機能を使用する場合、Management Server へのログインによるコンソールの起動を選択します。

- いくつかの異なるターゲット・タイプ（たとえば、データベース、Web サーバー、アプリケーション・サーバー、アプリケーションなど）の管理
- 複数の管理者間での管理データの共有
- 潜在的な問題の事前の通知

- 繰り返される管理タスクの自動化
- バックアップおよびデータ管理ツール
- レポートのカスタマイズ、スケジューリングおよび公開
- Web ブラウザ内からのクライアントの実行

図 4-2 Management Server と接続するコンソール



## Management Server 接続によるコンソールの起動

Windows ベースのプラットフォームで、Windows の「スタート」メニューからコンソールを起動します。

サポートされているプラットフォームで、次のコマンドを使用し、コマンドラインからコンソールを起動します。

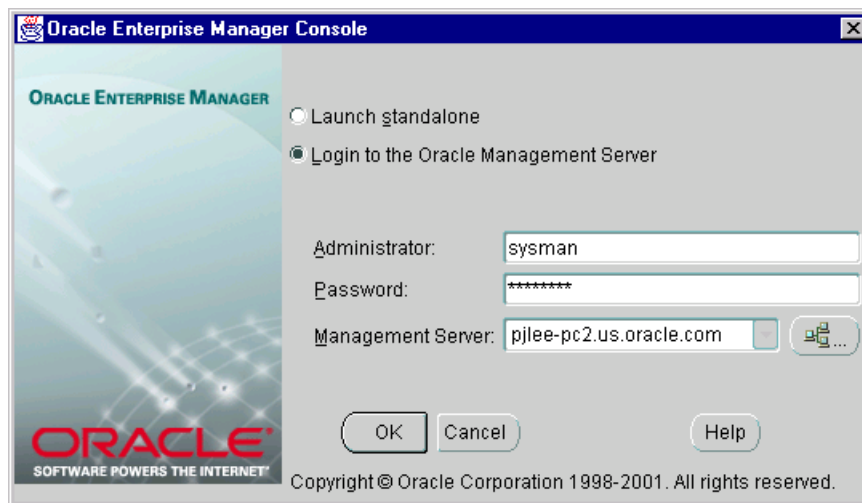
```
oemapp console
```

UNIX プラットフォームでは、コマンドラインの `oemapp` 部分は大文字と小文字が区別されるので、小文字で入力してください。

前述のオプションはすべて、Enterprise Manager ログイン・ダイアログで表示されます。ログイン・ダイアログを表示しない場合は、コマンドラインに次のコマンドを入力し、自動的に Management Server に接続してコンソールにログインできます。

```
oemapp console oem.loginmode=oms oem.credential=<username>/<password>@<oms>
```

図 4-3 Enterprise Manager コンソール・ログイン



ダイアログが表示されたら、「Oracle Management Server にログイン」を選択し、Management Server に最初にログインする場合はデフォルトの接続情報（たとえば、Enterprise Manager 管理者名およびパスワード）および Management Server マシン名を入力します。デフォルトの Enterprise Manager 管理者名は `sysman` で、そのパスワードは `oem_temp` です。選択または入力したノード上の Management Server は、アクセスするリポジトリで構成されている必要があります。

---

**注意：** Management Server とともに使用するリポジトリを、特定のスタンドアロン統合アプリケーションで使用するスタンドアロン・リポジトリと混同しないようにしてください。

---

Management Server が稼働しているノード名がプルダウン・リストに表示されない場合、編集フィールドにマシン名を入力するか、次の手順に従います。

1. 「Management Server」フィールドの右側にある「Management Server」ボタンをクリックします。「Management Server」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「追加」ボタンをクリックします。「Management Server の追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. Management Server が稼働しているノード名を指定して、「OK」をクリックします。

「Management Server」ダイアログを使用して Management Server を追加した場合、その Management Server がログイン・ダイアログに戻ったときの現行の選択になります。

---

**注意：** Oracle Enterprise Manager によりノード名が解決され、マシンの標準名が使用されることがあります。以降のダイアログ画面では、この名前が使用されます。たとえば、znripley-pc という名前は znripley-pc.us.ovenbird.com という名前に変更される場合があります。

---

最初に sysman/oem\_temp でログインした後に、セキュリティ・ダイアログが表示され、ここでデフォルトの sysman パスワードを変更できます。指定するパスワードには、大文字と小文字の区別はありません。Enterprise Manager の管理者のパスワードには、パスワードの最初または最後のスペース以外は、任意の文字を指定できます。

## 使用環境のノードの検出

Oracle Enterprise Manager には、ネットワーク・ノードおよびマシンを識別し、コンソールのナビゲータ・ツリーに検出されたノードおよびターゲットを移入するための、検出ウィザードがあります。データベースやリスナーなどの検出済ターゲットは、Enterprise Manager で管理できます。

Management Server が稼働しているマシンに Intelligent Agent がインストールされていて稼働している場合、コンソールの起動時には、そのマシンで管理可能なターゲットが自動的に検出されます。コンソールのナビゲータには、すべての検出されたターゲットが表示されます。

使用中の環境内のノードに存在する追加のノードおよびターゲットを検出するには、次のようにします。

1. コンソールの「ナビゲータ」メニューで「ノードの検出」を選択します。
2. 検出ウィザードが表示された場合は、イントロダクションを確認し、「次へ」を押して処理を続行します。
3. 「ノードの指定」ページが表示された場合は、テキスト・ウィンドウにノード名または IP アドレスを指定します。テキスト・ウィンドウに、検出するノードまたは IP アドレスを、空白、カンマ、タブまたは改行区切りで入力するか、「インポート」ボタンを使用してノード名のテキスト・ファイルをインポートすると、複数ノードのターゲットを一度に検出できます。「次へ」をクリックして処理を続行します。
4. 「進行」ページが表示され、ノード検出の状態が示されます。ノードが正常に検出された場合は、チェックマークが表示されます。ノードの検出に失敗した場合は、「X」が表示されます。エラーが発生した場合、エラーの理由を説明するエラー・テキストが表示され、処理を続行するのに必要な情報が示されます。検出プロセスが終了した後で、「完了」ボタンをクリックします。
5. 「検出結果」ダイアログ・ボックスが表示され、自動的に検出された、または検出されなかったノードが示されます。「OK」ボタンをクリックして、ダイアログ・ボックスを取り消します。

ノードで自動検出に失敗した場合は、「進行」ページの「次へ」ボタンをクリックします。「エラー」ページが表示され、ここで失敗したノードに対して、再試行、スキップまたは手動による検出を行うかどうかを選択できます。

検出に失敗したノードの一部で Intelligent Agent が稼働している場合は、そのノードをナビゲータに追加し、手動検出を使用してそのノードにデータベースを追加できます。

手動検出では、次の情報を入力するように要求されます。

- データベース名
- SID
- 通信に使用する TCP/IP ポート

ノードを手動で追加した場合、ノードに対するイベントの登録またはジョブの発行はできません。

---

---

**注意：** 手動で検出されたノードは、自動検出を行う前にナビゲータ・ツリーから削除しておく必要があります。

---

---

ノードが検出できない場合は、そのノードが停止していないか、またはノードで **Intelligent Agent** が稼働しているかを確認してください。また、TCP/IP ネットワーク・プロトコルを使用しているかどうかを確認します。ノードの検出の詳細は、『**Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド**』を参照してください。

---

---

**注意：** 同じ名前のターゲットが2つ以上検出された場合、ターゲット・タイプに関係なく、検出されたターゲットの一方のみがナビゲータに表示されます。

---

---

6. 通常の **Enterprise Manager** 管理者が定義されている場合、「ターゲットへのアクセス」ページが表示され、スーパー管理者は、通常の **Enterprise Manager** 管理者に対してコンソールのナビゲータに表示する内容を制御できます。これにより、スーパー管理者は、特定のユーザーに対するカスタマイズしたナビゲータを作成できます。ページには、複数列のリストが表示されます。最初の列には、コンソールのナビゲータに表示されるすべてのオブジェクトが表示されます。オブジェクト名の隣のプラス記号をクリックすると、オブジェクトが展開されます。スーパー管理者により定義された **Enterprise Manager** 管理者それぞれに対し、1つの列が存在します。通常の管理者がナビゲータ内で特定のオブジェクトを表示できるようにするには、その管理者に属する列で、ナビゲータのエントリに対応する行のチェックボックスをクリックします。
7. 「完了」ボタンを押します。

## 管理者アカウントの作成

Enterprise Manager は、複数管理者システムです。つまり、Enterprise Manager を使用してシステムを管理する人それぞれが、Management Server への接続によるコンソールへのログインに使用する管理者アカウントを持ちます。

Enterprise Manager をインストールすると、sysman という名前のスーパー管理者が 1 つ作成されます。スーパー管理者 sysman は、「構成」メニューの「管理者の管理」項目を使用して管理者を作成できます。各アカウントには、管理者名とパスワードの他に、スーパー管理者アカウントであるか、またはジョブまたはイベント（あるいはその両方）のみにアクセスできるアカウントであるかを指定できます。

この 2 種類のアカントには、次のような違いがあります。

- **スーパー管理者**には、すべてのオブジェクトに対する完全な権限が自動的に設定されます。セキュリティを強化するには、スーパー管理者のみがコンソールのナビゲータからターゲットを検出、リフレッシュまたは削除できるようにします。

大部分のスーパー管理者は、日常的な操作用に別のアカウントも持ちますが、新しい Enterprise Manager 管理者の作成、ポケットベル・サーバーまたは電子メール・サーバーの構成、管理リージョンの定義、または他の管理者へのターゲットへのアクセス権の付与など、スーパー管理者のみが実行できる特別な操作には、スーパー管理者アカウントを使用します。日常の管理作業での sysman アカウントの使用は、お勧めできません。スーパー管理者アカウントは UNIX の root または Windows NT の Administrator のように、削除も名前変更もできないユーザーです。あらゆるタスクを実行できるユーザーであるため、環境を設定する場合にのみ使用してください。

- **通常の管理者**は、コンソールの操作のサブセットにアクセスでき、スーパー管理者にアクセスを許可されたターゲットのみ表示できます。管理者による表示可能な内容のカスタマイズの詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

通常、すべての管理者が Enterprise Manager のリポジトリ 1 つを共有するため、管理者どうしで情報を共有できます。Enterprise Manager のリポジトリは、Management Server で共有されます。スタンドアロン・リポジトリではありません。複数のリポジトリを設定できますが、異なるリポジトリを使用する管理者は他の管理者の情報にアクセスできないため、リポジトリ間でのデータの共有はできません。リポジトリに格納されている管理データは、管理者の持つ許可に基づいてフィルタ処理されます。

管理者アカウントごとに、優先接続情報リストを設定する必要があります。管理者が Management Server を介して管理対象ターゲットに接続する場合、その管理者に明示的に定義された優先接続情報リストが使用されます。

コンソールの「構成」メニューの「管理者の管理」オプションで、Enterprise Manager の管理者を作成、編集および削除する方法の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。



## データベースの優先接続情報リストへの OEM\_MONITOR ロールの付与

Oracle 8.0.6 以上のデータベースでは、Oracle データベース作成スクリプトによって OEM\_MONITOR ロールが作成されます。このロールによって、データベースに対するイベントの登録や、コンソールのナビゲータ・ツリーを介したデータベース内のオブジェクトの参照などの Enterprise Manager 内のデータベース機能にアクセスすることができます。このような機能を使用するには、これらの操作を実行するためのデータベース接続情報が必要になります。多くの管理者は、データベース接続情報に高度な DBA ロールを付与するよりも、これらの操作を実行するのに必要最小限の権限を設定するほうを好みます。データベース接続情報に OEM\_MONITOR ロールを付与すれば、これらの操作に必要な最小限の権限がユーザーに設定されます。

---

---

**注意：** OEM\_MONITOR ロールは、SYS アカウントを使用して作成する必要があります。

---

---

次の手順を実行する必要があります。

1. OEM\_MONITOR というロールを作成します。

```
drop role OEM_MONITOR;  
create role OEM_MONITOR;
```

2. connect ロールを OEM\_MONITOR に付与します。

```
grant connect to OEM_MONITOR;
```

3. システム権限の analyze any および create table を OEM\_MONITOR に付与します。

```
grant analyze any to OEM_MONITOR;  
grant create table to OEM_MONITOR;
```

4. sc\_role.sql に定義されているように SELECT\_CATALOG\_ROLE ロールを作成します。

5. SELECT\_CATALOG\_ROLE を OEM\_MONITOR ロールに付与します。

```
grant select_catalog_role to OEM_MONITOR;
```

これで、Enterprise Manager でデータベース優先接続情報リストとして使用される OEM\_MONITOR ロールをデータベース・ユーザーに付与できます。ユーザーに OEM\_MONITOR ロールを付与する他にも、ユーザー・アカウントの QUOTA が UNLIMITED に設定されていることを確認する必要があります。

「連鎖行」イベント・テストでは、結果を表にして分析するため、analyze any と create table の両方の権限が必要です。

---

---

**注意：** analyze any 権限は、索引再作成イベントで統計を計算するときに使用されます。

---

---

## ジョブ・システムの有効化

Enterprise Manager 管理者がジョブを正常に発行するには、特定の構成手順を実行する必要があります。

- 管理者がジョブの発行を計画している **Intelligent Agent** マシンに対して、拡張ユーザー権限「バッチ ジョブとしてログオン」を持つオペレーティング・システム・ユーザー・アカウントが存在する必要があります。Windows NT および Windows 2000 プラットフォームで稼働している **Intelligent Agent** マシンにのみ適用されます。この目的においての新しいオペレーティング・システム・ユーザーの作成または既存のユーザーの編集の詳細は、後述の項を参照してください。
- 優先接続情報リストは、ジョブが発行されるノードに対して設定する必要があります。Windows NT および Windows 2000 で使用される優先接続情報リストは、拡張ユーザー権限「バッチ ジョブとしてログオン」を持つオペレーティング・システム・ユーザー・アカウントと同じである必要があります。優先接続情報リストの詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。
- 拡張ユーザー権限を持つオペレーティング・システム・ユーザー・アカウントには、ORACLE\_HOME\NETWORK ディレクトリに対する読取り / 書込み権限、および TEMP ディレクトリまたは ORACLE\_HOME ディレクトリに対する読込み、書込み、更新および削除権限がある必要があります。

---

---

**注意：** 「バッチ ジョブとしてログオン」権限を設定しない場合、ノードでジョブを実行しようとすると、「ユーザー認証に失敗しました。」というメッセージが表示されます。

---

---

ジョブが発行される Windows NT の管理対象ノードごとに、Windows NT ユーザー・アカウントを作成する必要があります。次の 3 つの手順のいずれかに従ってください。

## Windows NT の新規ユーザー・アカウントの作成

Intelligent Agent がインストールされている Windows NT マシンで新規の Windows NT ユーザー・アカウントを作成し、このユーザーに「バッチ ジョブとしてログオン」権限を付与するには、次の手順を実行します。

1. Windows NT の「スタート」メニューで、「管理ツール」から「ユーザー マネージャ」を選択します。このツールの詳細は、Windows NT のドキュメントを参照してください。
2. 「ユーザー」メニューから「新しいユーザー」を選択して、次のことを確認します。
  - 「ユーザーは次回のログイン時にパスワード変更が必要」オプション・ボックスがチェックされていません。
  - ユーザー名として SYSTEM または system を使用できません。
3. Windows NT の「ユーザー マネージャ」ユーティリティの「原則」メニューで、「ユーザーの権利」オプションを選択します。
4. 「高度なユーザー権利の表示」ボックスをチェックします。
5. 権限リストから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。
6. 選択したユーザーにこの権限を付与します。

## 既存の Windows NT ユーザー・アカウントへの権限の割当て

既存のローカル・ユーザー・アカウントに権限を割り当てるには、次の手順を実行してください。

1. 「ユーザー マネージャ」パネルでユーザーを選択し、次のことを確認します。
  - 「ユーザーは次回のログイン時にパスワード変更が必要」オプション・ボックスがチェックされていません。
  - ユーザー名として SYSTEM または system が使用されていません。
2. Windows NT の「ユーザー マネージャ」ユーティリティの「原則」メニューで、「ユーザーの権利」オプションを選択します。
3. 「高度なユーザー権利の表示」ボックスをチェックします。
4. 権限リストから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。
5. このユーザーに、高度なユーザー権利を追加します。
6. 「追加」ボタンをクリックします。
  - a. 「ドメインまたはコンピュータ」フィールドに入力します。(自分のドメインを選択)
  - b. 「ユーザーの表示」ボタンをクリックします。

- c. リストボックスでドメイン・ユーザーを選択します。
  - d. 「追加」をクリックします。
  - e. 「OK」をクリックします。
7. 「ユーザー権利の原則」ウィンドウで「OK」をクリックします。

## Intelligent Agent ユーザーとしての Windows NT ドメイン・ユーザーの構成

---

**注意：** Windows NT のドメイン・ユーザーは、マシンがプライマリ・ドメイン・コントローラ（PDC）の場合のみ機能します。これ以外の場合は、「VNI-2015: 認証エラー」でジョブが失敗します。PDC 以外のすべての環境では、アカウントはマシンに対してローカルにしてください。

---

Intelligent Agent ユーザーとしてドメイン・ユーザーを構成するには、次の手順を実行してください。

1. Windows NT の「ユーザー マネージャ」ユーティリティの「原則」メニューで、「ユーザーの権利」オプションを選択します。
2. 「高度なユーザー権利の表示」ボックスをチェックします。
3. 権限リストから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。
4. 「追加」ボタンをクリックします。
  - a. 「ドメインまたはコンピュータ」フィールドに入力します。（自分のドメインを選択）
  - b. 「ユーザーの表示」ボタンをクリックします。
  - c. リストボックスでドメイン・ユーザーを選択します。
  - d. 「追加」をクリックします。
  - e. 「OK」をクリックします。
5. 「ユーザー権利の原則」ウィンドウで「OK」をクリックします。

---

**注意：** ローカル・ユーザーとドメイン・ユーザーの名前が同じである場合、ローカル・ユーザーが優先されます。ドメイン・ユーザーを設定する場合には、ドメイン・パスワードにローカル・パスワードと同じものを設定して、このドメイン・ユーザー・アカウントを使用してジョブを発行したときに、スケジュールされたジョブを実行できるようにします。

---

## ポケットベル・サーバーの構成および起動

管理者がポケットベル通知を受けるには、Oracle Enterprise Manager ポケットベル・サーバーを明示的にインストールし、次にスーパー管理者がコンソールからこのサーバーを構成する必要があります。詳細は、対象のデータベース・リリースのインストール・ガイドを参照してください。

---

**注意：** ポケットベル・サーバーは Windows NT または Windows 2000 でしか使用できませんが、ポケットベル・サーバーの構成は UNIX プラットフォームおよび Windows プラットフォームのどちらでも可能です。

---

Oracle Enterprise Manager 内の通知用にポケットベルを利用する場合、インストールが必要なポケットベル・サーバーは 1 つのみです。

ポケットベル・サーバーでは、数字または英数字のポケットベルをサポートしており、次のポケットベル・サービス・プロトコルを使用しています（英数字のポケットベルのみ）。

- TAP (Telocator Alphanumeric Protocol)
- GSM (Global System for Mobile Communications)
- FLEXTD

英数字のポケットベルを使用するには、ポケットベル・サービス・プロバイダでモデムをコールするための電話番号と、英数字のポケットベルのピン番号が必要です。コールする電話番号については、ポケットベル・サービス・プロバイダにお問い合わせください。これは、ポケットベルを送信するためのモデムの番号です。

ポケットベル・プロバイダが、ポケットベルへの電子メール送信を行っている場合もあります。その機能が備わっている場合は、通知に電子メールを使用するように管理者の作業環境を構成し、ポケットベルを電子メールの受信機として指定できます。この方法は、多くのプロバイダで携帯電話に通知を送る場合にも使用されます。

ポケットベル・サーバーは自動的に構成されません。ポケットベル・サーバーを構成するには、次の手順に従います。

## ポケットベル・サーバーの構成

---

---

**注意：** ポケットベル・サーバーを構成できるのは、スーパー管理者のみです。通常の管理者はできません。

---

---

ポケットベル・サーバーを実行するマシンで、次の手順に従います。

1. モデムをインストールします。

---

---

**注意：** モデムは、ポケットベル・サーバーを実行する Windows NT または Windows 2000 マシンにインストールしてください。

---

---

2. モデム設定を指定します。

- a. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「モデム」を選択します (Windows NT)。
- b. 「モデム プロパティ」ページで「ダイアルのプロパティ」をクリックし、次のパラメータを設定して、ダイアル方法を指定します。
  - \* ダイアルする市外局番。
  - \* ダイアルする国。
  - \* 外線にアクセスする方法。外線にアクセスする際にダイアル番号が必要ない場合は、このフィールドは空白にしておいてください。
- c. 「モデム プロパティ」ページの「プロパティ」をクリックして「最高速度」パラメータを設定します。最高速度は 9600 ボーに設定することをお薦めしますが、各自のシステムに最適なボー・レートを設定してください。

---

---

**注意：** ボー・レートを 9600 よりも大きな値に設定すると、ポケットベル・サービス・キャリアでデータが失われることがあります。9600 というモデムのボー・レートは、推奨値にすぎません。ご使用のシステムに最適のボー・レート設定を見つけてください。

---

---

3. Oracle Enterprise ポケットベル・サーバーをインストールします。詳細は、対象のデータベース・リリースのインストレーション・ガイドを参照してください。
4. ポケットベル・サーバーを起動します。
  - a. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「サービス」を選択します。
  - b. 「Oracle<ORACLE\_HOME\_NAME>PagingService」を選択し、「起動」をクリックします。

コマンド・プロンプトで次のように入力して、ポケットベル・サーバーを起動することもできます。

```
oemctl start paging
```

## ポケットベル・サーバーの追加

Enterprise Manager コンソールにポケットベル・サーバーを追加するには、次の操作を実行します。

1. コンソールの「構成」メニューで、「ポケットベル / 電子メールの設定」を選択します。「ポケットベル / 電子メールの設定」プロパティ・シートが表示されます。
2. ツリー・リストの「ポケットベル設定」をクリックし、現在のポケットベル・サーバー情報を表示します。
3. 「ポケットベル設定」を右クリックしてポップアップ・メニューを表示し、「サーバーの追加」を選択します。詳細ビューの「サーバーの追加」アイコンをクリックすることもできます。「ポケットベル・サーバーの追加」ダイアログが表示されます。
4. ポケットベル・サーバーを実行するマシンの名前を入力します。たとえば、`smpqa-pc` と入力します。
5. 「OK」をクリックします。

指定したホスト名のポケットベル・サーバーがコンソールで検出されない場合、「VD-4362: ポケットベル・サーバーを追加できません。ポケットベル・サーバー <hostname> が停止中です。」というエラーが表示されます。

ポケットベル・サーバーが検出されると、ツリー・リストの「ポケットベル設定」オブジェクトの下に、新しいポケットベル・サーバー・オブジェクトが追加されます。新しいポケットベル・サーバーにはポケットベル・キャリアはありません。ポケットベルが機能するためには、少なくとも1つのポケットベル・キャリアを追加する必要があります。

## ポケットベル・キャリアの追加

1. コンソールの「構成」メニューで、「ポケットベル / 電子メールの設定」を選択します。「ポケットベル / 電子メールの設定」プロパティ・シートが表示されます。
2. ツリー・リストの「ポケットベル設定」オブジェクトを展開します。以前に追加したポケットベル・サーバーのいずれかを右クリックし、ポップアップ・メニューから「サーバーの追加」を選択します。右側の詳細ビューの「キャリアの追加」アイコンをクリックすることもできます。「ポケットベル・キャリアの追加」ダイアログが表示されます。
3. テキスト入力フィールドに、必要な情報を入力します。ポケットベル・キャリアを定義した後は、「ポケットベル / 電子メールの設定」ツリー・リストで適切なポケットベル・サーバーおよびキャリアのオブジェクトを展開すると、ポケットベル・キャリアが表示されます。図 4-4 「「ポケットベル・キャリアの追加」ダイアログ・ボックス」を参照してください。

4. 「OK」をクリックします。

図 4-4 「ポケットベル・キャリアの追加」ダイアログ・ボックス

The screenshot shows the 'Add Paging Carrier' dialog box. It has a title bar with the text 'Add Paging Carrier' and a close button. The dialog contains the following fields and sections:

- Name:** A text input field.
- Type:** A dropdown menu with 'Alphanumeric' selected.
- Protocol:** A dropdown menu with 'TAP' selected.
- Connection Properties:** A section containing:
  - Country Code:** A text input field.
  - Area Code:** A text input field.
  - Number:** A text input field.
  - Suffix:** A text input field.
- Dialing Properties:** A section containing:
  - Timeout (in seconds):** A text input field with the value '60'.
  - Delay (in seconds):** A text input field with the value '3'.
- Buttons:** 'OK', 'Cancel', and 'Help' buttons at the bottom.

- 名前

ポケットベル・キャリアの名前。フィールドでは、英数字およびアンダースコアを使用できます。

- タイプ

ポケットベル・キャリアのタイプ。Enterprise Manager では、「英数字」または「数字」がサポートされています。

- プロトコル

「TAP」、「FLEXTD」または「GSM」。プロトコル選択は、キャリアの「タイプ」が「英数字」の場合にのみ使用可能になります。

- 接続プロパティ

- \* 国コード： 国際通話の場合、ポケットベルにダイヤルするときに使用する国コード。
- \* 地域コード： このポケットベルが所在する国で使用される地域コード。
- \* 番号： ポケットベルのローカル・ダイヤル番号。
- \* 接尾辞： これにより、ポケットベル・キャリアからのボイス・メッセージの識別が可能になり、ポケットベルで呼び出される人は、プッシュホン使用時に複数のオプションから選択できます。たとえば、カンマは休止として使用できます。「接尾辞」フィールドでは、整数、カンマ、ポンド記号および星印（ア



スタリスク)を入力できます。このオプションは、ポケットベル・キャリア・タイプが「数字」に設定されている場合にのみ使用可能になります。

- ダイアル・プロパティ
  - \* タイムアウト (秒) : ポケットベルの呼出しに成功するまでに許容される最大ダイアル時間。
  - \* 遅延 (秒) : ダイアルまでの遅延時間。このオプションは、ポケットベル・キャリア・タイプが「数字」に設定されている場合にのみ使用可能になります。

## ポケットベル通知の作業環境の指定

ポケットベル・サーバー構成の完了後、すべての管理者に対して通知およびスケジュールの作業環境を指定する必要があります。構成をテストし、正しく構成されているかを確認する必要もあります。詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

## 電子メール・サーバーの構成

管理者が電子メールで通知を受けるには、まずスーパー管理者はコンソールから電子メール・サーバーを構成する必要があります。

1. コンソールの「構成」メニューで、「ポケットベル / 電子メールの設定」を選択します。「ポケットベル / 電子メールの設定」ダイアログが表示されます。デフォルトでは、「電子メール設定」はすでに選択されています。
2. 「SMTP メール・ゲートウェイ」入力フィールドに、SMTP メール・ゲートウェイが存在するノードを入力します。たとえば、`mailserver.company.com` と入力します。
3. 「送信者の SMTP メール・アドレス」入力フィールドに、電子メールの送信者の識別に使用する名前を入力します。

SMTP メール構成の完了後、電子メールの通知を受信するすべての管理者に対して通知およびスケジュールの作業環境を指定する必要があります。詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

## Enterprise Manager レポート作成の構成

Enterprise Manager のレポート作成システムにより、管理者には柔軟なレポート作成機能が提供され、企業のすべての監視対象システムのステータスの情報へのアクセスが速く、容易になります。管理者は、多様な企業システムのレポートを作成、スケジュールおよび公開できます。Web サイトに公開すると、広範囲にわたるユーザーがレポートにアクセスできるようになり、管理者からマネージャ、役員にいたるまで、あらゆるユーザーが監視対象企業の情報にすばやくアクセスできます。

公開されたレポートにアクセスするには、Enterprise Manager Web サイト・コンポーネントがインストールされていることを確認してください。デフォルトでは、Oracle\_Home/oem\_webstage ディレクトリの下に Management Server とともにインストールされています。また、Enterprise Manager Web サイトでは、事前構成済の Oracle HTTP Server が自動的にインストールされ、レポート作成 Web サーバーとして機能します。ブラウザベースの Enterprise Manager 用にデフォルトで使用する HTTP サーバーと同じです。

## Oracle HTTP Server の起動および停止

デフォルトで Enterprise Manager にパッケージされた Oracle HTTP Server がすでにインストールされている場合、次の手順を実行して開始します。

### Windows NT の場合

Oracle HTTP Server を起動するには、次のようにします。

1. 「スタート」メニュー→「設定」→「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. 「OracleHTTPServer\_<Oracle\_Home\_Name>」サービスを選択します。
3. 「起動」ボタンをクリックして、Oracle HTTP Server を起動します。

### UNIX の場合

コマンドラインから次のコマンドを使用して、Oracle HTTP Server を起動できます。

```
$Oracle_Home/Apache/Apache/bin/apachectl start
```

Oracle HTTP Server を停止するには、次の手順を実行します。

### Windows NT の場合

Windows NT で Oracle HTTP Server を停止するには、次の手順を実行します。

1. 「スタート」メニュー→「設定」→「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. 「OracleHTTPServer\_<Oracle\_Home\_Name>」サービスを選択します。
3. 「停止」ボタンをクリックして、Oracle HTTP Server を停止します。

## UNIX の場合

コマンドラインから次のコマンドを使用して、Oracle HTTP Server を停止できます。

```
$Oracle_Home/Apache/Apache/bin/apachectl stop
```

Enterprise Manager Web サイトをインストールし、Oracle HTTP Server を起動した後に、公開されたレポートにアクセスするために次の構成手順を実行する必要があります。

## REPORTS\_USER 管理者パスワードの変更

REPORTS\_USER 管理者のデフォルトのパスワード (oem\_temp) を変更する必要があります。

パスワードを変更するには、次のようにします。

1. Enterprise Manager コンソールで、「構成」メニューの「管理者の管理」を選択します。「管理者アカウントの管理」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. リストから「REPORTS\_USER」を選択します。
3. 「編集」をクリックします。「編集 管理者作業環境」プロパティ・シートが表示されます。
4. 「パスワード」フィールドに新しいパスワードを入力し、「パスワード確認」領域に新しいパスワードを再入力します。
5. 「OK」をクリックしてパスワードを設定します。

## oemctl configure rws スクリプトの実行

oemctl configure rws スクリプトは、Management Server およびレポート作成 Web サーバーがインストールされるマシンで実行する必要があるコマンドライン・ユーティリティです。スクリプトを実行する前に、レポート作成 Web サーバー・マシンで Management Server が稼働していることを確認してください。

構成ユーティリティを実行するには、次のようにします。

1. Management Server およびレポート作成 Web サーバー両方が稼働しているマシンを選択します。
2. コマンド・プロンプトで、oemctl configure rws と入力します。
3. ユーティリティにより示される手順に従います。次の情報が要求されます。
  - レポート作成 Web サーバー・ホスト名： 完全なノード名を入力します。
  - ポート番号： デフォルトは 3339 です。[Return] を押し、デフォルト値を受け入れます。

- Oracle Management Server ホスト名： Management Server が稼働しているマシンの名前を入力します。Web サーバーに対して入力した名前がデフォルトになります。
- REPORTS\_USER のパスワード： REPORTS\_USER のパスワードを入力します。  
oem\_temp パスワードを変更する必要があります。変更しない場合、REPORTS\_USER のパスワードをデフォルトのままにして oemctl configure rws スクリプトを実行すると、エラー・メッセージが生成されます。

4. 構成ユーティリティにより、構成を続行するかを確認されます。

**注意：** oemctl configure rws を実行する前にコンソール・メニューで「公開レポートの表示」を選択すると、まずレポート作成 Web サイトを構成する必要があることを示すエラー・メッセージが生成されます。

## ダイアルアップ回線を使用する場合のコンソールの構成

正しい TCP/IP 構成が必要です。TCP/IP 構成が間違っていると、タイムアウトになり、接続が失われます。

---

---

**注意：** DHCP によるダイナミック IP アドレスは、Management Server または Intelligent Agent を実行しているノードではサポートされません。DHCP は、Enterprise Manager クライアントでのみサポートされます。

---

---

コンソールの接続にダイアルアップ回線を使用する場合は、コンソール・マシンでダイナミック IP アドレスが取得されます。このダイナミック IP アドレスは、オペレーティング・システム（Windows 2000、Windows NT、Windows 98）によって Enterprise Manager アプリケーションに送信されます。

オペレーティング・システムが正しい IP アドレスを返すには、ネットワーク通信プロトコル（TCP-IP）を、Dynamic Host 構成プロトコル（DHCP）を使用して、IP アドレスが取得されるように構成する必要があります。この設定は、次のように指定します。

1. 「スタート」メニューから「設定」を選択します。
2. 「コントロール パネル」→「ネットワーク」を選択します。
3. 「プロトコル」を選択します。
4. 「TCP-IP プロトコル」をダブルクリックします。

**重要：** イーサネットを介して同じマシンをネットワークに接続するときに、設定を元に戻せるように、前の設定を控えておいてください。「IP アドレス」、「サブネット マスク」および「デフォルト ゲートウェイ」で指定した設定は、ファイルにコピーしてください。

5. 「IP アドレス」ページで「DHCP サーバーから IP アドレスを取得する」を選択します。

6. 「OK」 ボタンをクリックします。
7. ダイヤルアップ回線を介して、ネットワークに接続します。これで、コンソールを起動できるようになります。

---

**注意：** Web ブラウザから実行していない場合には、変更後、システムを再起動する必要があります。

---



---

## Web ブラウザからの Enterprise Manager の 実行

この章では、Web ブラウザからの Enterprise Manager およびその管理アプリケーションの実行方法について説明します。

## Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager の実行

Oracle Enterprise Manager では、管理者は、製品がインストールされている任意のマシンでターゲットを管理できます。管理者は、サポートされる Web ブラウザから Enterprise Manager を実行するために Enterprise Manager Web サイトを配置できます。

---

**注意：** ブラウザベースの Oracle Enterprise Manager は、Windows 2000、Windows NT および Windows 98 のオペレーティング・システムの Web ブラウザでのみサポートされています。

---

すべての Enterprise Manager 製品およびアプリケーションのうち、次のものは、Web 対応していません。

- Oracle Diagnostics Pack
  - Oracle Capacity Planner
  - Oracle Trace Data Viewer
- Oracle Tuning Pack
  - Oracle Expert
  - Oracle Index Tuning Wizard
  - Oracle SQL Analyze
- 統合アプリケーション
  - Oracle Directory Manager
  - Oracle Net Manager

Web ブラウザから Oracle Enterprise Manager を実行するには、次のインストールおよび構成手順を実行します。



## クライアント・インストール

サポートされている Web ブラウザが、Web 対応の Enterprise Manager が稼働するクライアント・マシンにインストールされているかを確認してください。

サポートされている Web ブラウザは、次のとおりです。

- Netscape Navigator 4.7 以上 (Windows 2000、Windows NT および Windows 98)
- Microsoft Internet Explorer 5.0 以上 (Windows 2000、Windows NT および Windows 98)

---

---

**注意：** Microsoft Active Desktop から実行されている Microsoft Internet Explorer の使用はサポートされていません。

---

---

## サーバー側インストール

1. Enterprise Manager Web サイト・コンポーネントがインストールされていることを確認します。デフォルトでは、Oracle\_Home/oem\_webstage/ ディレクトリの下に Management Server とともにインストールされています。また、Enterprise Manager Web サイトでは、事前構成済の Oracle HTTP Server が自動的にインストールされ、その Web サーバーとして機能します。これは、ブラウザベースの Enterprise Manager レポート作成 Web サイトで使用される HTTP サーバーと同じです。
2. Oracle HTTP Server を起動するには、次の手順を実行します。

### Windows NT の場合

Oracle HTTP Server を起動するには、次のようにします。

- a. 「スタート」メニュー→「設定」→「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
- b. 「OracleHTTPServer\_<Oracle\_Home\_Name>」サービスを選択します。
- c. 「起動」ボタンをクリックして、Oracle HTTP Server を起動します。

### UNIX の場合

コマンドラインから次のコマンドを使用して、Oracle HTTP Server を起動できます。

```
$Oracle_Home/Apache/Apache/bin/apachectl start
```

Oracle HTTP Server を停止するには、次の手順を実行します。

### Windows NT の場合

Windows NT で Oracle HTTP Server を停止するには、次の手順を実行します。

- a. 「スタート」メニュー→「設定」→「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。

- b. 「OracleHTTPServer\_<Oracle\_Home\_Name>」 サービスを選択します。
- c. 「停止」 ボタンをクリックして、Oracle HTTP Server を停止します。

### UNIX の場合

コマンドラインから次のコマンドを使用して、Oracle HTTP Server を停止できます。

```
$Oracle_Home/Apache/Apache/bin/apachectl stop
```

デフォルトで構成済の Oracle HTTP Server 以外の Web サーバーを使用する場合は、別のサポートされている Web サーバーをインストールし、手動で構成する必要があります。他にサポートされている Web サーバーには、次のものがあります。

- Oracle Internet Application Server リリース 1.0 以上 (Intel Solaris、Sun SPARC Solaris、HP-UX、IBM AIX、Compaq Tru64、Linux、Windows NT および Windows 2000)
- Apache リリース 1.3.9 以上 (Sun SPARC Solaris、Windows NT および Windows 2000)
- Microsoft Internet Information Server (IIS) リリース 4.0 以上 (Windows NT または Windows 2000)

ブラウザベースの Enterprise Manager とともに使用する Oracle Web サーバー以外のサーバーの構成例は、5-8 ページの「[OEM\\_Webstage の Web サーバーおよびディレクトリ・マッピングの構成](#)」を参照してください。

## クライアントでのブラウザベースの Oracle Enterprise Manager の実行

前述の構成手順を実行すると、ブラウザベースで Oracle Enterprise Manager を実行できるようになります。

---

**注意：** Web ブラウザから Enterprise Manager を実行するには、各自の Web ブラウザで使用する目的で構成されているプロキシを削除する必要があります。プロキシを削除するには、次の方法があります。

- Web ブラウザのプロキシ設定を使用して、ネットワークに直接接続するように選択します。または、
- プロキシを手動で構成するように選択します。ここでは、Enterprise Manager Web サイトを実行している Web サーバーのプロキシを使用しないように指定します。

プロキシで問題が発生した場合は、F-18 ページの「[Web ブラウザのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

---

1. Web ブラウザを起動して、Web サーバーがインストールされている場所に関係なく、次の URL を指定します。

```
http://<webserver hostname>:<port number>/
```

たとえば、次のようになります。

```
http://znripley-sun.us.ovenbird.com:3339/
```

---

**注意：** デフォルトの事前構成済 Oracle HTTP Server のポート番号は 3339 です。

---

索引 (emwebsite.html) ページが表示されます。索引ページでは、Enterprise Manager コンソール、Enterprise Manager レポート作成 Web サイトおよびドキュメントを起動でき、各種の Web サイトにアクセスできます。Enterprise Manager レポート作成 Web サイトの設定の詳細は、4-18 ページの「[Enterprise Manager レポート作成の構成](#)」を参照してください。

2. この索引ページから、コンソールを起動する場合、接続する Management Server のマシン名を入力し、「コンソールの起動」ボタンをクリックします。公開済の Enterprise Manager レポートにアクセスする場合、(デフォルトと異なる場合は) レポート作成 Web サーバーのホスト名およびポート番号を入力し、「レポートへのアクセス」ボタンをクリックします。ボタンを押す前に Enterprise Manager レポート作成を構成する必要があります。Enterprise Manager レポート作成 Web サイトの設定の詳細は、4-18 ページの「[Enterprise Manager レポート作成の構成](#)」を参照してください。

図 5-1 emwebsite.html ページ



- 初めてこの URL を入力する場合は、Oracle JInitiator プラグインのリリース 1.1.8.8 をインストールする必要があります。

- Netscape では、プラグインのインストールを自動的に要求されます。

---

**注意：** 初回のみプラグインをインストールするように要求されますが、インストール前にこれを終了または取り消すと、次回にブラウザベースの Enterprise Manager を起動しても、インストールは要求されなくなります。このような場合にプラグインをインストールするには、索引ページの「Download Plug-in」リンクをクリックして Java プラグインをダウンロードします。

---

- Microsoft Internet Explorer では、索引ページの「Download Plug-in」リンクをクリックすると、プラグインをダウンロードできます。

4. プラグインのページの指示に従って、プラグインをダウンロードします。ご利用のマシンおよびネットワーク環境によっては、プラグインのダウンロードに時間がかかることがあります。
5. Java プラグインをインストールすると、ダイアログが表示され、次のような説明が表示されます。
  - コンソール・アプレットは、ブラウザ・ウィンドウから起動されています。ダイアログを閉じると、アプレットが停止します。

アプリケーションはこのブラウザ・ウィンドウから起動されているため、コンソールを停止せずに Oracle Enterprise コンソールの画面を閉じることはできません。
  - コンソールを終了せずに、emwebsite.html ページを終了できます。また、「Oracle Enterprise Manager ログイン」ダイアログが表示されます。

---

**注意：** ブラウザベースの Oracle Enterprise Manager を最初に起動するときは時間がかかることがあります。また、ダイアル・アップ接続を行っている場合には、ダウンロード時間が長くなりますが、回線スピードによって時間は異なります。ブラウザベースの Oracle Enterprise Manager を初めて起動するときは、進捗状況ダイアログが表示されます。

---

6. Oracle Enterprise Manager に初めてログインする場合は、デフォルトの接続情報（管理者名とパスワード）を入力します。

管理者 = sysman

パスワード = oem\_temp

これらの接続情報は、デフォルトのスーパー管理者アカウントのものです。Enterprise Manager を最初に起動する場合は、このスーパー管理者としてログインしてください。スーパー管理者アカウントを使用して別の管理者アカウントがすでに作成されている場合は、別の管理者としてログインできます。

---

**注意：** 指定した Management Server に接続できない場合は、索引 (emwebsite.html) ページに戻って、Management Server の別のマシン名を指定してください。Oracle Enterprise Manager ログイン画面で、Management Server のマシン名を入力することはできません。

---

7. URL のブックマークを作成します。

---

---

**注意：** ブラウザベースの Enterprise Manager アプリケーションを実行する場合にアクセスできる URL は 1 つのみです。1 台のマシンから複数の URL を介してブラウザベースの Enterprise Manager アプリケーションにアクセスすることはできません。

---

---

## OEM\_Webstage の Web サーバーおよびディレクトリ・マッピングの構成

ブラウザベースの Enterprise Manager 用にデフォルトで構成済の Oracle HTTP Server 以外の Web サーバーを使用する場合は、別のサポートされている Web サーバーをインストールし、手動で構成する必要があります。他にサポートされている Web サーバーには、次のものがあります。

- Oracle Internet Application Server リリース 1.0 以上 (Intel Solaris、Sun SPARC Solaris、HP-UX、IBM AIX、Compaq Tru64、Linux、Windows NT および Windows 2000)
- Apache リリース 1.3.9 以上 (Sun SPARC Solaris、Windows NT および Windows 2000)
- Microsoft Internet Information Server (IIS) リリース 4.0 以上 (Windows NT または Windows 2000)

Apache Server および Microsoft Internet Information Server を構成するには、次の説明を参照してください。

### Apache 1.3.9 以上

1. Enterprise Manager Web サイトを、Oracle HTTP Server なしでインストールします。
2. Apache 1.3.9 以上をインストールします。詳細は、Apache 固有の構成ドキュメントを参照してください。
3. Apache ホーム /conf/httpd.conf/ にある httpd.conf を編集します。
4. ScriptAlias は、サーバー・スクリプトがどのディレクトリに含まれるかを制御します。ScriptAlias は、基本的には Alias と同じものですが、実際のディレクトリ (realname ディレクトリ) のドキュメントが、(クライアントに送信されたドキュメントとしてではなく) アプリケーションとして処理され、要求されたときにサーバーで実行される点が異なります。

ScriptAlias では、後続の「/」は Alias の場合と同じルールで使用されます。

```
ScriptAlias /oem_webstage/cgi-bin/
"/private/ora90/oem_webstage/cgi-bin/"
```

---

**注意：** /private/ora90/ は、Oracle ホームです。

---

5. 任意の数の別名を追加できます（制限はありません）。次の形式で指定します。

```
Alias fakename realname
```

fakename に後続の「/」が含まれている場合は、サーバーでは「/」も URL に含まれていると見なされます。この例では、/icons/ ではなく /icons/ が別名となります。

```
Alias /icons/ "/usr/local/apache/icons/"
```

```
Alias /oem_webstage/ "/private/ora90/oem_webstage/"
```

---

**注意：** /private/ora90/ は、Oracle ホームです。

---

6. ScriptAlias で定義された CGI ディレクトリが構成されている場合は、そのディレクトリに /apache/cgi-bin ディレクトリを変更します。

```
<Directory "/usr/local/apache/cgi-bin"> から
```

```
<Directory "/private/ora90/oem_webstage/cgi-bin"> へ
```

```
AllowOverride all
```

```
Allow from all
```

```
</Directory>
```

7. Web サーバーを停止し、再起動します。

```
apachectl stop
```

```
apachectl start
```

## Internet Information Server (IIS) 4.0

Internet Information Server を使用するには、oem\_webstage ディレクトリとそのディレクトリ内の 2 つのサブディレクトリを指す 3 つの仮想ディレクトリを作成する必要があります。oem\_webstage ディレクトリは、Oracle Enterprise Manager Web サイト・コンポーネントをインストールすると、次のインストール手順で自動的に作成されます。

1. Enterprise Manager Web サイトを、Oracle HTTP Server なしでインストールします。
2. Internet Information Server (IIS) 4.0 をインストールします。詳細は、Internet Information Server 固有の構成ドキュメントを参照してください。
3. Windows NT の「スタート」メニューで、「Microsoft Internet Information Server 4.0」→「Internet Service Manager」を選択し、Internet Information Server を構成します。「Microsoft Internet Service Manager」画面が表示されます。
4. 「Default Web Site」を選択して右クリックすると、関連するサブメニューが表示されます。
5. 「Properties」をクリックし、Default Web Site のプロパティ・シートを表示します。
6. ノードの IP アドレスが、プロパティ・シートに正しく設定されていることを確認します。「OK」をクリックします。
7. 「New」、「Virtual Directory」を選択します。
8. 仮想ディレクトリの名前を入力します。たとえば、oem\_webstage と入力します。
9. 次のように設定します。

Alias: /oem\_webstage

Path: ORACLE\_HOME¥oem\_webstage

Access: Read、Execute

10. 設定を保存した後、「Default Web Site」を展開して、新しい仮想ディレクトリを表示します。
11. 新しい仮想ディレクトリ oem\_webstage を選択します。
12. 「Action」ボタンをクリックし、「New」、「Virtual Directory」を選択して、次の設定で追加の仮想ディレクトリを作成します。

Alias: cgi-bin

Path: ORACLE\_HOME¥oem\_webstage¥cgi-bin

Access: Read、Execute



13. 追加の仮想ディレクトリを ¥oem\_webstage¥java-plugin という別名で、ディレクトリ ORACLE\_HOME¥oem\_webstage¥java-plugin に作成し、次のように設定します。

Alias: java-plugin

Path: ORACLE\_HOME¥oem\_webstage¥java-plugin

Access: Read-only

**注意：** 実行権限を与えないようにしてください。実行権限を与えると、プラグインをダウンロードできなくなります。

14. Web サーバーを再起動します。



---

## Oracle Management Server のチューニング

企業が多数のノードを管理しているような特殊な環境では、Management Server をチューニングしてパフォーマンスを向上させる必要があります。Management Server 構成パラメータを設定すると、チューニングを実行できます。後述の項を参照してください。

omsconfig.properties ファイルを編集した後に変更を有効にするには、Management Server をいったん停止してから再起動してください。

## ping 間隔の設定

Management Server は、すべてのターゲットに対して定義済の間隔で ping を実行し、すべての管理対象ターゲットの状態を監視するように設計されています。

ping を実行する間隔を管理するには、omsconfig.properties ファイルで次のプロパティを使用して、ping の間隔を設定します。

```
oms.vdp.ping_interval=<integer; time in minutes; default 2>
```

ノードの動作 / 停止テストが含まれているイベントで設定したポーリング頻度に関係なく、この間隔の設定によって、Management Server がノードの動作 / 停止をテストする間隔（分数）が決まりますので注意してください。

時間のデフォルトは 2 です。多数のノード（64 個以上）を管理する Management Server の場合、このパラメータを調整して、すべてのノードに対して ping を実行するのに十分な時間を Management Server に提供します。

## 最大発信接続数の設定

Management Server は、異なる Intelligent Agent への同時接続数を一定に維持できるように設計されています。

同時発信接続数を管理するには、omsconfig.properties ファイルで次のプロパティを使用します。

```
oms.vdg.max_out_conns =<integer; default 64>
```

デフォルトは 64 です。パフォーマンスが低下しないように、この値は、Management Server で管理されるノード数と同じか、それより大きく設定することをお勧めします。管理対象ノードの最大数が 64 未満の場合は、デフォルト値を適用することをお勧めします。管理対象ノードの最大数が 64 以上の場合は、値をノード数と同じに設定してください。

## 最大着信接続数の設定

Management Server は、同時着信接続数を一定に維持できるように設計されています。

同時着信接続数を管理するには、omsconfig.properties ファイルで次のプロパティを使用します。

```
oms.vdg.max_in_conns=<integer; default 32>
```

パフォーマンスが低下しないように、この値は oms.vdg.max\_out\_conns の値の半分に設定することをお勧めします。

## Management Server 再試行間隔の設定

Management Server とリポジトリ・サーバーの接続が失われた場合、リポジトリ・サーバーとの再接続を試行するように Management Server を構成できます。Management Server は、次の 2 つのパラメータにより、定義済の間隔で再試行するように設計されています。

- `oms.repository.connect_timeout`
- `oms.repository.connect_numTries`

再試行間隔を指定するには、`omsconfig.properties` ファイルで次のプロパティを使用し、再試行間隔を設定します。

```
oms.repository.connect_timeout=<time in seconds>
oms.repository.connect_numTries=<integer>
```

`oms.repository.connect_timeout` は、Management Server がリポジトリ・データベースの起動を待機する最大時間（秒）です。

`oms.repository.connect_numTries` は、Management Server サービスの起動前に Management Server がリポジトリに接続試行する最大回数です。

再試行間隔は、`oms.repository.connect_timeout` の値を `oms.repository.connect_numTries` の値で割った値です。

デフォルトでは、プロパティは次のように設定されます。

```
oms.repository.connect_timeout=120
oms.repository.connect_numTries=12
```

Management Server は、起動時に 10 秒間隔で合計 12 回、リポジトリ接続を試行します。

## 一時的なネットワーク障害を許容する設定

Management Server では、ノードが稼働しているか停止しているかを検出するために、毎回すべてのノードへの ping を試行します。

前回あるノードへの ping が正常に行われ、今回は失敗したことが検出された場合、このノードは停止しているものとしてマークされます。

次のパラメータで、一時的なネットワークの停止に対する ping の許容度を高くできます。

```
oms.vdg.conn_retries = (integer, default 1)
```

このパラメータでは、Management Server が ping または他の通信に対して接続を試行する再試行回数が指定されます。Management Server では、デフォルトは 1 に設定されています。つまり、接続の再試行は行いません。

一時的な停止が発生しやすいネットワークの場合、2 または 3 に設定してください。

```
oms.vdg.conn_retries_delay = (integer, default 5)
```

このパラメータでは、Management Server が接続を再試行するまでの待機時間（秒数）を指定します。

このパラメータは、ネットワークの停止時間に応じて値を設定する必要があります。

前述のパラメータは、\$ORACLE\_HOME/sysman/config ディレクトリの omsconfig.properties.template に記述されています。

---

## ディレクトリ構造

この付録では、Oracle Enterprise Manager のインストールで作成される重要なディレクトリおよびファイルについて説明します。

Enterprise Manager およびそのコンポーネントのインストールで作成される多くのディレクトリの中で、最も重要で役立つディレクトリを次に示します。

### **\$ORACLE\_HOME/sysman/**

このディレクトリの詳細は、後述します。

### **\$ORACLE\_HOME/relnotes/em/**

Enterprise Manager およびその管理アプリケーション固有の英語 readme ファイルが含まれます。この英語 readme ファイルには、実際の Oracle Enterprise Manager 製品とそのドキュメントに記述された機能との差異が示されます。

### **\$ORACLE\_HOME/doc/em/**

Enterprise Manager およびその管理アプリケーション固有の（ドキュメントの CD-ROM からのインストールで選択された）英語ドキュメントが含まれます。デフォルトでは、このディレクトリには、Oracle のパフォーマンス測定のガイドとして使用する HTML 形式の完全な診断ヘルプ・システムも含まれます。

## \$ORACLE\_HOME/sysman/ ディレクトリ

\$ORACLE\_HOME/sysman/ ディレクトリには、理解しておく必要があるいくつかのサブディレクトリが含まれます。

### admin/

Enterprise Manager Configuration Assistant で、Management Server およびリポジトリの構成の実行に使用される SQL スクリプトおよびレジストリ・ファイルが含まれています。このディレクトリの内容は変更しないでください。

### config/

Enterprise Manager コンポーネントのいくつかの構成ファイルが含まれます。このディレクトリ内の次のファイルのみ、変更できます。

- dbappscfg.properties

SQL\*Plus Worksheet 固有の構成設定が含まれます。

- clientconfig.properties

Management Server が稼働しているマシンのリストが含まれます。このファイルでは、Enterprise Manager コンソールおよび管理アプリケーションのトレースもできます。

- clientconfig.properties.template

Change Manager のトレースを可能にする構成の詳細が含まれます。

- omsconfig.properties

データベース・リポジトリ接続情報を含むローカル Management Server の構成の詳細が含まれます。このファイルでは、中間層の Management Server のトレースおよびロギングもできます。

- omsexternalregistry.registry.template

外部サービス・レジストリ・ファイルを追加できます。このファイルには現在、Management Server と Oracle Internet Directory Server の統合のための外部サービス・レジストリ設定が含まれています。Management Server を Directory Server と接続する場合、このファイルを omsexternalregistry.registry にコピーし、Management Server を再起動する必要があります。Oracle Internet Directory では、Oracle ホームのシステム固有のライブラリを使用する際に、Management Server の外部サービスが必要です。

- paging.cfg.template

Enterprise Manager ポケットベル・サーバーのトレースを可能にできます。このファイルは、ポケットベル・サーバーが Windows NT または Windows 2000 マシンにインストールされた場合にのみ、生成されます。ポケットベル・サーバーは、他のプラットフォームでは使用できません。



## \$ORACLE\_HOME/sysman/config/ ディレクトリ

次のような \$ORACLE\_HOME/sysman/config/ ディレクトリにある他のファイルは、変更できません。

- oemclient.properties

すべてのイベント・テストとジョブ・タスクの情報、およびコンテキスト内のアプリケーション起動の詳細が含まれます。

- ifiles/

Instance Management からの保存済 init.ora パラメータが含まれます。最初、このディレクトリは空です。Instance Management にアクセスして init.ora パラメータを保存すると、ファイルが移入されます。

- jlib/

Enterprise Manager コンポーネントが適切に機能するために必要な jar ファイルが含まれます。このディレクトリの内容は変更しないでください。

- log/

ログ・ファイルにリダイレクトされたトレース情報が含まれます。最初、このディレクトリは空です。ディレクトリには、oms.nohup ファイルが移入されます。oms.nohup ファイルには、Management Server の起動および停止時（およびなんらかの理由で Management Server がそれ自体を再起動した場合）に対応する情報が含まれています。重要なエラー・メッセージ（たとえば、セッション不足、SQL 例外など）もこのファイルにロギングされます。他のトレース情報は、Management Server でトレースおよびロギングが可能な場合、oms.log ファイルに入れられます。

トレースおよびロギングが可能になると、このディレクトリには追加のログ・ファイル（たとえば、oms.log）が移入されます。

- mesg/

Trace Data Viewer、Oracle Expert および SQL Analyze などの、Java で記述されていない Enterprise Manager アプリケーション固有のメッセージ・ファイルが含まれます。このディレクトリは、Windows ベースのプラットフォームでのみ作成されます。UNIX ベースのプラットフォームでは作成されません。このディレクトリの内容は変更しないでください。

- report/

Enterprise Manager コンソールおよび各種管理アプリケーションから生成された HTML 形式のレポートが含まれます。最初、このディレクトリは空です。Enterprise Manager からレポートが生成されると、HTML ファイルが移入されます。このディレクトリの内容は変更しないでください。

- reporting/

生成された HTML レポートの GIF ファイルが含まれます。このディレクトリの内容は変更しないでください。

- temp/

これは、一時ファイルを作成するための Management Server、および Java で記述されていない Enterprise Manager アプリケーション (Trace Data Viewer、Oracle Expert および SQL Analyze など) で使用されるスクラッチ・ディレクトリです。このディレクトリの内容は変更しないでください。

---

## ロギングおよびトレースのアクティブ化

Enterprise Manager フレームワークの各層（たとえば、コンソール、Management Server および Intelligent Agent）では、独自のトレースおよびロギング機能がサポートされています。トレースおよびロギングの両方では、コンポーネントで実行される処理の同じ詳細情報が提供されます。ただし、トレースが、データを書き込み、リアルタイムで表示するのに使用されるのに対し、ロギングは、トレース情報をファイルにリダイレクトし、後で表示するのに使用されます。この付録では、各種 Enterprise Manager コンポーネントのトレースおよびロギングの両方を可能にする方法について説明します。

## Intelligent Agent のトレース / ロギング

第3層の Intelligent Agent のトレースおよびロギングでは、Intelligent Agent と Management Server 間のすべての通信を追跡できます。Intelligent Agent のロギングおよびトレースのアクティブ化の詳細は、『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

## Management Server のトレース / ロギング

中間層の Management Server のトレースおよびロギングでは、Management Server と Intelligent Agent 間の通信、および Management Server とコンソールまたは他の Enterprise Manager アプリケーション（あるいはその両方）の間の通信すべてを追跡できます。

トレースまたはロギング、あるいはその両方を可能にするには、`$ORACLE_HOME/sysman/config/` ディレクトリの Management Server マシンにある `omsconfig.properties` ファイルを編集する必要があります。`omsconfig.properties` ファイルで指定されているプロパティはすべて、大文字と小文字が区別されます。つまり、パラメータを指定する際、ファイルまたはこのドキュメントに記述されているとおりに大文字と小文字を使用する必要があります。

## Management Server のトレース

Management Server のトレースを可能にするには、次のプロパティと適切な値を `omsconfig.properties` ファイルに追加します。

**TRACING.ENABLED = <true>|<false>**

トレース情報を生成するかどうかを指定します。ロギングかできない場合、トレース情報は、Management Server を起動したコンソールに書き込まれます。デフォルトは FALSE です。

**TRACING.LEVEL = <oem\_trace\_levels>**

トレース可能な場合に、収集のためのトレース情報の詳細を指定するための値を設定します。

<oem\_trace\_levels> の有効値は次のとおりです。

- 5 - user: 重要またはエラーのレベルのメッセージのみ表示します。
- 3 - admin: ユーザー・トレース・レベル・メッセージと警告メッセージを表示します。
- 2 - dev: admin トレース・レベルのすべてのメッセージ他に、情報メッセージとデバッグ・メッセージを表示します。

**VDB\_VERBOSE\_DEBUG.**

特定の JDBC ロギングを OMS.LOG ファイルに追加できます。

**VDG.JOB.OUTPUT = <true>|<false>**

また、発行済の Enterprise Manager ジョブの出力に関する詳細情報を収集する場合、omsconfig.properties ファイルの VDG.JOB.OUTPUT プロパティを指定できます。

VDG.JOB.OUTPUT では、OMS.LOG ファイルに発行済の Enterprise Manager ジョブの出力を含むかどうかを指定します。デフォルトでは、この情報はどのログ・ファイルにも含まれません。

## Management Server のロギング

ロギングが可能で、トレース出力がファイルに書き込まれる場合、Management Server では、\$ORACLE\_HOME/SYSMAN/LOG ディレクトリに OMS.LOG と呼ばれるファイルが作成されます。

Management Server では、トレース・メッセージはすべて Management Server のログ・ファイル (OMS.LOG.0、OMS.LOG.1、OMS.LOG.2 など) に格納されます。まず 1 つのログ・ファイルに、それがいっぱいになると次のファイルに書き込み、最後の 2 ファイルがリサイクルされます。

Management Server のログ・ファイルにはサイズ制限があります。デフォルトでは、Management Server の起動時に、25MB のログ・ファイルしか作成できません。最初のログ・ファイル名は OMS.LOG.0 です。そのファイルが 25MB の上限に達すると、別のログ・ファイルが作成されます。別のログ・ファイル名は OMS.LOG.1 です。そのファイルが 25MB 制限に達すると、OMS.LOG.0 ファイルが削除され、新しいログ・ファイル、OMS.LOG.2 が作成されます。最後の 2 つのログ・ファイルが保存されます。

このファイルは、Management Server が稼働している間は使用され続けます。すべてのメッセージは、そのファイルに書き込まれます。

---

---

**重要な注意：** Management Server が起動すると、OMS.LOG.\* という名前のそれまでのログ・ファイルは、すべて自動的に削除されます。

---

---

oms.nohup ファイルは、(Windows NT および UNIX の両方で) 自動的に作成されます。oms.nohup ファイルには、Management Server の起動と停止時、およびなんらかの理由で Management Server がそれ自体を再起動した場合に対応するエントリが含まれています。重要なエラー・メッセージ (たとえば、セッション不足、SQL 例外など) もこのファイルにロギングされます。他の詳細なトレースは、oms.log ファイルに入れます (トレースがオンの場合)。

---

---

**注意：** ログインおよびトレースを使用可能にすると、Backup Management と Data Management のログインおよびトレースが自動的に使用可能になります。

---

---

Management Server のログインを可能にするには、次のプロパティと適切な値を omsconfig.properties ファイルに追加します。

**LOGGING.ENABLED = <true>|<false>**

トレース情報をファイルに書き込むかどうかを指定します。情報は、TRACING.ENABLED フラグもアクティブな場合にのみ、ファイルに書きこみます。デフォルトは FALSE です。

**LOGGING.DIR = <directory\_spec>**

OMS.log ファイルが書き込まれるディレクトリ。デフォルト値は、\$ORACLE\_HOME/SYSMAN/LOG です。

---

---

**注意：** LOGGING.DIR を c:¥temp ディレクトリに設定するには、「¥¥」を使用して、LOGGING.DIR=c:¥¥temp と設定する必要があります。

このように指定しない場合は、c:¥temp の「¥t」がタブ文字と解釈され、Management Server を起動できなくなります。

---

---

**LOGGING.FILENAME = <filename>**

Management Server のログインに使用するファイル名。索引カウンタがこのファイルに追加されます。最大サイズに達するたびに、索引番号が 1 つずつ増えて、新しいファイルが作成されます。起動時、カウンタは常に 0（ゼロ）です。このカウンタの値は、ログ・ファイルが指定した最大サイズに達すると、1 つ増えます。デフォルトでは、OMS.LOG.0、OMS.LOG.1、OMS.LOG.2 と続きます。

**LOGGING.MAX\_SIZE = <integer>**

ログ・ファイルの合計最大サイズを制御します。LOGGING.MAX\_SIZE プロパティに指定する値の単位は、MB です。デフォルト値は 50 で、最大 25MB のログ・ファイルが 2 つになります。0（ゼロ）に設定した場合、ファイル制限がなくなり、OMS.LOG ファイルが 1 つだけ作成され、使用されます。特定のサイズを指定した場合、生成されるすべてのログ・ファイルの最後に、カウンタ値が付きます。

**LOGGING.MAX\_FILE\_CNT = <integer>**

特定の時間に、ログが対象とするファイルの最大数を定義します。すべてのファイル・サイズの合計は、LOGGING.MAXSIZE プロパティで設定した値以下になるようにします。

デフォルトは 2 となります。

LOGGING.MAX\_SIZE=0（ログ・サイズの制限がない）場合は、LOGGING.MAX\_FILE\_CNT は意味がなくなるため、無効になります。

---

**注意：** LOGGING.MAX\_SIZE および LOGGING.MAX\_FILE\_CNT により、Management Server ログ・ファイルに使用されるディスク領域の大きさが決まります。これらのパラメータを使用して、ログ・ファイルのサイズおよびディスク使用を指定できます。

---

**LOGGING.SAVE\_PREVIOUS\_LOG = <true>|<false>**

Management Server を再度起動した際に、前の OMS.LOG ファイルを、上書きされないようにタイムスタンプを付加したファイル名に名前変更するかどうかを指定します。このようなログ・ファイルは、名前が変更される際に、(yyyyMMddHHmmss の形式の) タイムスタンプが付加されます。デフォルトは FALSE です。

## Enterprise Manager クライアント・アプリケーションのトレース

Enterprise Manager コンソールおよびその管理アプリケーションのトレースを可能にするには、次のプロパティと適切な値を clientconfig.properties ファイルに追加します。

**TRACING.ENABLED = <true>|<false>**

トレース情報を生成するかどうかを指定します。

**TRACING.LEVEL = <oem\_trace\_levels>**

トレース可能な場合に、収集のためのトレース情報の詳細を指定するための値を設定します。

<oem\_trace\_levels> を 2 に設定します。

---

**注意：** アプリケーションをトレースして、その出力をファイルにリダイレクトする場合、アイコンまたはショートカットを使用してアプリケーションを起動することはできません。

---

すべての Windows プラットフォーム（Windows NT、Windows 2000 および Windows 98）の場合、DOS ウィンドウを開いて、次の環境変数を設定します。

```
C:¥>SET ORACLE_OEM_CLIENTTRACE=TRUE
```

UNIX の場合、次の環境変数を設定します。

```
$ export ORACLE_OEM_CLIENTTRACE=TRUE
```

OEMAPP スクリプトを使用してコマンドラインからクライアント・アプリケーションを起動し、ファイルの出力をリダイレクトします。

たとえば、次のように指定します。

```
oemapp console
```

追加の Java のデバッグを実行する必要がある場合、OEMAPP スクリプトを変更し、デバッグ・パラメータを追加できます。

たとえば、Windows では、

```
SET JRE=jre -nojit -mx32m -ms8m
```

を次のように変更します。

```
SET JRE=jre -nojit -mx32m -ms8m -verbose -verbosegc
```

## ブラウザベースの Enterprise Manager のトレース

ブラウザで Oracle Enterprise Manager の起動時に問題が発生した場合は、トレース情報を収集してから、オラクル社カスタマ・サポート・センターに問題を報告してください。

ブラウザのトレースを設定するには、次の手順を実行してください。

1. ブラウザのセッションを終了します。
2. Java プラグイン・コンソールを起動します。

Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」→「JInitiator Control Panel」をクリックします。ウィンドウが表示されます。

- a. 「Show Java Console」チェックボックスをチェックします。
- b. 「Java Run Time Parameters」ボックスで、行の終わりに次のものを追加します。  
`-DTRACING.ENABLED = TRUE -DTRACING.LEVEL = 2`
- c. 「適用」ボタンをクリックします。
- d. 「Oracle JInitiator Properties」パネルを閉じます。

3. ブラウザを再起動し、Oracle Enterprise Manager を再ロードします。

Java コンソール・ウィンドウが現れ、プラグインによってロードされた Java クラスと、発生する可能性のある例外が表示されます。例外が表示されない場合は、画面いっぱいの情報が 3 回か 4 回表示されるごとに画面を消去（「消去」ボタンをクリック）してください。

4. Java コンソール・ウィンドウに例外が表示された場合は、ファイルにカット・アンド・ペーストして、問題の説明と一緒にファイルをオラクル社カスタマ・サポート・センターにお送りください。



## ポケットベル・サーバーのトレース

Enterprise Manager ポケットベル・サーバーは、Management Server とは別にデバッグおよびトレースできます。ポケットベル・サーバーのトレースは、デフォルトでは使用不可になっています。トレースが可能な場合、サーバーによって、すべての電話回線処理や、成功または失敗についてのトレース情報がデフォルトでログ・ファイルに書き込まれます。ポケットベル送信のたびに情報が記録されるため、ログ・ファイルはポケットベルの送信回数に比例して大きくなります。ログ・ファイルを削除するには、ポケットベル・サーバーを停止してからファイルを削除してください。

Oracle Enterprise Manager ポケットベル・サーバーをインストールすると、`ORACLE_HOME/sysman/config` ディレクトリに、`paging.cfg.template` というテンプレート構成ファイルが用意されます。

1. `paging.cfg.template` ファイルを `paging.cfg` ファイルにコピーします。このファイルも `ORACLE_HOME/sysman/config` ディレクトリにあります。

このファイルの名前を変更せずにコピーして、情報を保持しておくことをお勧めします。このファイルをコピーしない場合、ポケットベルのトレースを可能にするコメントがすべて削除されます。また、Enterprise Manager が更新された場合は、すべての構成が失われ、元に戻すことはできません。

2. `paging.cfg.template` ファイルの指示に従って、トレース使用の要件に合わせて `paging.cfg` ファイルを変更し、保存します。

Enterprise Manager ポケットベル・サーバーのトレースを可能にするには、次のプロパティと適切な値を `paging.cfg` ファイルに追加します。

### TRACING.ENABLED

デバッグで使用するための値を設定します。ポケットベル・サービスは、すべての電話回線操作に対するトレース文と、成功または失敗を書き込むことにより、ポケットベル通信で発生した内容をトレースします。

有効値は `TRUE` または `FALSE` です。値を `TRUE` に設定した場合、`TRACEFILENAME` および `TRACING.LEVEL` の値を指定する必要があります。値を `FALSE` に設定した場合は、`TRACEFILENAME` および `TRACING.LEVEL` の値を指定する必要はありません。

### TRACING.LEVEL

トレース可能な場合に、収集のためのトレース情報の詳細を指定するための値を設定します。

- 5 - user: 重要なメッセージおよびエラー・メッセージを収集します。
- 3 - admin: 重要なメッセージ、エラー・メッセージおよび警告メッセージを収集します。
- 2 - dev: admin トレース・レベルのすべてのメッセージ、および情報メッセージとデバッグ・メッセージを収集します。

### TRACEFILENAME

トレース可能な場合に、トレースの出力結果を書き込む場所を設定します。

この値は PAGING\_LOG.TRC に設定することをお勧めします。デフォルトでは、このファイルは、ポケットベル・サーバーの ORACLE\_HOME/SYSMAN/LOG ディレクトリ内にあります。

別のディレクトリを指定する場合は、<Drive\_Letter>:\¥<directory\_path>\¥paging\_log.trc のように指定してください。たとえば、トレース・ファイルを C:\¥temp¥ に格納する場合は、値を C:\¥temp¥paging\_log.trc に設定します。

## SQL エンジンのトレース

SQL エンジンでは、Enterprise Manager ソフトウェアで発行された SQL 文の結果を受け入れ、実行し、送信します。

クライアント・アプリケーションの起動方法に応じて、SQL エンジンはクライアントか Management Server のいずれかで実行できます。

- Management Server に接続しているクライアント・アプリケーションでは、Management Server の SQL エンジンが使用されます。
- データベースに直接接続しているクライアント・アプリケーションでは、独自の SQL エンジンが使用されます。

エンジンは、クライアントおよび Management Server の両方でトレースできるので、これらのパラメータは、OMSCONFIG.PROPERTIES および ClientConfig.properties ファイル両方で指定できます。

使用可能な VDB (SQL エンジン) パラメータは、相互に排他的です。要求された最上位のトレースを使用する必要があります。

### VDB\_DEBUG

使用可能な場合、SQL エンジンでは、第 1 レベルの情報のスタック・トレースおよびメッセージが表示されます。ブール値。使用可能な値は、TRUE および FALSE です。デフォルトは FALSE です。

### VDB\_VERBOSE\_DEBUG

この場合、SQL エンジンでは、開始および終了する方法が表示され、DEVELOPER DEBUG 情報も表示されます。ブール値。使用可能な値は、TRUE および FALSE です。デフォルトは FALSE です。

### VDB\_SESSION\_DEBUG

データベース・セッション・プールの内容が表示される場合、これは有効です。セッションの作成と破損、およびセッション・プール・アクティビティのトレースにも使用されます。ブール値。使用可能な値は、TRUE および FALSE です。デフォルトは FALSE です。

#### **VDB\_VERBOSE\_SESSION\_DEBUG**

このパラメータでは、セッションがオープン、クローズ、セッション・プールにリリース、またはセッション・プールから取り出されたときの、スタック・トレースを含むセッション・アクティビティの詳細が表示されます。VDB\_VERBOSE\_DEBUG のように、冗長なバージョンのセッション・トレースです。ブール値。使用可能な値は、TRUE および FALSE です。デフォルトは FALSE です。

## **Management Pack アプリケーションのトレースおよびロギング**

Management Pack のトレースの詳細は、『Oracle Enterprise Manager Oracle Tuning Pack によるデータベース・チューニング』を参照してください。



---

# 一般的なリポジトリのガイドライン

## リポジトリのサイズ設定

この項では、Oracle Enterprise Manager のリポジトリに対して、記憶域要件とディスクの領域割当てを決定する際のガイドラインについて説明します。

領域の要件は、使用する Oracle Enterprise Manager ツールで行う処理、および実行する作業で生成されるデータ量によって異なります。また、リポジトリが作成されるデータベースのリリースの違いによっても、リポジトリのデータの量の増加は多少異なります。

通常のインストール・セッションから新しいリポジトリを作成する際に、リポジトリに対するデフォルトの構成を確定すると、OEM\_REPOSITORY という新しい表領域が生成されます。OEM\_REPOSITORY 表領域には、Oracle Enterprise Manager コンソール、および個別にライセンスを取得できるすべてのパック（インストールしたか、またはライセンスを取得したかどうかに関係なく）のリポジトリ・オブジェクトが含まれます。また、リポジトリが作成されるデータベースのリリースによって、リポジトリを最初に 6 ～ 26MB のハード・ディスク領域に割り当てることができます。

実際に Oracle Enterprise Manager 製品をどのように使用するかによって、リポジトリのサイズを拡張できます。リポジトリのデータ量がどのくらい増加するかを決定するには、次の表を参照してください。リポジトリ・サイズの増加に適合できるように、デフォルトの OEM\_REPOSITORY 表領域は、自動拡張に設定されています。たとえば、小規模な 1 つのデータベースに対して Capacity Planner を使用して、デフォルトの OEM\_REPOSITORY 表領域を 4MB の割当てで作成したとします。しかし、実際には（大規模な 3 つのデータベースなどの）標準的な基準で Capacity Planner を使用すると、リポジトリのサイズは、概算で 16MB に増加します。このような場合には、表領域は、増加量に合わせて自動的に拡張されます。

通常のインストール・セッションから新しいリポジトリを作成し、既存の表領域を使用する場合は、次の手順に従って、リポジトリで使用するディスク領域がどのくらい増加するかを決定します。

- 1. 「製品」列を参照して、使用している製品を検索します。
- 2. それぞれの製品で実行する操作を、「状況」列で識別します。
- 3. それぞれの操作に対して、ハード・ディスクの領域に「割当て」列の容量を追加します。これらの必要量の合計が、リポジトリの予想サイズとなります。

製品	状況	割当て
Oracle Enterprise Manager コンソール	<ul style="list-style-type: none"><li>■ コンソールのみを使用する。</li><li>■ ジョブ履歴にはほとんど保存しない。</li></ul>	4 ～ 9MB
Oracle Diagnostics Pack	<ul style="list-style-type: none"><li>■ 4MB 未満のトレース・データを収集する。</li><li>■ 小規模な 1 つのデータベースで数日 Capacity Planner を使用する。</li></ul>	35MB
	<ul style="list-style-type: none"><li>■ 4 ～ 20MB のトレース・データを収集する。</li><li>■ 中規模の 1 つのデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。</li></ul>	60MB
	<ul style="list-style-type: none"><li>■ 20 ～ 60MB のトレース・データを収集する。</li><li>■ 最大 3 つの大規模なデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。</li></ul>	120MB

製品	状況	割当て
Oracle Tuning Pack	次の範囲未満で保存 <ul style="list-style-type: none"><li>■ チューニングされた SQL 文： 50 個</li><li>■ 有効なチューニング・セッション： 5</li><li>■ ジョブ履歴の表領域ジョブ： 10 個</li></ul>	15MB 未満
	次の範囲で保存 <ul style="list-style-type: none"><li>■ チューニングされた SQL 文： 50 ～ 150 個</li><li>■ 有効なチューニング・セッション： 5 ～ 15</li><li>■ ジョブ履歴の表領域ジョブ： 10 ～ 30 個</li></ul>	15 ～ 45MB
	次の範囲を超えるものを保存 <ul style="list-style-type: none"><li>■ チューニングされた SQL 文： 150 個</li><li>■ 有効なチューニング・セッション： 15</li><li>■ ジョブ履歴の表領域ジョブ： 30 個</li></ul>	90MB 以上

製品	状況	割当て
Oracle Change Management Pack	■ 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン： 1 個 (2 つのバージョンで保存) 保存されている比較： 1 個 変更計画： 1 個 (スキーマを伝播)	20MB
	■ 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン： 2 個 (2 つのバージョンで保存) 保存されている比較： 2 個 変更計画： 5 個	40MB
	■ 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン： 5 個 (2 つのバージョンで保存) 保存されている比較： 5 個 (2 つのバージョン) 変更計画： 10 個	100MB
Oracle Management Pack for Oracle Applications	■ 小規模な 1 つのデータベースで数日 Capacity Planner を使用する。	4MB
	■ 中規模の 1 つのデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。	10MB
	■ 最大 3 つの大規模なデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。	20MB



製品	状況	割当て
Oracle Standard Management Pack <sup>1</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン： 1 個 (2 つのバージョンで保存) 保存されている比較： 1 個</li> </ul>	20MB
	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン： 2 個 (2 つのバージョンで保存) 保存されている比較： 2 個</li> </ul>	35MB
	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン： 5 個 (2 つのバージョンで保存) 保存されている比較： 5 個 (2 つのバージョン)</li> </ul>	80MB

<sup>1</sup> 個別にライセンスを取得できる他のパックは、Oracle9i Enterprise Edition で使用できますが、Oracle Standard Management Pack は、Oracle9i Standard Edition でのみ使用できます。

たとえば、次のような状況であるとします。

- コンソールを標準で使します。ただし、通常は、大量の出力はジョブ履歴に保存しません (約 7MB)。
- 約 45MB のトレース・データを収集します (約 45MB)。
- ごく少量のデータに対して Capacity Planner を使します (約 4MB)。
- チューニングされた SQL 文を約 100 個、有効なチューニング・セッションを 11、ジョブ履歴の表領域ジョブを 25 個保存します (約 32MB)。

この場合には、これらの領域割当ての合計は、88MB (7MB + 45MB + 4MB + 32MB) となります。したがって、リポジトリに対して約 88MB の割当てをする必要があります。

---

---

**重要：** ここで説明している内容は、Oracle Enterprise Manager の環境のデフォルト構成に基づいたガイドラインにすぎません。実際のリポジトリのサイズ設定要件は、設定されたカスタム構成によって、異なります。コンソールおよび各種のパックで、実際にどのアプリケーションを使用しているか、パラメータをどのように構成したか、などによって、リポジトリで必要とするディスク領域は異なります。たとえば、Oracle Diagnostics Pack のデフォルトのサンプリング間隔は 5 分です。このサンプリング間隔を短くする場合は、より多くのディスク領域を割り当てる必要があります。ジョブ履歴に保存するデータ量によっても、リポジトリに必要な領域の量が異なります。40 ～ 50MB の大量の出力をジョブ履歴に保存する場合は、さらに 40 ～ 50MB のディスク領域が必要になります。

---

---

---

## グローバリゼーション・サポート

Oracle Enterprise Manager リリース 9.0 は、次の 6 つの言語に翻訳されています。

- ドイツ語
- フランス語
- ポルトガル語（ブラジル）
- 中国語（簡体字）
- 日本語
- 韓国語

これらの翻訳された製品は、英語バージョンの製品にバンドルされます。英語以外の言語の Enterprise Manager およびそのアプリケーションを使用するには、製品のインストール時に適切な言語を選択する必要があります。

言語の選択は、カスタム・インストール時のみのオプションです。ただし、インストールで選択した言語に関係なく、英語バージョンは常に自動的にインストールされます。

英語以外の言語の Enterprise Manager コンポーネントのインストールの詳細は、ご使用のインストールレーション・ガイドを参照してください。

## 英語以外の言語のブラウザベースの Enterprise Manager へのアクセス

英語以外の言語のブラウザベースの Enterprise Manager を実行するには、カスタム・インストール時に適切な言語で Enterprise Manager Web サイトをインストールします。索引ページにアクセスするには、次のように入力します。

`http://<machine name>:3339/emwebsite_<lang>.html`

たとえば、ドイツ語バージョンの索引ページを見るには、次のように入力します。

`http://<webserver host name>:3339/emwebsite_de.html`

## コンソールの言語設定

NT の場合

Oracle Enterprise Manager コンソールを英語で表示する場合、地域パラメータを変更します。

Performance Manager または Capacity Planner の情報（データベース・インスタンス、競合など）を英語にする場合、NLS\_LANG パラメータを変更します。

---

## Windows 2000 での Enterprise Manager の 使用

この付録の項目は、次のとおりです。

- [Windows NT と Windows 2000 間の Enterprise Manager の使用における差異](#)
- [手順](#)

## Windows NT と Windows 2000 間の Enterprise Manager の使用における差異

機能	Windows NT	Windows 2000
サービス	「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「サービス」を選択し、「サービス」ダイアログ・ボックスにアクセス。	Windows 2000 では、「サービス」ディレクトリは、「コントロール パネル」ディレクトリよりさらに下に位置する。 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択。
ユーザー マネージャ	Windows NT では、Windows コンピュータ・セキュリティの管理およびユーザー・アカウントの作成が可能。 「スタート」→「プログラム」→「管理ツール」→「ユーザー マネージャ」を選択。	ユーザー・アカウントを作成するには、「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「管理ツール」→「Active Directory ユーザーとコンピュータ」を選択。

## 手順

この項では、Windows 2000 で次の作業を実行する方法について説明します。

- サービスの操作（開始、停止、スタートアップ・モードの変更など）
- 新規ユーザーの作成
- ユーザーへの権限（すなわち、「バッチ ジョブとしてログオン」）の割当て

## Windows 2000 のサービスの操作

Windows 2000 のサービスを操作するには、次のようにします。

1. 「スタート」メニュー→「設定」→「コントロール パネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
2. 操作するサービスを選択します。
3. 右クリックし、実行する操作（開始、停止など）を選択します。「スタートアップの種類」を変更するには、右クリックして「プロパティ」を選択し、必要に応じて「スタートアップの種類」を編集します。

## Windows 2000 の新規ユーザーの作成

Windows 2000 の新規ユーザーを作成するには、次のようにします。

1. 「スタート」メニュー→「設定」→「コントロール パネル」→「ユーザーとパスワード」を選択します。
2. 表示された「ユーザーとパスワード」画面で、新規ユーザーの追加ができます。

## Windows 2000 ユーザーへの権限の割当て

Windows 2000 ユーザーに権限を割り当てるには、次のようにします。

1. 「スタート」メニュー→「設定」→「コントロール パネル」→「管理ツール」→「ローカル セキュリティ ポリシー」を選択します。
2. 左側のツリーの「ローカル ポリシー」を選択します。
3. 左側のツリーの「ユーザー権利の割り当て」を選択します。
4. 右側で適切な権限を見つけて選択します。
5. 右クリックして「セキュリティ」を選択します。表示された「ローカル セキュリティ ポリシーの設定」画面で、指定の権限を持つ必要があるユーザーを追加できます。





---

# トラブルシューティング

この章では、考えられるトラブルシューティングの問題を説明します。

- [オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題の報告](#)
- [Enterprise Manager Configuration Assistant のトラブルシューティング](#)
- [omsconfig.properties ファイルに関する許可の変更](#)
- [Management Server のトラブルシューティング](#)
- [ポケットベル・サーバーのトラブルシューティング](#)
- [Web ブラウザのトラブルシューティング](#)
- [リポジトリ・ユーザーのパスワード変更](#)
- [パスワードの再設定](#)
- [日付書式の設定](#)

## オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題の報告

Oracle Enterprise Manager をご使用の際に問題が発生した場合は、多くの有効な情報を取得できます。

オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問合せになる前に、まず、マニュアルや『Oracle Enterprise Manager 日本語リリース・ノート』を調べてみてください。Oracle Enterprise Manager のマニュアルのリストは、「はじめに」の ix ページの「[ドキュメント・セット](#)」に出ています。

## マニュアル

特に利用価値の高いマニュアルは、次のとおりです。

- 『Oracle Enterprise Manager 日本語リリース・ノート』には、Oracle Enterprise Manager の最新情報に関する重要な説明とその他の最新ニュースに加えて、製品の実際の動作とドキュメントの説明との違いが記載されています。
- 『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』では、Oracle Intelligent Agent の管理方法が説明され、トラブルシューティング情報が提供されています。
- 『Oracle Enterprise Manager メッセージ・マニュアル』には、Oracle Enterprise Manager のエラーについて、考えられる原因と推奨される処置が記載されています。

## MetaLink

マニュアルとオンライン・ヘルプの他に、オラクル社では Oracle MetaLink を提供しています。これは、サポート・サービス契約を結んでいる Oracle カスタマが、24 時間年中無休で利用できる電子的なサポート・サービスです。カスタマは、<http://www.oracle.com/support> からオンラインで登録できます。

MetaLink には、次の機能が用意されています。

- My Headlines

プッシュ・テクノロジーを使用して、情報を事前にお届けします。My Headlines には、MetaLink の「My Headlines」セクションにアクセスしたときに、必要な情報のみを取得できるようにするなど、ユーザー・プロファイルの情報をカスタマイズする機能が用意されています。また、この情報を電子メールで受信できるように設定することも可能です。配布される情報は、News & Notes、Knowledge Base、Patches、Bugs、TAR Updates、Product Lifecycle および Forum Updates に分類され、製品とプラットフォームに応じて独自に設定することもできます。

- User Administration

企業に対して、MetaLink ユーザーのアクセスを、サポート ID (CSI) レベルで管理できるようにします。MetaLink のいくつかの領域に対して、サイトの特定のユーザーのみアクセスできるようにする場合は、この機能によって制御できます。たとえば、社内のヘルプ・デスクの担当者のみが、MetaLink に TAR (Technical Assistance Request) を作成できるように許可できます。

- User Profile

連絡先情報の更新、サポート ID の追加と削除、同じサポート ID に登録されている他のユーザーの参照、MetaLink のカスタマイズ、パスワードの変更、各自のライセンス情報の参照を行います。MetaLink インタフェースを表示する言語（英語、ドイツ語、フランス語）を選択することもできるようになりました。

- Technical Libraries

このライブラリは製品とプラットフォームごとに分類されています。これを使用して、ユーザーは、サポート・アナリストが「インストール作業や Oracle 製品の使用において有効である」と見なした情報にアクセスします。情報には、ドキュメント、ホワイト・ペーパー、問題と解決方法などがあります。

- Forums

技術アナリストに対して質問を送信すると、営業日の 2 日以内に回答を受信できます。すべての Oracle ユーザーは、ここでやりとりする情報やアイデアを共有できます。

- File Access

以前の Download に相当するもので、このセクションでは、パッチおよびパッチ・セットを MetaLink から直接ダウンロードできます。パッチ・セットで修正されたバグを特定するには、『Oracle Enterprise Manager 日本語リリース・ノート』を参照してください。

- Knowledge Base Search

オラクル社カスタマ・サポート・センターの内部リポジトリで、テキストの全文検索を行います。高度な検索もできます。

- Bug Search

問合せを行って、Oracle Bug Database で公開されているヘッダーと概要にアクセスできます。

- Product Lifecycle

製品の可用性、製品の警告、動作保証および非サポートのオンライン情報。

- Enter TARs Online

TAR をオンラインで発行、更新、確認およびクローズします（国によっては使用不可）。

- Skills-Based Routing  
電子メールで発行された TAR は、自動的にオラクル社カスタマ・サポート・センター内の適切なテクニカル・リソースと適合します（国によっては使用不可）。
- TAR Access and Reporting  
TAR レポートを生成して表示することにより、問題を追跡します。
- Context-Sensitive Help  
MetaLink の機能の説明、および使用方法を示します。
- Feedback  
MetaLink に関するフィードバックを入力します。

## オラクル社カスタマ・サポート・センター

マニュアルと MetaLink では問題が解決しない場合には、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡し、次の情報をお知らせください。

1. どのような問題か。
2. 問題が発生したときに何をしていたか。
  - 問題が発生した製品またはコンポーネント。
  - 実行していた操作。問題が再現可能か。問題を調べるために取った処置。
3. ご使用の環境。
  - ご使用のオペレーティング・システムとバージョン。
  - ご使用の Oracle Enterprise Manager のリリースとインストール場所。
  - ご使用の Intelligent Agent のリリースとインストール場所。
  - ご使用のデータベースのリリースとインストール場所。
  - Management Server のインストール場所。
  - スキーマ、データ、スクリプトまたはご使用の環境についての関連情報。可能な場合は、問題を再現できるようにログ・ファイルもお送りください。
4. 表示されたエラー・メッセージと番号。
5. （可能な場合は）トレースを実行し、トレース情報を提供してください。
6. （ログ・ファイルがある場合は）調査して、ログ情報を提供してください。

# Enterprise Manager Configuration Assistant の トラブルシューティング

## Enterprise Manager Configuration Assistant のエラー

この項では、Enterprise Manager Configuration Assistant のエラー・メッセージと、考えられるそれらの原因を説明し、エラー解決の推奨処置を提示します。

### 選択したデータベース・ユーザーに、必要な DBA 権限がない

選択したデータベースに DBA ユーザーとしてログインするとき、Configuration Assistant によって、ユーザーに必要な権限があるかどうかチェックされます。必要な DBA 権限がない場合は、「選択したデータベース・ユーザーに、必要な DBA 権限がありません。DBA 権限を持つユーザーとして、データベースにログインしてください。」というメッセージが表示されます。「OK」をクリックして、メッセージ・ボックスを消します。正しい接続情報を入力して、処理を続行します。接続情報を入力して、再試行します。

### リポジトリ・ログイン用のデータベースの選択に失敗した

無効なユーザー名、パスワードまたはサービスを入力すると、失敗を示すエラー・メッセージが表示されます。たとえば、次のようになります。「接続に失敗しました。ORA-01017: ユーザー名 / パスワードが無効です ; ログインは拒否されました。」というメッセージが表示されます。「OK」をクリックして、メッセージ・ボックスを消します。データを入力し、再度試みてください。

### ユーザーがすでに存在する

ユーザーがすでに存在しており、Enterprise Manager バージョン 9 の不完全なリポジトリが含まれています。リポジトリの作成、削除またはアップグレードの操作が進行中であるか、前の操作が失敗した可能性があります。現在の操作を続行すると、不完全なコンポーネントが置き換えられて、不足しているコンポーネントがリポジトリに作成されます。

次のいずれかを選択してください。

- 別のユーザーを選択
- 処理を続行して、選択したリポジトリを使用

リポジトリ操作がすでに実行されている場合は、続行できません。同じリポジトリで複数の操作を同時に実行すると、リポジトリが破損することがあります。

### ユーザー "<username>" には、最新の Enterprise Manager バージョン 9 のリポジトリがすでに含まれている

ユーザー "<username>" には、最新の Enterprise Manager バージョン 9 のリポジトリがすでに含まれています。現在のリポジトリを上書きするには、最初に「削除」オプションを使用します。

**ユーザーはすでに存在し、V1 リポジトリが含まれている**

Enterprise Manager Configuration Assistant で、選択したリポジトリ名がデータベースの既存のユーザーおよびスキーマの名前で存在し、その中に Oracle Enterprise Manager リリース 1.x のリポジトリが含まれていることが検出された場合は、「そのユーザーはすでに存在し、V1 リポジトリが含まれています。同じスキーマに 9i リポジトリと V1 リポジトリを一緒に置くことはできません。別のユーザー名を選択してください。」というメッセージが表示されます。

**ユーザーはこのデータベースにすでに存在する**

Enterprise Manager Configuration Assistant で、選択したリポジトリ名がデータベースでユーザーおよびスキーマの名前としてすでに存在し、その中に Oracle Enterprise Manager のリリース 2.x のリポジトリもリリース 1.x のリポジトリも含まれていないことが検出された場合は、「ユーザーはこのデータベースにすでに存在します。このユーザーのスキーマ内にリポジトリを作成しますか。」というメッセージが表示されます。

「いいえ」を選択すると、異なるユーザー名を選択できます。

「はい」を選択すると、「リポジトリ作成のサマリー」ページが表示されます。

**このマシンの Management Server により、現在サービス <service\_name> 内のユーザー <user\_name> が所有するリポジトリが管理されている**

リポジトリの作成中、Configuration Assistant で、管理対象リポジトリが omsconfig.properties ファイルですでに指定されていて、そのリポジトリと異なるリポジトリを作成している場合、「このマシンの Management Server により、現在サービス <service\_name> 内のユーザー <user\_name> が所有するリポジトリが管理されています。ここで、サービス <service\_name> 内のユーザー <user\_name> が所有するリポジトリを管理するように変更しますか。」というメッセージが表示されます。

「はい」を選択すると、構成が更新されます。構成ファイルへの変更を有効にするには、Management Server を停止して再起動してください。「いいえ」を選択すると、構成ファイルは更新されません。選択した内容が、「リポジトリの作成サマリー」ページおよび「Configuration Assistant の進行」ウィンドウのステップに反映されます。

**ユーザーのデフォルト表領域または一時表領域として SYSTEM が選択されました。**

Configuration Assistant では、Oracle Enterprise Manager リポジトリに対するユーザーを作成する際に、デフォルトの表領域と一時的に使用する表領域を指定するように要求されます。いずれかの表領域に SYSTEM を選択すると、Configuration Assistant には「ユーザーのデフォルト表領域または一時表領域として SYSTEM が選択されました。SYSTEM 表領域を、データ・ディクショナリ表と SYSTEM ロールバック・セグメント専用を使用することをお勧めします。よろしいですか。」というメッセージが表示されます。別の表領域を選択してください。

**リポジトリのデフォルト表領域に十分な空き領域がない**

Enterprise Manager Configuration Assistant で、リポジトリのデフォルト表領域に十分な空き領域がないことが検出された場合、「リポジトリのデフォルト表領域には十分な空き領域がありません。」というメッセージが表示されます。

考えられる解決方法は、F-7 ページの「リポジトリ・データベースのデフォルト表領域に十分な空き領域がない」を参照してください。

## リポジトリ・データベースのデフォルト表領域に十分な空き領域がない

Configuration Assistant は、リポジトリに対して選択されたデフォルトの表領域に、適切な属性および特性があるかどうか確認します。この表領域に十分な空き領域がない場合は、次のメッセージが表示されます。「リポジトリのデフォルト表領域には十分な空き領域がありません。」

OEM\_REPOSITORY 表領域があれば、それを使用してください。これは、Enterprise Manager のデフォルトの表領域です。

新しいユーザーでリポジトリを作成する場合、Configuration Assistant の「リポジトリ・ユーザー表領域の選択」ページでは、OEM\_REPOSITORY 表領域を作成するように推奨されます。Enterprise Configuration Assistant を使用して OEM\_REPOSITORY 表領域を作成すると、表領域には、必ず正しい属性および特性が定義されます。

ただし、必要に応じて別の表領域を作成したり、既存の表領域を使用することができます。既存の表領域を使用する場合は、そのサイズの拡張が必要になる場合があります。

---

---

**注意：** コンソールの Storage Management 機能を使用して、別の表領域を作成、または既存の表領域のサイズを拡張する場合は、Configuration Assistant を終了する必要はありません。

---

---

## OEM\_REPOSITORY 表領域が存在しない場合の作成

OEM\_REPOSITORY 表領域が作成されていない場合は、Enterprise Manager Configuration Assistant の「リポジトリ・ユーザー表領域の選択」ページの「新規の OEM\_REPOSITORY 表領域の作成（推奨）」オプションが有効になります。

OEM\_REPOSITORY 表領域を作成する場合は、このオプションを選択します。Enterprise Manager Configuration Assistant を使用して OEM\_REPOSITORY 表領域を作成すると、表領域には適切な属性および特性が定義されます。これを、ユーザーのデフォルト表領域として使用します。

## 別の表領域の作成

Configuration Assistant を使用して表領域を作成することをお勧めします。この方法を使用すると、サポートされているデータベース内に適切な属性で表領域が作成されるためです。デフォルトの表領域の属性は、データベースのバージョンによって異なります。

コンソールの **Storage Management** 機能を使用して新しい表領域を作成する場合は、次の項に記載されている手順に従ってください。

1. スタンドアロン・コンソールを起動します。

- Windows NT の場合

Windows の「スタート」メニューからスタンドアロン・コンソールを起動できます。

- UNIX の場合

コマンドラインから次のコマンドを使用して、スタンドアロン・コンソールを起動できます。

```
oemapp console
```

ログイン・ダイアログが表示されたら、「スタンドアロンで起動」を選択し、「OK」を押します。スタンドアロン・モードでのコンソールの使用の詳細は、[第2章「スタンドアロン」](#)を参照してください。

2. 「データベース」フォルダを展開します。
3. ナビゲータ・ツリーのデータベース・ノードをダブルクリックし、DBA 権限を持つユーザーとしてデータベースに接続します。
4. 「オブジェクト」メニューから「作成」を選択します。作成ウィンドウが表示されます。
5. 作成ウィンドウのデータベース・ノードを展開し、「表領域」を選択します。次に「作成」ボタンをクリックします。「作成 表領域」プロパティ・シートが表示されます。
6. 「作成 表領域」プロパティ・シートの「一般」ページで、次のようにします。
  - a. 新しい表領域の名前を入力します。
  - b. 永続的なデータベース・オブジェクトの保持に、表領域が使用されるように指定します。
7. 「データ・ファイル」セクションに、新しいデータ・ファイルのサイズを指定します。「ファイル名」および「ファイル・ディレクトリ」の列には、デフォルトの内容が自動的に設定されます。
8. データファイル名の隣にあるプラス記号を右クリックし、「編集」を選択します。「作成 データファイル」プロパティ・シートが表示されます。
9. 「作成 データファイル」プロパティ・シートの「記憶域」ページで、「満杯時に自動的にデータファイルを拡張 (AUTOEXTEND)」ボックスを選択して、データベースでこれ以上の領域が必要になった場合に、サイズが自動的に拡張されるようにします。



10. 「作成 データファイル」プロパティ・シートの「OK」ボタンをクリックします。
11. 「作成 表領域」プロパティ・シートの「記憶域」ページで、領域を管理する方法を選択します。ここで指定した方法は、後で変更できます。
12. 「作成 表領域」プロパティ・シートの「作成」ボタンをクリックします。

## 既存の表領域のサイズを拡張

Configuration Assistant を使用して表領域を作成することをお薦めします。この方法を使用すると、サポートされているデータベース内に適切な属性で表領域が作成されるためです。デフォルトの表領域の属性は、データベースのバージョンによって異なります。

コンソールの **Storage Management** 機能を使用して既存の表領域のサイズを拡張するには、この項で説明する手順に従ってください。

1. スタンドアロン・コンソールを起動します。
  - Windows NT の場合  
Windows の「スタート」メニューからスタンドアロン・コンソールを起動できます。
  - UNIX の場合  
コマンドラインから次のコマンドを使用して、スタンドアロン・コンソールを起動できます。

```
oemapp console
```

ログイン・ダイアログが表示されたら、「スタンドアロンで起動」を選択し、「OK」を押します。スタンドアロン・モードでのコンソールの使用の詳細は、[第2章「スタンドアロン」](#)を参照してください。
2. 「データベース」フォルダを展開します。
3. ナビゲータ・ツリーのデータベース・ノードをダブルクリックし、DBA 権限を持つユーザーとしてデータベースに接続します。
4. Storage Management のノードを展開します。
5. 「データファイル」フォルダから、拡張するデータファイルをダブルクリックします。「データファイル」プロパティ・シートの「一般」ページが表示され、データファイルのファイル・サイズを編集できます。
6. 「一般」ページの「適用」ボタンをクリックします。
7. 「記憶域」タブをクリックします。「データファイル」プロパティ・シートの「記憶域」ページが表示されます。
8. 「満杯時に自動的にデータファイルを拡張 (AUTOEXTEND)」ボックスを選択し、「適用」ボタンをクリックします。

## リポジトリ操作には不十分なデータベース・パラメータ

Oracle Management Server は、クライアントおよび管理対象ノードのかわりに作業を行っている場合には、複数のリポジトリ・データベース・セッションをオープンできません。

通常、1 つの Management Server で必要なセッション数は 3 ～ 5 個で、Management Server の負荷によって異なります。次のような状況では、通常以上のリポジトリ・データベースのセッションが必要になります。

- 多数のコンソールがジョブの発行またはイベントの登録を行っている場合
- 複数の Management Server が同じリポジトリを使用している場合
- 多数の Intelligent Agent が Management Server に通知を送信している場合

Enterprise Manager のリポジトリで使用されているデータベースに対して他のアプリケーションもアクセスすると、データベースのセッション負荷が高くなります。

Oracle Enterprise Manager に対するプロセスの設定が低すぎる場合は、Oracle\_OEM\_Home/sysman/log ディレクトリの oms.log ファイルに、次のようなエラー・メッセージが示されます。

```
can't open a session
```

負荷が高くなった場合、またはリポジトリが定義されているデータベースに複数のアプリケーションがアクセスしている場合は、負荷に応じて、データベースの init.ora のプロセス・パラメータの値を増やすことが可能です。

Instance Management 機能を使用してデータベースのパラメータを変更するには、この項で説明する手順に従ってください。

### 1. スタンドアロン・コンソールを起動します。

- Windows NT の場合

Windows の「スタート」メニューからスタンドアロン・コンソールを起動できます。

- UNIX の場合

コマンドラインから次のコマンドを使用して、スタンドアロン・コンソールを起動できます。

```
oemapp console
```

ログイン・ダイアログが表示されたら、「スタンドアロンで起動」を選択し、「OK」を押します。スタンドアロン・モードでのコンソールの使用の詳細は、[第 2 章「スタンドアロン」](#)を参照してください。

### 2. 「データベース」フォルダを展開します。

### 3. ナビゲータ・ツリーのデータベース・ノードをダブルクリックし、DBA 権限を持つユーザーとしてデータベースに接続します。

4. Instance Management のノードを展開します。
5. 「構成」ノードを選択します。
6. 「構成」プロパティ・シートの「一般」ページで、「すべての初期化パラメータ」ボタンをクリックします。
7. パラメータの値を変更します。
8. 「すべての初期化パラメータ」ページで、「別名保存」ボタンをクリックします。「初期化パラメータを保存」ダイアログ・ボックスが表示されます。
9. 完全なディレクトリ・パスとファイル名を入力するか、「参照」ボタンを使用してローカルのオペレーティング・システムを検索してファイルを検出し、ファイル名を入力します。
10. 「OK」を押してファイルを保存します。

## omsconfig.properties ファイルに関する許可の変更

リポジトリの作成時に、リポジトリ接続情報を omsconfig.properties ファイルに保存するように選択した場合に、このファイルに関する許可を変更して、ファイルを参照できるユーザーを制限することがあります。

ファイルに関する許可を適切に変更すると、他のユーザーはファイルを参照および変更できなくなります。

---

---

**注意：** omsconfig.properties ファイルに保存されているリポジトリ接続情報では、パスワードはプレーン・テキストではありません。パスワードが存在する場合は、暗号化されてファイルに保存されています。

---

---

### UNIX の場合

ファイルの許可を変更するには、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
$ chmod 600 omsconfig.properties
```

このコマンドによって、ファイルの所有者のみが読み込みおよび書き込みできるようになります。

### Windows NT の場合

ファイルの許可を変更するには、次の手順を実行します。

1. 「スタート」メニュー→「プログラム」で、「Windows NT エクスプローラ」を選択します。
2. Oracle\_Home¥sysman¥config ディレクトリで、omsconfig.properties ファイルを選択します。

3. 選択したファイルでマウスを右クリックし、ポップアップ・メニューの「プロパティ」を選択します。
  4. 「プロパティ」ダイアログ・ボックスの「セキュリティ」タブを選択します。注意： この操作は、NTFS ファイル・システムにのみ適用されます。
  5. 「セキュリティ」ページの「アクセス権」ボタンを押して、「ファイルのアクセス権」ダイアログ・ボックスを表示します。デフォルトでは、「Everyone」に「フル コントロール (ALL)」が設定されています。「アクセス権の種類」は「フル コントロール」です。
  6. 「削除」ボタンをクリックして、このエントリを削除します。
  7. 「追加」ボタンをクリックして、「ユーザーとグループの追加」ウィンドウを表示します。
  8. 「ユーザーの表示」ボタンをクリックして、すべてのユーザーを表示します。
  9. Management Server を通常に起動し、Enterprise Manager Configuration Assistant を使用するユーザーを選択し、「アクセス権の種類」フィールドで、ドロップダウン・リストから「フル コントロール」を選択します。
  10. 「OK」ボタンをクリックして、「ユーザーとグループの追加」ダイアログ・ボックスを終了します。
  11. 「OK」ボタンをクリックして、「ファイルのアクセス権」ダイアログ・ボックスを終了します。
  12. 「OK」ボタンをクリックして、「プロパティ」ダイアログ・ボックスを終了します。
- 複数のユーザー名にアクセス権限を付与できます。

## Management Server のトラブルシューティング

この項の項目は、次のとおりです。

- Management Server がデフォルト以外の Oracle ホームから正しく実行できない場合
- Management Server が起動されない場合
- Management Server 起動時のエラー・メッセージ
- クライアント・アクセス用の Management Server の変更

### Management Server がデフォルト以外の Oracle ホームから正しく実行できない場合

UNIX では、ORACLE\_HOME 環境変数が、Management Server が稼働している Oracle ホームに設定されていない場合は、Management Server が正しく起動されません。Management Server では、実際の Oracle ホームではなく、デフォルトの Oracle ホームで、クラス・ファイルが検索されます。

#### csh

環境変数は次のように設定します。

```
setenv ORACLE_HOME '/usr/local/oracle'
```

#### ksh/sh

環境変数は次のように設定します。

```
ORACLE_HOME = '/usr/local/oracle'  
export ORACLE_HOME
```

UNIX システムの場合、Oracle 環境は、coraenv (CSH の場合) または oraenv (その他のシェルの場合) をコールして設定することもできます。このシェルのスクリプトにより、任意の識別子の Oracle 環境を設定します。この識別子は特定のデータベースでも、Management Server ソフトウェアが格納されている ORACLE\_HOME を指すものでもかまいません。これらのスクリプトは、特定のマシンやサーバー・ベースの設定を含むようにカスタマイズできます。

coraenv および oraenv スクリプトの詳細は、特定のオペレーティング・システムの Oracle 管理ドキュメントを参照してください。

## Management Server が起動されない場合

Management Server が起動されない場合のトラブルシューティングの詳細は、次のリソースを参照してください。

- oms.log ファイル
- oms.nohup ファイル
- Windows NT のイベント・ログ (Windows NT の場合)
- oemctl バッチ・ファイル

### oms.log ファイル

\$ORACLE\_HOME/sysman/log ディレクトリには、ロギングが可能な場合、ディスクにリダイレクトされたトレースの出力が入っています。このディレクトリには、oms.log ファイルと oms.nohup ファイルが含まれています。

Management Server では、すべてのトレース情報が oms.log ファイルに配置されます。oms.log ファイルには、Management Server の起動時および実行時に生成されるメッセージが含まれています。

Management Server では、トレース・メッセージはすべて Management Server のログ・ファイル (oms.log.0、oms.log.1、oms.log.2 など) に格納されます。まず 1 つのログ・ファイルに、それがいっぱいになると次のファイルに書き込み、最後の 2 ファイルがリサイクルされます。

Management Server のログ・ファイルにはサイズ制限があります。デフォルトでは、Management Server の起動時に、25MB のログ・ファイルしか作成できません。最初のログ・ファイル名は oms.log.0 です。そのファイルが 25MB の上限に達すると、別のログ・ファイルが作成されます。別のログ・ファイル名は oms.log.1 です。そのファイルが 25MB 制限に達すると、oms.log.0 ファイルが削除され、新しいログ・ファイル、oms.log.2 が作成されます。最後の 2 つのログ・ファイルが保存されます。

---

---

**重要な注意：** Management Server が起動すると、oms.log.\* という名前のそれまでのログ・ファイルは、すべて自動的に削除されます。

---

---

### oms.nohup ファイル

\$ORACLE\_HOME/sysman/log ディレクトリ内の oms.nohup ファイルには、Management Server の起動前に表示された Management Server エラー・メッセージと、実行中の重要なメッセージが入っています。

## Windows NT のイベント・ログ

Windows NT のイベント・ログにアクセスして、Management Server で記録されたイベントを表示するには、次のようにします。

1. 「スタート」メニュー→「プログラム」→「管理ツール（共通）」を選択し、「イベントビューア」項目を選択するか、または `eventvwr.exe` を検索します。
2. 「ログ」メニューの「アプリケーション」を選択します。
3. ログの画面が表示されます。Oracle<Oracle\_Home\_Name>ManagementServer サービスで記録されたイベントの中で、赤い停止記号が示されているものをダブルクリックします。これらのイベントは、Management Server によって報告されたエラーです。

Management Server によりイベント・ビューアに記録されるイベントとイベント番号は、次のとおりです。

イベント番号	メッセージ	内容
101	(<NT OMS サービス名 >) が見つかりません。次の挿入文字列を含みます: <NT OMS サービス名 >	サービス起動の問題。詳細は、ログ・ファイルおよびトレース・ファイルを参照。
105	サービスが開始されました。	通知メッセージ。
108	サービスが停止されました。	通知メッセージ。
110	サービスが本番実行モードになります。	通知メッセージ。
112	サービスが異常終了しました。	詳細は、oms.log ファイルを参照。
113	致命的なエラー プロセスは異常終了しました	詳細は、ログ・ファイルを参照。

エラーがイベント・ビューアに報告されるのは、Management Server が自発的に停止した場合のみです。

## oemctl バッチ・ファイル

oemctl スクリプト内の JRE 起動コマンドを変更すると、デバッグの詳細情報を入手できます。

### ■ Windows の場合

```
SET JRE=jre -nojit -mx32m
```

を次のように変更します。

```
SET JRE=jre -nojit -mx32m -verbose
```

### ■ UNIX の場合

```
JRE="jre -native -nojit -mx32m "
```

を次のように変更します。

```
JRE="jre -native -nojit -mx32m -verbose "
```

この手順を実行すると、環境またはインストールの問題が原因で発生したクラス・ロード問題を特定できます。バッチ・ファイルからデータを収集した場合は、オラクル社カスタマ・サポート・センターにその情報をお送りください。

---

---

**注意：** Management Server の起動時に問題が発生した場合は、まず、コンソールのトレースをオンにしてください。それでも原因を特定できない場合は、他のトラブルシューティング手順を実行してから、oemctl バッチ・ファイル手順を使用してください。

---

---

## Management Server 起動時のエラー・メッセージ

Management Server の起動時に次のようなエラーが表示される場合、後述の解決法を参照してください。

```
Could not start the Oracle<ORACLE_HOME_NAME>ManagementServer service on <HOST NAME>.
Error 0203: The system could not find the environment option that was entered.
```

Management Server はインストールされていますが、構成が完了していません。Enterprise Manager Configuration Assistant を実行して、新規のリポジトリを作成するか、または既存のリポジトリを編集する必要があります。

Windows NT の場合： Enterprise Manager Configuration Assistant は実行されていますが、ユーザーがリポジトリ接続のユーザー名およびパスワードをファイルに保存しないように選択しました（セキュア Management Server モード）。

「Oracle<ORACLE\_HOME\_NAME>ManagementServer」サービスを選択して「コントロールパネル」の「サービス」内の「スタートアップパラメータ」フィールドにユーザー名とパスワードを入力するか、またはダイアログで要求されたときにリポジトリ接続情報を入力してください。



## クライアント・アクセス用の Management Server の変更

複数 Management Server 環境で 1 つの Management Server に障害が発生した場合、影響を受けるのはそのサーバーに接続しているクライアントのみです。各 Management Server は、同じリポジトリに接続されている他の Management Server とは無関係です。

Management Server ノードを、まだ Management Server が稼働している別のノードに変更するには、次の手順に従ってください。

1. Oracle Enterprise Manager ログインで、Management Server のプルダウン・リストから、アクセスするリポジトリで構成されている Management Server が定義されているノードを選択します。  
プルダウン・リストに、Management Server が稼働しているノード名が表示されない場合は、次の処理を行います。
  - a. 「Management Server」ボタンをクリックします。「Management Server」ダイアログ・ボックスが表示されます。
  - b. アクセスするリポジトリで構成されている Oracle Management Server が稼働しているノード名を入力し、「OK」をクリックします。
  - c. プルダウン・リストから、Oracle Management Server が稼働しているノードを選択します。
2. Web ブラウザ経由で Oracle Enterprise Manager が稼働しているそれぞれのマシンで、emwebsite.html のページに戻ってマシン名を変更し、Management Server が稼働しているノードを表すようにします。Oracle Enterprise Manager ログイン画面で、Management Server のマシン名を入力することはできません。

## マルチ NIC マシンでの Management Server の実行

マルチ NIC マシンで稼働する際の Management Server のデフォルト動作は、すべてのネットワーク・カードのリスニングです。Management Server で特定のネットワーク・カードのみをリスニングする場合、次の手順を実行する必要があります。

1. 次のプロパティを \$ORACLE\_HOME/sysman/config/omsconfig.properties に追加します。  
`MULTI_NIC.ENABLED=false`
2. Management Server がリスニングする必要があるネットワーク・カードの名前を持つように、\$ORACLE\_HOME/sysman/config/omsconfig.properties の BootHost プロパティを変更します。

BootHost=localhost を BootHost=<network card host name> に変更します。

たとえば、マルチ NIC マシンに 2 つのネットワーク・カードがあり、host1 および host2 と名前が付けられている場合、BootHost=host を設定すると、Management Server では host1 をリスニングします。

3. Management Server を再起動します。

## ポケットベル・サーバーのトラブルシューティング

ポケットベルの通知が失敗すると、ポケットベル・サーバーでは、あと 3 回ポケットベルの送信を試行します。再試行を行う時間の間隔は、変更できます。デフォルトでは、1 分の間隔で再試行されます。このデフォルト設定を変更するには、Management Server の `ORACLE_HOME/sysman/config` ディレクトリの `OMSCONFIG.PROPERTIES` ファイルを編集します。次のプロパティ

```
OEM.PAGING.RETRYINTERVAL=<integer>
```

を `OMSCONFIG.PROPERTIES` ファイルに追加します。<integer> には、再試行の間隔を分単位で指定します。

## Web ブラウザのトラブルシューティング

### コンソールの停止

Web ブラウザを起動してコンソールにログインしても、コンソールが稼働しない場合は、JInitiator コンソールに次のメッセージが表示されます。

```
@org.omg.CORBA.INITIALIZE[completed=MAYBE, reason=java.net.BindException:  
Cannot assign requested address]
```

次の手順を実行します。

1. JInitiator で、プロキシのブラウザ設定を使用していることを確認します。
  - a. Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」→「JInitiator Control Panel」をクリックします。ウィンドウが表示されます。
  - b. 「Proxies」タブを選択します。
  - c. 内容を確認します。
2. ブラウザに指定した Web サーバー・アドレスに、`@.us.oracle.com` などのドメイン名を追加します。
3. ブラウザの設定を編集し、そのドメインを「no proxy settings for」に追加するか、またはブラウザの設定を編集して、「Direct Connection to Internet」を選択します。

## コンソールで Web ブラウザが起動しない場合

`user.browser` が `clientconfig properties` ファイルで適切に定義されていない場合、Netscape ブラウザは、Enterprise Manager コンソール内から起動されません。かわりに、デフォルトの Enterprise Manager ブラウザ (IceBrowser) が起動されます。

レポートはコンソールからは表示できません。Netscape ではスクリプトを使用しており、実際のプログラムではないためです。

UNIX で Netscape の起動方法を認識するには、次の作業を実行する必要があります。

`ClientConfig.properties` で次のプロパティを設定します。

```
user.browser=/usr/local/packages/netscape/netscape
```

`user.browser` をスクリプトではなく、ブラウザの実際の名前に設定する必要があります。

`/usr/local/bin/netscape` はスクリプトです。実行可能ファイルではありません。

`user.browser` がシェル・スクリプトではなく、実行可能ファイルを示すようにする必要があります。

## リポジトリ・ユーザーのパスワード変更

リポジトリのパスワードを ALTER USER を使用して変更でき、その後、Configuration Assistant で構成パラメータを編集できます。

1. データベース・ユーザーに対して ALTER USER コマンドを一度実行します。

```
ALTER USER <repository username>  
IDENTIFIED BY <new password>;
```

2. Enterprise Configuration Assistant を実行し、リポジトリを使用している Management Server が稼働している各ホストで一度 Management Server 構成を編集します。3-23 ページの「[既存リポジトリを使用するためのローカル Management Server の構成](#)」を参照してください。

## パスワードの再設定

自分の SYSMAN パスワードを忘れたために、oem\_temp に再設定する場合は、次の指示に従います。

reset\_sysman() プロシージャを使用する前に、まず (SQL\*Plus を使用して) Management Server リポジトリに接続する必要があります。

1. コマンドラインに次のように入力して、SQL\*Plus を起動します。

```
sqlplus
```

2. 接続情報を要求されたら、次のように入力します。

```
<emrepository> / <emrepository-pwd> @ <em-repository>
```

すると、データベースに接続します。

たとえば、次のようになります。

```
mynode/mypassword@mynode.world
```

これは、デフォルトのリポジトリ名がホスト名であるためです。

3. 次のように入力します。

```
execute smp_maintenance.reset_sysman();
```

## 日付書式の設定

Oracle Enterprise Manager コンソールで日付要素を表示する順序を設定するには、次の環境変数を設定する必要があります。

- 年月日の場合、NLS\_DATE\_FORMAT  
mm-dd-yyyy
- 日時の場合、NLS\_TIMESTAMP\_FORMAT  
mm-dd-yyyy hh:mi pm

---

**注意：** 設定できるのは要素の表示順序のみであり、表示内容は設定できません。

---

### Windows プラットフォーム

環境変数は次のように設定します。

```
set NLS_DATE_FORMAT = mm-dd-yyyy
set NLS_TIMESTAMP_FORMAT = mm-dd-yyyy hh:mi pm
```

**UNIX**

環境変数は次のように設定します。

```
setenv NLS_DATE_FORMAT mm-dd-yyyy  
setenv NLS_TIMESTAMP_FORMAT mm-dd-yyyy hh:mi pm
```



# キーボード・ナビゲーション

Oracle Enterprise Manager では、標準のキーボード・ナビゲーションをサポートしています。標準のキーボード・ナビゲーションには、[Tab] キー、ニーモニック ([Alt] キーとアンダーライン付きの文字)、およびショートカット・キー（ウィンドウを閉じる際の [Alt]+[F4] など）の使用が含まれます。

次の表には、一般的に知られていない、標準的ではないキーボード操作を記載しています。

キーボード操作	結果
[F10]、[Space]	ウィンドウまたはダイアログのシステム・メニューを表示
選択したツリー項目や表項目にフォーカスを当てた状態で [Shift]+[F10]	選択した項目のポップアップ・メニューを表示
表内の編集フィールドにフォーカスを当てた状態で新規の値を入力し、[Enter]	新規の値が確定され、フォーカスが表の次の行に移動
表内のドロップダウン・リストにフォーカスを当て、[Space]	ドロップダウン・リストがオープンしている状態とクローズしている状態の切替え

ピクチャ・ボタンのショートカット・キーは、ボタンが表示されるダイアログやウィンドウのヘルプに記載されています。





---

---

# 索引

## A

---

Agent ゲートウェイのトレース, B-7  
Apache Web サーバー, 5-8

## C

---

CATTBS 表領域, 3-3

## E

---

emwebsite.html, 5-5  
Enterprise Manager Configuration Assistant  
「Configuration Assistant の進行」ウィンドウ, 3-22  
Oracle Management Server の構成, 3-7, 3-24  
SID の変更, 3-13  
アップグレードのためのリポジトリの選択, 3-32  
エラー, F-5  
管理リージョンの選択, 3-26  
既存のリポジトリを管理するように Management  
Server を設定, 3-23  
起動, 3-2  
構成操作, 3-5, 3-24, 3-31  
構成パラメータ・サマリー, 3-28  
構成パラメータの編集, 3-25  
新規リポジトリ作成オプション, 3-8  
データベースの場所の選択, 3-11  
トラブルシューティング, F-5  
別のリポジトリを使用するように Management  
Server 構成を変更, 3-23  
編集または作成ダイアログ, 3-6  
「ようこそ」ページ, 3-4  
リポジトリ更新の「Configuration Assistant の進  
行」, 3-33  
リポジトリ更新のサマリー, 3-32

リポジトリ作成のサマリー, 3-21  
リポジトリにログインするために Management  
Server で使用するパスワードを変更, 3-23  
リポジトリのアップグレード, 3-31  
リポジトリの削除, 3-33  
リポジトリのデータベースの選択, 3-14, 3-31  
リポジトリへのログイン情報, 3-16, 3-32  
リポジトリ・ユーザー表領域の選択, 3-18  
Enterprise Manager のレポート作成システム, 4-18

## F

---

FLEXTD, 4-13

## G

---

Global System for Mobile Communications, 4-13

## H

---

host (マシン名), 3-15

## I

---

Internet Information Server (IIS), 5-10

## M

---

Management Server, 1-5  
既存リポジトリの構成, 3-23  
起動, 3-36  
クライアント・アクセス用の変更, F-17  
新規リポジトリの構成, 3-3  
ステータスのチェック, 3-38  
接続のダイアルアップ回線, 4-20

停止, 3-40  
トラブルシューティング, F-13  
トレース, B-3  
別のリポジトリを使用するように変更, 3-23  
リポジトリにログインするために使用するパスワードを変更, 3-23  
ログ・ファイル  
    ディスク領域の制御, B-5

「Management Server」ダイアログ・ボックス, 4-5

Management Server と接続するコンソール

    管理者アカウントの作成, 4-8  
    起動, 4-4  
    ジョブ・システムの有効化, 4-10  
    選択理由, 4-2  
    電子メール・サーバーの構成, 4-17  
    ネットワークのノードおよびマシンの検出, 4-6  
    ポケットベル・サーバーの構成および起動, 4-13

MetaLink の機能, F-2

## O

---

OEM\_REPOSITORY 表領域, 3-18, 3-20, F-7  
oemapp console oem.loginmode=oms コマンド, 4-4  
oemapp console oem.loginmode=standalone コマンド, 2-5  
oemctl ping oms コマンド, 3-38  
oemctl start oms コマンド, 3-38  
oemctl status oms コマンド, 3-38  
oemctl stop oms コマンド, 3-40  
oemctl バッチ・ファイル, F-16  
omsconfig.properties ファイル, 3-28  
oms.log ファイル, F-14  
oms.nohup ファイル, F-14  
Oracle Change Management Pack, 1-4  
Oracle Diagnostics Pack, 1-3, 5-2  
Oracle Enterprise Manager  
    Management Server, 3-36, 3-38, 3-40  
    アーキテクチャ, 1-2  
        第 1 層の中央コンソール, 1-3  
        第 2 層の集中化した、スケーラブルで信頼性の  
            ある Oracle Management Server, 1-5  
        第 3 層の管理対象ターゲットおよび自律型  
            Intelligent Agent, 1-5  
    システムおよびハードウェアの要件, 1-11  
Oracle Enterprise Manager 製品のアップグレード, 調整, 3-30  
Oracle Management Pack for Oracle Applications, 1-4

Oracle Standard Management Pack, 1-4

Oracle Tuning Pack, 1-3, 5-2

## P

---

paging.cfg, B-7  
paging.cfg.template, B-7

## S

---

SID (データベース・システム ID), 3-15  
SQL エンジンとのトレース, B-8  
SYSMAN パスワード, 再設定, F-20  
SYSMAN パスワードの再設定, F-20

## T

---

Telocator Alphanumeric Protocol, 4-13

## W

---

Web ブラウザ  
    サポート, 5-3  
    トラブルシューティング, F-18  
    トレース, B-6  
Web ブラウザからのコンソール, 5-2  
Windows 2000 のサービス, E-2  
Windows NT のイベント・ログ, F-14  
Windows ユーザー・アカウント  
    権限の割当て, 4-11

## あ

---

アクセス可能性  
    キーボード操作, 一般的に知られていない、または  
        標準的ではない, G-1

## お

---

オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題の  
    報告, F-2

## か

---

カスタムのリポジトリ作成オプション, 3-10  
管理アプリケーション, 統合, 1-3, 5-2  
管理者  
    スーパー, 4-8  
    通常, 4-8  
管理リージョン, 3-26

## き

---

キーボード・ナビゲーション, G-1  
記憶域要件とディスクの領域割当てを決定するための  
    ガイドライン, C-1  
起動  
    Enterprise Manager Configuration Assistant, 3-2  
    Management Server, 3-36  
    Management Server と接続するコンソール, 4-4  
    Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager,  
        5-2  
    Web ブラウザからのコンソール, 5-2

## け

---

検出ウィザード, 4-6

## こ

---

構成  
    Enterprise Manager を実行する Web ブラウザ, 5-5  
    Web サーバーとディレクトリ・マッピング (oem\_  
        webstage)  
        Apache Web サーバー, 5-8  
        Internet Information Server (IIS), 5-10  
    ダイヤルアップ回線用コンソール, 4-20  
    ローカル Management Server  
        既存リポジトリ, 3-23  
        新規リポジトリ, 3-3  
コマンド構文, xii  
コンソール, 1-3  
    言語設定, D-2  
コンソールの言語設定, D-2

## さ

---

作成  
    OEM\_REPOSITORY 表領域, 3-20, F-7

エンタープライズ・リポジトリ, 3-3  
新規 Windows ユーザー・アカウント, 4-11  
スタンドアロン・リポジトリ, 2-10  
スタンドアロン・リポジトリのデータベース・ユー  
    ザー, 2-13  
スタンドアロン・リポジトリの表領域, 2-10  
「バッチ ジョブとしてログオン」 権限を持つユー  
    ザー, 4-11

## し

---

ジョブ・システム, 有効化, 4-10

## す

---

スーパー管理者, 4-8  
スタンドアロン・モードのコンソール  
    起動, 2-4  
    選択理由, 2-2  
    ツリーへのデータベースの追加, 2-6  
    リポジトリ, 2-8  
ステータスのチェック  
    Management Server, 3-38

## せ

---

設定  
    ORACLE\_HOME 環境変数, 3-38, F-13  
    Windows ドメイン・ユーザー, 4-12

## た

---

ダイヤルアップ回線, 構成, 4-20

## つ

---

通常の管理者, 4-8  
通常のリポジトリ作成オプション, 3-8

## て

---

停止  
    Management Server, 3-40  
    Oracle HTTP Server, 4-18, 5-3  
データベース・リスナー・ポート・アドレス, 3-15  
電子メール・サーバー, 構成, 4-17

## と

---

- ドキュメント, 構成ガイドと関連, x
- トラブルシューティング
  - Enterprise Manager Configuration Assistant, F-5
  - Management Server, F-13
    - ping 間隔の設定, 6-2
    - Windows の「スタート」メニューから起動されない場合, F-14
    - エラー・メッセージ, F-16
    - クライアント・アクセス用の変更, F-17
    - デフォルト以外の Oracle ホームから正しく実行できない場合, F-13
  - MetaLink の使用, F-2
  - omsconfig.properties ファイルに関する許可の変更, F-11
  - SYSMAN パスワードの再設定, F-20
  - Web ブラウザ, F-18
  - オラクル社カスタマ・サポート・センター, 情報提供, F-4
  - オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題の報告, F-2
  - コンソールで Web ブラウザが起動しない場合, F-19
  - コンソールの停止, F-18
  - ポケットベル・サーバー, F-18
  - リポジトリ操作のデータベース・パラメータ, F-10
  - リポジトリ・データベースのデフォルト表領域, F-7
- トレース
  - Agent ゲートウェイ, B-7
  - Management Server, B-3
  - SQL エンジン, B-8
  - Web ブラウザ, B-6
  - ポケットベル・サーバー, B-7
- トレース・パラメータ
  - TRACEFILENAME, B-8
  - TRACING.ENABLED, B-2, B-5, B-7
  - TRACING.LEVEL, B-2, B-5, B-7
  - VDB\_DEBUG, B-8
  - VDB\_SESSION\_DEBUG, B-8
  - VDB\_VERBOSE\_DEBUG, B-8
  - VDB\_VERBOSE\_SESSION\_DEBUG, B-9

## の

---

- ノード, ネットワークでの検出, 4-6

## は

---

- パスワード
  - SYSMAN, F-20
  - パスワード, リポジトリ・ユーザー, F-19
  - パスワードの再設定, F-20
  - 「バッチ ジョブとしてログオン」権限, 4-11

## ひ

---

- 日付, 書式の設定, F-20
- 表記規則, このマニュアルで使用, xi
- 表領域
  - CATTBS, 3-3
  - OEM\_REPOSITORY, 3-18
  - ROLLBACK, 3-18
  - SYSTEM, 3-18
  - TEMPORARY, 3-18
  - 既存のサイズを拡張, F-9
  - 作成, F-8

## ふ

---

- ファイル
  - oemctl バッチ, F-16
  - oms.log, F-14
  - oms.nohup, F-14
  - paging.cfg, B-7
  - paging.cfg.template, B-7

## ほ

---

- ポケットベル・サーバー
  - 構成および起動, 4-13
  - トラブルシューティング, F-18
  - トレース, B-7
    - TRACEFILENAME, B-8
    - TRACING.ENABLED, B-7
    - TRACING.LEVEL, B-7
- ポケットベル通知の作業環境, 指定, 4-17

## り

---

- リカバリ・カタログ, 3-3
- リポジトリ
  - サイズ設定, C-1, C-4
    - Oracle Change Management Pack, C-4
    - Oracle Diagnostics Pack, C-2
    - Oracle Enterprise Manager コンソールと DBA Management Pack, C-2
    - Oracle Management Pack for Oracle Applications, C-4
    - Oracle Standard Management Pack, C-5
    - Oracle Tuning Pack, C-3
  - バックアップ, 3-29
- リポジトリ, 削除, 3-33
- リポジトリ, スタンドアロン
  - データベース・ユーザーの作成, 2-13
  - データベース要件, 2-10
  - 表領域の作成, 2-10
- リポジトリ接続情報, 保存, 3-17
- リポジトリのアップグレード, リリース 2.x からリリース 9.0, 3-29
- リポジトリ・ユーザーのパスワード, 変更, F-19
- リポジトリ・ユーザー・パスワード, 3-10
- リポジトリ・ユーザー表領域の選択
  - OEM\_REPOSITORY が存在しない場合, 3-20
  - OEM\_REPOSITORY が存在する場合, 3-19

## れ

---

- レポート作成, 構成, 4-18

## ろ

---

- ロギング・パラメータ
  - LOGGING.DIR, B-4
  - LOGGING.ENABLED, B-4
  - LOGGING.FILENAME, B-4
  - LOGGING.MAX\_FILE\_CNT, B-4
  - LOGGING.MAX\_SIZE, B-4
  - LOGGING.SAVE\_PREVIOUS\_LOG, B-5
  - VDG.JOB.OUTPUT, B-3

